

産政塾

20

產政塾

この編は、三十歳前後の前途有為な若者が溢れる心の叫びを綴ったものである。

目次

● 産政塾20の発刊によせて

(財) 中部産業・労働政策研究会 加藤 裕 治

● 感謝 1

トヨタ自動車株式会社 池 田 篤 人

● 第20期産政塾を振り返って 11

デンソー労働組合 石 川 公 威

● 第20期 産政塾を振り返って 19

トヨタ車体株式会社 伊 藤 正 人

● 産政塾を振り返って 27

トヨタ紡織株式会社 井 前 研 太 朗

● 産政塾を振り返って 37

東邦ガス労働組合 遠 藤 登

● 産政塾で学んだこと 45

東邦ガス株式会社 太 田 敏

●産政塾を振り返る 53

●記念すべき第20期産政塾を大きくふりかぶって ジェイテクト労働組合連合会 大野田 有良 63

●第20期 産政塾を振り返って く気づき 中部電力株式会社 沖本 匡司 77

●相田みつを好きです 豊田市役所 柿本 理恵 85

●産政塾を振り返って アイシン精機株式会社 蔵田 英登 95

●第20期産政塾を振り返って 丸栄労働組合 鈴木 貴裕 107

●これまでの自分を見つめ直す 全トヨタ労働組合連合会 鈴木 祐生 117

●産政塾テーマ「殻の外へ踏み出す」とはどういうことを考える 松坂屋労働組合 田中 やよい 125

く10年後の自分に向けたメッセージとして 株式会社デンソー 田村 元

●産政塾を振り返って 137

株式会社豊田自動織機 外山 遥一朗

●産政塾物語く大きな一步と永遠の絆く 147

刈谷市役所 内藤 隆史

●自らの殻を破るとは 157

豊田自動織機労働組合 長倉 健司

●産政塾で学んだこと 165

全ユニー労働組合 中村 隆誠

●産政塾を振り返る 173

トヨタ紡織労働組合 永谷 啓介

●殻の外へ踏み出すために 181

豊田合成労働組合 三宅 洋右

●今後も人とのつながりを大切に 187

トヨタ車体労働組合 山口 智史

●永遠の偽善者 195

中部電力労働組合 與後 誠

●こだわりと熱意を持つこと		203
●自らの殻を探して		211
●今までの人生で貴重な体験		219
●産政塾に参加して		225
●第20期産政塾を振り返る		233
●産政塾活動記録		245
●歴代卒業生		261

名古屋鉄道労働組合 横井 功

東海理化労働組合 吉川 孝人

アイシン労働組合 六城 雅隆

トヨタ自動車労働組合 脇坂 一行

産政塾事務局 高橋 若葉

産政塾20の発刊によせて

(財)中部産業・労働政策研究会が主催している若手セミナー「産政塾」が、このたび第20期の活動を修了し、今期も26名の塾生が卒業いたしました。

産政塾は、毎年異業種の時代を担う20名あまりにご参加をいただき、約8カ月に渡って行うセミナーです。セミナーといっても、あらかじめ事務局が用意したものを受講するといった通常のスタイルとは異なり、参加した塾生が5つのグループに分かれ、そのグループごとに企画し、現地に向いて体験や教を請うといったプログラムを組み、それを塾生全員で学ぼうとするものであります。また、産政塾は異業種の若者の集まりですから、多様性を取り入れた論議の場でもあります。企業や仕事の枠を越えて、お互いが夢を語り、講師を交えて論争をし、論争の中から新しいエネルギーが生み出されもします。この活動を通して、参加者は自らの考えを改めて検証し、自分自身の存在や役割を自覚することができることとなり、産政塾は言わば「自らを磨く道場」というようなものです。

今期も産政塾への参加者は30才前後の若者達であり、意欲においても能力においても次代を担うにふさわしい人材の集まりとなりました。

人間形成の基本の時期は青春期であると言われておりますが、仕事や家庭における人間としての枠を形成するのは30才前後からの10年ぐらいと言えるでしょう。一応仕事にも慣れ、自分で判断できる能力も備えつつあり、精神的にも肉体的にも充実し、仕事面でも家庭面でも先頭に立つて活躍する時期であります。このような若者が集う産政塾は、今期も塾生がお互いに夢を語りあい、自らの企画によってその実践に情熱を注ぎ、そして8カ月にわたる活動を終え、このたび修了いたしました。

第20期にあたる2009年は100年に1度と言われる経済危機の中、会社や労働組合で通常以上の諸施策に対応する中、塾生は各グループでよく話し合い、「創造性」「独創性」「チャレンジ精神」に富んだ実のある企画をしてくれました。このセミナーを通して、参加者一人ひとりが新しい時代に対応するパラダイム、ものの考え方を築くための「何か」を得ることができたものと確信しています。

この塾誌は、第20期塾生が産政塾での様々な体験を踏まえて、自らの想いを綴ったものです。ぜひ一読いただければと存じます。また、産政塾は極めて小規模の催しであり、参加対象も限定されたものではありませんが、こうした塾誌を通して一人でも多くの方の共感を呼ぶことができればと思つて毎年発行しています。塾生と同世代の方々の糧となることはもとより、指導的立場にある方々にとつても参考になることが多いと思います。

最後に、これまで産政塾の運営に対して格別の理解と協力を賜りました講師の方々をはじめ、関係各位の皆様にご感謝を申し上げます。また同時に産政塾および塾生に対して今後ともご指導、ご声援を賜ることができれば誠に幸いです。

感 謝



トヨタ自動車株式会社

池 田 篤 人

《プロフィール》

- いけだ あつひと
- 1977年 京都府生まれ
 - 2000年 トヨタ自動車(株)入社 人事部厚生室所属
 - 2003年 トヨタパーソナルサポート(株)に出向（この所属で産政塾に参加）
 - 2009年 全トヨタ労働組合連合会 政治・対外政策局
現在に至る

〈家族構成〉 妻・愛犬（ミニチュアダックスフンド）

〈趣味〉 飲酒・居眠り（電車乗り過ごし）

まずは記念すべき20期目の産政塾に参加できたことを幸せに思う。

私を産政塾に選出いただいた上司、研修期間中に力を貸して頂いた職場の方々、今回共に学んだ産政塾生・事務局の皆様、そして研修にご協力いただいた講師の皆様、感謝の気持ちで一杯である。

「異業種勤務者の考え・思い等を、直接の会話で体感できる機会は滅多になく、自身の業務領域を広げる上でも貴重な体験だと考えたため。」これが産政塾の案内要領を拝見して、私が率直に感じたことである。実際に研修を通じ、これからキャリアアップする上で、ありきたりな表現だが、非常に貴重な経験を得ることができた。（様々な人との出会いは今後私の財産となろう）

節目となる20期目の産政塾は、新型インフルエンザにより研修が延期になったこと、訪問先の一つであった独立リーグが撤退してしまったこと、衆議院の解散総選挙により研修が一旦中断するなど、塾発足以降、非常に記憶に残る回になったのではないだろうか。このような「縁」に巡り合えたことに感謝。

史上最年少の市長（研修当時）とお会いした際は、見た目は同世代（私の方がよほど年上に見える）ながら、一言ひとことの重み・存在感は他を寄せ付けないものだったと感じ、まだまだ自分の人間力の弱さを感じた。（当たり前な



がら)

市長と会話する中で特に感銘を受けたのは【強い意志に裏付けされた『行動力』】【『信念』を貫く】【『説明責任』を果たす】ということ。これらは私の今後の人生・業務において、非常に意味のあるものだと思う。

実際に自身を振り返ると、本年春先は業務の負荷が非常に高く、従業員からの意見・要望（一日数百件）や数多くの調整事項などにより心身共に疲れ切っていた時、ふと我に返り【『信念』を貫く】強い意志で、数ある要望に【『説明責任』を果たすなど業務に奮起し、それを一定の成功に導くことが出来た。これも市長との出会いで3つのキーワードを心に刻みつけたことが大きく影響していると思う。従業員の福利厚生を扱う業務柄、苦情めいた会話が多くの中、「ありがとう！」とわざわざ電話をいただいたこと、これからの社会人生活の中で忘れることはないだろう。

人間力豊かな市長との出会い。これも何かの「縁」。この縁に巡り合えたことに感謝。

豊田市の自然農園での研修は我々の班の企画であったが、昨今、注目度の高い農業にスポットを当てたこと。システムエンジニアから一転、農業に転職した異色の経営者を訪ねたこと。実際に畑の土をいじり、すくすく育ったミニミズに久々触れたこと。通常に市販された野菜と有機野菜とを食べ比べ、有機野菜のみずみずしさ・味を改めて体感し、また、農業の深さを感じたこと。自画自賛ながら良い研修だったと思う。唯一の後悔は、今回の企画にあたり、自身として夜の懇親会（野菜の食べ比べ）

のみの参画となり、その他全般の企画を、リーダーを始め他のメンバーに任せてしまったこと。この後悔はぜひまた次の機会で返そうと思う。

この研修では園主の【圧倒的な行動力】に脱帽。自分の身の丈を思い知らされた。さすがに今のところ脱サラする勇氣はないが、自身の行動の領域を可能な範囲で広げてみようと思う。

チャレンジ精神旺盛な園主との出会い。これも産政塾に参画しなければ恐らく得られなかった「縁」。この縁に巡り合えたことに感謝。



新型インフルエンザの関係で急遽事務局企画になった健康宅配便のトレーナー講師（わざわざ神戸から来ていただいた）による講義は、講師の人間性もさることながら、自然と耳を傾けたくなるカリキュラム、かつ引き寄せられる話口調は非常に勉強になった。相手に何かを伝える方法は人それぞれだが、上手下手は生まれ持った天性なのかもしれないと感じる。私には到底真似できない。この講義では「心の健康」に主眼を置いたものだったが、物事を見る・感じる価値観が変わったような気がする。「恥ずかしがらずに行動する」「躊躇しないで行動する」ことの大切さを学んだ。また、この日ジャンパンのコレクションを使った簡単足つぽマッサージ（リラックス方法）を学んだが、数日後、コルク欲しさに早速酒屋でジャンパンを買い、その日中に一人で完飲したのは言うまでも

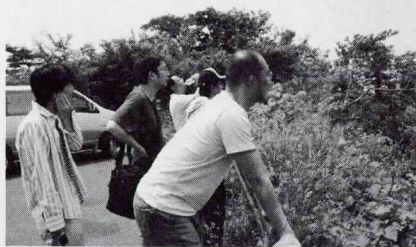


ない。(コルクとアルコール、どちらに優先度が高かったかは不明)

相手に物事を伝えることに天性の才能を持った(と私が勝手に思っている)講師との出会い。これも新型インフルエンザが蔓延しなければ、また独立リーグが撤退しなければなかった「縁」。この縁に巡り合えたことに感謝。

唯一の宿泊研修で、世界遺産登録を目指した(本年も手を挙げたと新聞に載っていた)活動を体感した奥州平泉。2日間を通じ、事務局の方・町民の方との会話や数ある重要文化財・澄んだ自然の現地現物を通じて、自身の正直な気持ちを総括すると、「世界遺産に登録すべき町なのか疑問」である。

本年の東京五輪招致と同じように、事務局の方は熱いものの、まだまだ全ての町民の理解を得られていないこと、周知ポスターもまばらで街として登録活動を推進しているようには見えなかったこと、過去の戦により原型を留めていないものが多く、遺産と呼べるのか疑問だったことが主なところ。しかしながら、この研修を通じ、事務局の方の熱意・ご苦労の数々は痛いほど感じた。そして「世界遺産に関する関心度と、(平泉という)町の知識は正比例している。」という事務局の方のお言葉は、自身の業務に精通していることが多く、いかに従業員に知識を伝え、関心を持ってもらえるかに自身の力量が問われていることを感じ、この点を今後自身が業務を遂行する上で意識しよ



うと思う。岩手の名産の数々を食すことも出来たし、非常に有意義な研修となった。

目的を達成する難しさを痛感している方との出会い、これも平泉を訪れることを夢見て、それを産政塾で実現したDグループリーダーがいてこそ。これも何かの「縁」この縁に巡り合えたことに感謝。

「プロのサービスを学ぶ」をコンセプトに顧客満足度2年連続No.1に輝いたホテルでの研修。ここで実感したことは、「要望は全て応えることを念頭に置いている」「今まで要望をいただいた中で、無理難題と思ったことはない」「お客様に喜んでもらえることが生きがい」などの従業員の会話内容にもあるように、仕事に対する「信念」を通り越し、まさに天職として仕事をされていると感じる方が多かったこと。この方々と同じ志で仕事をするためには、自身の仕事への価値観を改めて見直す必要があるのだと感じた。今回の研修も、社長の講輪に始まり、実際の部屋見学（各部屋にコンセプトがあり、一つひとつ思い入れが違う）、期待察知能力を高める講義など盛りだくさんであったが、このカリキュラムは社外に対する研修実績のないホテル側で作成されたものだという。まさに「要望は全て応える」という顧客満足・顧客歓喜の信念の現れだ。このホテルには本当に脱帽。（最後には優待券なんかもらっちゃったし）

従業員の福利厚生を担当する者として、お客様（＝従業員）に対する姿勢を学ばせてもらったホテ



ルとの出会い。これも何かの「縁」。この縁に巡り合えたことに感謝。

雨模様の中行われた、堀川での清掃活動。この研修に参画し、人間が実際に取った行動（「ゴミを捨てる」）で、川にゴミが溜まり、川が汚れ、川で自然に育った魚達がそこで浮いているという「現実」を知った。我々は見て見ぬ振りするのではなく、自分たちが行った「事実」を重く受け止めなければならぬと痛感した。これはなかなか普段の生活では感じることはできない。私が感じたことを周りの人と共有するには、まずは「やってみる。行動する。」これが全ての始まり。行動するためには、周りの人間が強制的にでもその機会を作ることが必要なのだと感じた。

（周りの人間がきっかけをつくり）①行動する。②（現実を）知る。③（自分を）振り返る。④（自分を改め）行動する。この工程を皆が実践することで、自然は変わる筈だと思う。

今回体感した汚染や環境問題に限らず、様々な問題が発生しても行政を始め他に頼るだけでなく、自らが行動することで改善できることはあるはずで、そこにいかに目を向けるか、自分に何が出来るのか考えなければならぬ。

私は、今までの自分を振り返り、「一日一善活動」として少し前から始めている、オフィスや路上でのちょっとしたゴミ拾いを更に意識して継続し



ている。自分の背中を見せることで、周りの人がそれに追隨してゴミ拾いが当たり前のように根付く社会が出来ればと思う。

企画を立案するも度々のアクシデントに見舞われながら、くじけずに今回の企画を立案してくれたBチーム。堀川での清掃活動も数あるアクシデントがなければ実践することがなかったであろう。これもやはり「縁」。この縁に巡り合えたことに感謝。

産政塾という研修を通じ、テーマである「殻の外へ踏み出そう」というテーマを振り返ると、今までの凝り固まった小さな視野を大きく広げるきっかけを与えていただき、物事に対する価値観・考え方に新たな視点が見えてきた。後はどこまで積極的に行動に移せるか。そういう意味では、殻から右足の親指くらいは出せたのではないかと思う。一歩ずつ踏み出した。(確か閉塾式では「殻は破れた」と言っていた気がするが、そこはご勘弁)

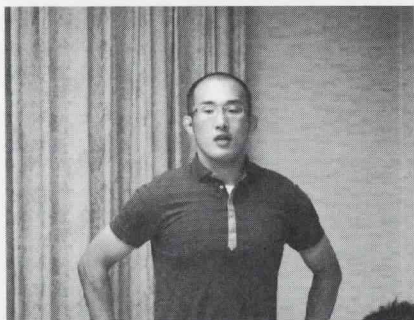
私はこの産政塾に参加するにあたり、心に決めていたことがある。それは「何が何でも皆勤賞」ということ。そのために必要な業務は時間が遅くなってもやり抜いたし、仲間を信じ、託すところは託した。職場の最大限の協力もあり、幸いにして全ての研修に参加することができたことは、自分にとって財産である。職場の仲間から感謝したい。

「殻を破る」という定義は人それぞれ様々だと思うが、第20期の産政塾生・事務局の方と、「殻の外」

の視界や、殻を外に出た後の成長の証などをこれからも酒を酌み交わしながら語り合いたいと思う。せつかくこんな貴重な経験をさせてもらったので、身体ばかりが大きい私だが、もっともっと人間としても大きくなれるよう、日々邁進していく所存である。

最後に、労働組合の方とは会社の立場で対組合窓口としての接点がほとんどであったが、産政塾への入塾をきっかけに、たくさんの専従者とお会いし、その価値観などを共有することが出来た。

産政塾を終えた今、今は私が労働組合という立場に。これも何かの「縁」なのだろうか。この縁を無駄にせず、飛躍の起点としたい。入社以来ずっと同じ職場で勤務しており、少なからずマンネリ化していた毎日に、このようなチャンスをいただいた上司に改めて感謝。



第20期産政塾を振り返って



デンソー労働組合

石川 公 威

《プロフィール》

いしかわ きみたけ

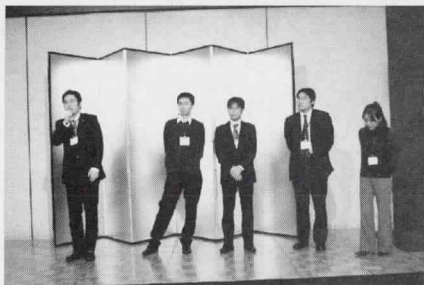
- 2004年 (株)デンソー入社 熱システム開発部配属
- 2005年 冷暖房技術2部
- 2007年 冷暖房技術3部
- 2008年 デンソー労働組合専従執行委員
現在に至る

〈家族構成〉 妻

〈趣味〉 サッカー、旅行、一発芸

【第1回 開塾式】

かれこれ1年以上前の事ではやけた記憶でしかないものの、突然振って沸いた塾への参加と、最初から企画を考えてくるようにとの早速の宿題。過去に参加した先輩からは「楽しい所だ」といい意味にも、悪い意味にも取れるアドバイスと「1回目が非常に重要!」というアドバイスを受け、緊張しながら会場に向かった事を覚えている。各グループに分かれての自分のグループでの企画について1回目で決定。ここで「1回目が非常に重要!」というアドバイスの意味を理解した。(ここで決めた企画とは全く関係ないものになったグループもあるが)ともかく当Eグループも企画が決定し、懇親会へ突入。自己紹介の資料を見ていると素晴らしい人柄の人がいるなあとはいつつやはり考えのしつかりした人が多いことを再確認。とにかく手探り状態の1回目だった。自分たちのグループの企画をすることも大変だと感じつつ、第1回は終了した。



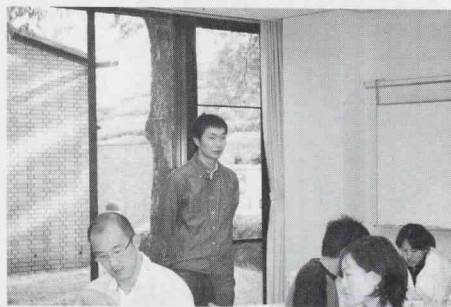
【第2回 松阪】

欠席…。この時は自分の担当していた組合内での業務が佳境に差し掛かっており、多少の迷いは合っ

たものの、やむをえず欠席。またこの時までに自グループの企画の打合せが入っていたもののそれに参加できなかった。この場を借りて同グループメンバーにはお詫びします、申し訳ありませんでした。

【第3回 農業】

第2回を欠席しており、久しぶりの参加となった。しばらく塾生とは会っていなかったので他のメンバーの輪に入れるかとの不安もあったがさすが産政塾メンバー、自分の殻は既に薄皮は破れているのかスムーズに合流できた。雨が降り多少寒い感じでもあったが、松本自然農園での農業についての話、講師となっていた松本さんの経歴を聞くと、やってみたい事をやっている方で殻に閉じこもっている人ではないことを感じた。多少の雑草取り（労働力か？）と畑の一面で鋤を使って野菜を植えさせてもらった。通常の農業のやり方とは大分違うだろうなと感じつつ、あの野菜は無事育ったのかどうかと原稿を書いている現在ふと思いついた。その後、トヨタグループの労働組合には馴染みのつどいの丘にて懇親会。通常の野菜と有機栽培の野菜を焼いて食べた。塾長は「有機栽培の方がおいしい」と言っていたが、自分の舌ではそこまで感じ取れなかった事は今だから書ける事となっている。これまで自分の仕事とは全く関係ないことを体験でき、よい経



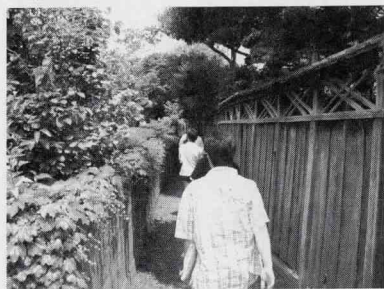
験になった。

【第4回 健康】

第4回の経緯は良く分かっていないが、当初は野球の関西独立リーグだったらしい。それがインフルエンザや関西独立リーグの運営側の離脱により、なにやら職場から歩いて10分の会場に変わったとの事。この回は事務局企画となり内容は健康講座となった。いろいろ教えていただき「健康のためにコルクを踏もう」となったとかならないとか。この回のフォーラムの写真に私が写っており、職場の同僚から「これなにやつてる写真？」と聞かれたので「体操です、健康になりますよ」と宣伝をした。

【第5回 平泉】

産政塾唯一の泊まり企画。場所は奥州平泉。私自身、実家が仙台のため大
学時代までは近くにあつた平泉だったが行つたことがなかったので楽しみに
していた。しかも観点として、世界遺産登録活動に関してとのことで普通の
観光とは違う、また説明していただく方も通常の観光と言う事ではなく、世
界遺産登録活動専門の担当の方から説明していただく事となり、個人での観



光とは全く違う見方で説明が聞けることから楽しみにしていた。天気もよく、むしろ6月の東北地方としては暑い位の中、平泉での世界遺産登録活動について各所を巡りながら説明していただいた。それぞれ中尊寺金色堂では金色堂をガラス張りにし、さらに外側を新覆堂で囲っている。外国人の審査員からするとそれが不自然との指摘を受けているらしい、その意見もなんとなく分かる。保存のためにはしょうがないとの意見も分かるが難しいところだ。ただし、世界遺産としては単体ではなく町全体を登録することとで今後の活動についても結果が実ればいい事だとは思う。この回も自分の関わっている業種とは全く異なり、文化財保護・町の活性化などこれまで自分が関わらない分野の意見が聞けたことは、自分へプラスになったと感じる。

【第6回 ロイヤルパークホテル】

7月に行われた我がEグループの企画。CS (customer satisfaction) について学ぶと言う事で企画段階より、これまでの会社生活ではあまりなじみのない分野について学べる機会と感じていた。しかし、企画での打合せ等にはなかなか出席できず、リーダーに頼りっぱなしだったと感じている。自分の役割として懇親会についてもCSにこだわった会場セッティングも行った。宿泊ではないものの、東京開催のため、研修会場と懇親会場の距離・その中でも顧客満足を満たせる場



所を鋭意検索、事前の下見まで実施しつつ最適な場所にて開催決定。

当日研修においては、ホテル従業員の顧客を大切にすることを学ばせていただき、これまでの会社・組合業務では意識することのなかった事を学ぶ事ができた。会社でのこれまでは納入先の事を考えつつもやはり工場の事を考え、組合でのこれまでは組合員のことは考えつつも他にも考える事（実現できるかの判断・組合員への平等性等）もあつた。ホテルでのサービスの精神は客からの個別の無理難題に対しても対応すると言つた、客のためになんとかする姿勢を感じ取れた。ホテルの作りにしても、どうすれば客が最もリラックスできるのかを考えたものになつており、顧客第一主義の精神を感じた。少ない予算ながら、おいしい昼食も出していただきありがたい事です。



懇親会場については「居酒屋甲子園」で決勝にでており、従業員も明るく顧客を大切にすることを学ばせていただき、最終的にはその後の閉塾式のみに参加とされた。東京に行くことがあれば再度いつてみたい。「居酒屋甲子園」決勝では敗れてしまった。研修時に対応していただいたロイヤルパーク汐留の方々、懇親会場の従業員の方々には感謝です。

【第7回 堀川】【閉塾式】

業務の都合により欠席。途中からの参加もできたものの、最終的にはその後の閉塾式のみに参加と

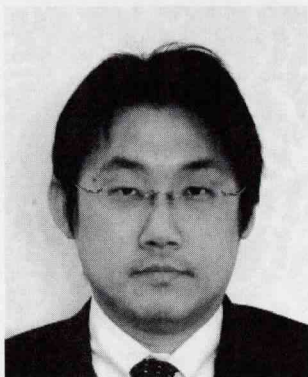
なってしまった。これまでの経験を振り返り殻を破れたかを考えた時にこれまで狭い世界（製造業）だけでの視点しか持てていなかったが、他の塾生との交流は自分の視点を広げる事につながり、それは自分の殻を破れる事につながっていると感じている。

【全体を通して】

8か月間の塾生生活を振り返ると結果的にはほとんどの回に出席している。当初はそんなに出られな
いだろうと考えていたものの、出席するために業務の都合をつけ、何とか出席している状況も合った
のはやはり出席する事が楽しかったからだと思う。最初に先輩から「楽しい所だ」と意見をもらって
いたがそれはやはり良い意味で楽しかったからこそ出来た事だと感じている。自分の殻が完全に破れ
たかどうかは自信を持って破れたとも言えないが、そのきっかけ作りにはなり今後の業務に活かせる
ものになった事は間違いないと感じている。

最後に、塾生活では加藤塾長と話したりして近く感じていたものの、9月の全ト定期大会の席では
壇上、いつもの省エネルックで来賓の席に座っているのを見て、改めてすごい人だったことを認識し
た次第です。

第20期 産政塾を振り返って



トヨタ車体株式会社

伊藤 正人

《プロフィール》

いとう まさと

- 1998年 トヨタ車体株式会社入社
- 1998年 総務部 法務・管財室配属
- 2007年 人事部 人事室
現在に至る

〈座右の銘〉過去と他人は変えられないが、未来と自分を変えられる。

〈趣味〉レース観戦、ドライブ、洗車、車雑誌読書など車全般
甘いものを食べること

1. はじめに

会社に入って10年あまり、なかなか異業種の方と接点をもつ機会がなかった私にとって、異業種の方と一緒に業務では体験できない経験を積ませてくれる産政塾はまさに今期の産政塾のテーマである“殻の外へ踏み出す”きっかけになるものであり、ひとまわり大きな人間に生まれ変わる気持ちで参加した。

ここに私の参加した活動を振り返る。

2. #2産政塾『若手政治家に聞く（松坂市長との懇談）』

自民党政権から民主党政権に交代し、今でこそ官僚主導から政治主導への取り組みで政治に注目が集まっている。しかし、2009年1月に「まつさか（三重県松坂市）を変えなあかん」と声を上げ、財政難に陥っている松坂市を建て直すべく、市民の期待を一身に背負った若きリーダー（山中市長）が誕生した。当時の最年長市長であり、私より年下の33歳というこの若きリーダーは、どのような人物で何が市民の心を捉えたのか？マニフェストは実現できるのか？という思いをめぐらせ、私は松坂市役所の門をくぐった。なお、松坂市は三重県のほぼ中央に位置し、山林が70%を占める街で、世帯数はここ30年間で1.5倍の伸びを示しているが、核家族化、少子高齢化が進んでいる。そして何より市



の財政が緊迫しており、約1300億円もの借金を抱えている。

山中市長とは1時間あまりの懇談だったが、その小柄な風貌からは想像がつかないエネルギーと強い信念、情熱がひしひしと伝わるものであった。山中市長の市民のためになるのならマニフェストを変えることをもいとわない姿勢、誰にも媚びず、隠さず、思いを貫き通すポリシーに私は魅せられた。山中市長は市長になる前、医師として南アフリカやジンバブエ等の医療体制の調査などを通じ、多くの痛みは政治の悪さが原因であるということを感じとり、政治の世界へ飛び込んだ人である。

徹底した現場主義で、時間があれば休日もいとわず市民の声を拾いに出かける現場第一という点に、やはりどの世界でも「現地現物」が重要であることの再認識をさせられた。また、強いリーダーシップの必要性、リーダーの資質とは年齢ではなく、本人の強い意志と決断力、行動力であることもわかった。これらのことを意識し続け、今後の業務に生かして生きたいと思う。私は数年後、山中市長のもとで大きく変わった松阪市を再び訪れ、この目で変化を確かめてみたいと思っている。

3. #3産政塾『いれからの「農業」について考える（松本自然農園での農業体験）』

世界規模での食料輸入や食品偽装事件などの影響から、昨今、食の安全・安心が叫ばれており、私自身も食料品を購入するときは以前にも増して生産国や産地の表示を意識して購入するようにしてい



る。日本の食料自給率（カロリーベース）は約40%であり、アメリカ128%、ドイツ84%、フランス122%と比べても、いかに日本が食料を外国に頼っているかがわかる。輸入に多くを頼っていれば輸出国の輸出制限や有害物質混入による流通規制など数多くのリスクを伴うことになる。私たちがそれぞれ住んでいる地域には、その風土や環境に適した食べ物があり、身近で採れた食べ物は新鮮であり、特に日本は豊かな自然の中で旬の食べ物を食べることが環境にも体にも優しいと思われる。

今回、個人で無農薬野菜を生産・販売している「松本自然農園」を訪問し、農園見学と農作業体験を通じて食の安全と食料自給の大切さを学んだ。農園主の松本さんはユニークな経歴の持ち主でサラリーマンとして3年間働いた後、自転車で日本一周の旅に出発し、その過程で偶然にも有機農業を知り、自然農園を始めた人である。松本さんの農園は、無農薬栽培は大前提であるが、栽培方法も自然環境と共存するために野菜と野菜との間に生い茂った雑草をそのままにしたり、カマキリ、カエル、 TENTOウムシなどの生き物を沢山住める環境にしている。雑草は、よい土を作るための手段となり、生き物の住処として食物連鎖を促すことによつて、おいしい野菜が作れるとのことである。これまで私は、雑草は養分をとられてしまうので抜くものと思っていたが、この逆の発想には驚いた。また、通常作物には水をたっぷりやることで大きく育つと思っていたが、松本さんは苗を植えた最初だけたっぷりやり、あとは乾燥だけ気をつけて放っておいている。松本さん曰く、水をやりすぎると過保護になり野菜の生命力を奪い、おいしくならないとのこと、これにも驚かされた。思い込みや従来からの慣習にとらわれることなく新しい視点や発想をもつてチャレンジすることで、よい結果が得

られることがあるということを実感させられた。

今回の農業体験を通じて久しぶりに畑を見て、土を触り、いかにこれまで農作物の生産性について無関心であったかということに気がついた。現在の日本の農業は食料自給率の低下や後継者不足など様々な課題に直面しているが、抜本的な対策がなかなか行われていないのが現状である。生産者、食品工場、販売者、飲食店および消費者が一体となってそれぞれの立場で農業を活性化させる取り組みが必要と思う。さしずめ私は地産地消の率先と農家の人のがんばりを意識し、興味を持つことが農業の発展への礎になると信じて続けていたいと思う。

4. #4産政塾『奥州平泉の世界遺産登録活動に学ぶ』

世界遺産とは、世界遺産条約により世界遺産委員会が各国から推薦のあった物件の中から顕著な普遍的価値を有すると認めて「世界遺産一覧表」に登録されることをいう。日本の世界遺産は、2009年6月現在、14件登録されている。今回訪れた平泉市は12世紀に奥州藤原氏により浄土思想を基調として完成された日本の北方領域における政治・行政上の拠点である。特に文化的景観の構成要素である中尊寺、毛越寺等の寺院建築や庭園群は、浄土の世界を具現化した空間造形の傑作であり、その背景を成した精神性は宗教儀礼・行事を通じて現在にも確実に継承されている。平泉市は2001年7月の世界遺産委員会で登録延期の決議がなされ、現在、再度の登録に向けて町全体をあ

げて登録活動を進めている。その中核をなす中尊寺は、藤原清衡が12世紀初頭から四半世紀をかけてその精神的な中核として最初に造営し、政治・行政上の拠点である平泉の北の入り口を固める重要な役割を担わされていた寺院である。中尊寺金色堂は、阿弥陀堂建築であり、国内に現存する最古のものである。金箔の装飾・蒔絵などの漆芸・金工の意匠・技術が尽くされた金色堂はきらびやかでまぶしいものだったが、金色堂保護のために覆っているコンクリートの造覆屋について、私は違和感を感じずにはいられなかった。また、中尊寺では1998年に四代泰衡の首桶から発見されたハスの種子が800年の時を超えて発芽・開花し、大池跡に植えられており、植物の生命力の高さに感銘した。

平泉の町は、町の景観を守るために景観条例があり、建物の制限や派手な色に対する規制など多くの取り決めがされているため、非常に美しい町である。これは世界遺産登録されるためには文化遺産そのものに加え、文化遺産を保護するための周辺環境や景観（バッファゾーン）も条例等により保護されていることが必要なのである。グループワークで町の中を歩き、町の風情を感じながら地元の人々に平泉の強みや弱み、世界遺産登録についての感想を伺った。町の多くの人々は、世界遺産登録を目指すことによって、平泉の町を良くして行こうという意識に変わったと言っていた。また、ぜひとも町の活性化のために世界遺産登録されることが住民の願いとも感想を述べていた。平泉の町の方の熱い思いが伝わり、私は世



界遺産登録されることを願うばかりである。

5. #6産政塾『プロのサービスを学ぶ』

これは私が属するグループの企画である。我々グループメンバーは事務職や技術職の方で構成されており、サービス業に携わる人がおらず「対お客様」という観点を学ぶことが殻の外へ踏み出す架け橋になるのではないかという思いで企画した。今回は数あるサービス業の中で「ホテル」業界に焦点をあて、サービス・CS (Customer Satisfaction 顧客満足度) について学ぶことにした。今回訪問したロイヤルパーク汐留タワーは、2007年と2008年に日本ホテル宿泊客満足度調査 (J・D・パワー・アンド・パシフィック調査) で宿泊客満足度第1位 (1泊15,000円〜35,000円未満部門) を受賞しており、サービスをはじめとするホテルの取り組みがお客様に高く支持されている。

社長およびホテルスタッフよりCSに対する思い、取り組みについて話を伺った。お客様はもちろん、ホテルの看板を背負いお客様に接するスタッフを大切にすることも非常に重要とのこと、スタッフの満足度の向上 (Employee Satisfaction 従業員満足度) を図り、やる気・社内の雰囲気を高めることにも情熱を注いでいた。研修中にスタッフの方々の社内での様子を映し出すビデオが放映されていたが、スタッフの皆さんの生



生ききした笑顔がとても印象的であった。客室見学もさせていただいた。客室清掃スタッフが、お客様が快適に過ごすことができるようアイデアとこだわりをもって、美しさ・清潔さについて競い合っており、強い感銘を受けた。スタッフの方と直接意見交換をする中で「お客様から頼まれたことに不可能はない」「CSで一番大切なことはお客様の立場に立つて聞く耳を持つこと」などという言葉がスタッフの方から発せられ、CS向上に対する意気込み、お客様への心遣いに頭が下がる思いだった。振り返ると自らの職場に帰って業務を進める際にお客様を意識することの大切さが感じ取れた研修だったと思う。今回お世話になったロイヤルパーク汐留タワーのスタッフの皆様には筆舌に尽くしがたい感謝でいっぱいである。

6. 最後に

いずれの研修も、様々な人に出会い、日常の業務では得ることのできない世界を知ること、新しい考え方や視点を感じ取り、自分の幅を広げることができるきっかけとなる研修であった。また、同じ世代の産政塾参加者と議論をすることで自分の経験にはない発想や考え方を直接感じ取ることができき躍らせる刺激も受けることができた。そして何より、閉塾後もつきあっている良い仲間に出会えたことが何よりの財産となったと思う。産政塾の事務局の皆様、ありがとうございました。

産政塾を振り返って



トヨタ紡織株式会社

井 前 研太郎

《プロフィール》

- いのまえ けんたろう
- 1982年 神奈川県 横浜市生まれ
 - 2006年 トヨタ紡織（株）人事部配属
現在に至る

〈趣味〉 スポーツ観戦、お酒を飲むこと

①入塾のきっかけ

ある日突然、「産政塾に参加しないか？」と突然上司から言い渡された。その当時、昇格者教育の企画・運営、新入社員教育の準備等、業務が繁忙期を迎えており、「産政塾って、何やっている所？」「また面倒なことに巻き込まれるのか」と感じ、返事を適当にごまかした。申込の期日が過ぎ、上司から「参加の返事をしたか？」と督促され、渋々参加することにした。これが、産政塾に入塾することとなったきっかけである。

以下、活動内容（自身が出席でき、印象に残ったもの）について、順次述べていきたい。

②入塾

記念すべき第20期生として、「産政塾」に参加することとなった。社外の仲間を作り、視野を広げてこいとう上司から激励され、非常にありがたかったが、その反面、不安もかなりあった。というのも、過去「産政塾」に参加した職場の先輩の話を聞いたところ、入社10年目前後、平均年齢30代前半であること。また、各社の有望な方達が集まる会合だと聞いたからである。その点、私自身、いずれにも該当しておらず、本当に「自分が会社代表で良いのか？」「会社の看板に泥を塗ることにならないか？」などなど、不安が尽きなかった。しかし、開塾式を迎え、その気持ちは、一気に無くなった。

③ 開塾式 (2009年2月4日)

とうとう開塾式を迎えた。私は、Bグループに割り振られ、メンバーは私含め男性6名のグループだった。

最初の自己紹介では、皆初めてということもあり、メンバー全員が緊張しており、私自身も非常に緊張していて、何を話したか正直全く覚えていないが、「本当にこの先大丈夫だろうか？」と不安になったことだけは覚えている。

しかし、企画立案の際に、その不安は完全に払拭され、期待感で一杯となった。メンバー全員が、様々な案・意見を持っており、グループとして意見をまとめることが困難な程だった。

このグループなら、素晴らしい企画ができるに違いない、お互い、切磋琢磨しながら、色々なことを学べるに違いないと胸を高鳴らせた。

④ 第2回「若手政治家に聞く!」(4月10日)

残念ながら、業務都合で欠席いたしました。事務局の高橋さんからのお土産(松



坂牛チップス)、美味しくいただきました。誠にありがとうございました。

⑤第3回「これから」の「農業」について考える(5月8日)

「農業」をテーマとして、豊田市の山奥にある「松本自然農園」を訪問し、農家の松本さんのお話を伺い、農業体験を行った。

話をうかがって、非常に印象に残ったものが、松本さんの価値観・人生観である。松本さんは話の中で

「自分のやりたいことを仕事にできる喜び」

「新しいことに挑戦する喜び」

「本当に自分のやりたいことを仕事にできるのは幸せなこと」

「20代、30代は、守りに入るには早すぎる。色々なことに挑戦して、経験して、失敗だつてするけれども、まだまだ失敗したつていくらでも取り返しができる」

「失敗を恐れて何もしないようなつまらない人生は送りたくない」

「目標もなく漠然と生きていくなんてもつたいない」
などなど。

私は、耳が痛くなった。日々、自身に課された業務を淡々とこなす日々…。自分の本当にやりたい

事や、挑戦し続ける事、目標など、全く考えていない自分がいたからだ。

また松本さんは、農薬を使わない、「自然農法」を推奨しており、雑草一本にしても、肥料として活用するなど、自身の仕事に信念とこだわりをお持ちで、それが畑にそっくりそのまま松本さんの「個性」として反映されていたことに、非常に感銘を受けた。

自身の仕事に置き換えた際、どれだけ自身の仕事にプライドと信念、こだわりを持っていたのだろうか？今まで上司に言われた事だけをやっていなかっただろうか？今後、自身の仕事にこだわりを持つて、個性を出していきたいと思う。

最後に：懇親会で、有機栽培で作られたレタスと農薬栽培で作られたレタスの食べ比べを行った。有機栽培のレタスは、非常に甘く、農薬栽培のレタスは、味が全くしなかった。スーパーで、自身が買い物をする際、見た目が美しいもの（農薬栽培のもの）を選んでしまうが、それは、農薬で見た目が美化されているのであって、味は全く別物なのだという事に気づかされた。

⑥第5回 奥州平泉の世界遺産登録活動から学ぶ（6月26日～6月27日）

急速なグローバル化が進む昨今、私自身、上司からの指導も在り、世界を視野に入れた仕事を余儀なくされているが、世界にばかり気を取られ、日本国内に着目する事が少なくなってきた。

本会合では、奥州平泉に訪問し、実際に史跡を巡り、地域住民に話をうかがうことで「日本の良さ・

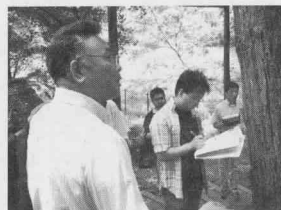
強み」について見つめ直す良い機会となった。「日本の良さ・強み」とは、私見だが、「一つの目標に向かって、愚直に泥臭く、前向きに、チーム一丸となつて取り組めること」であり、地域住民と行政が、一体となつて世界遺産登録に務めている姿からもうかがえた。

また、余談になるが、私も学生時代に、短期間、カナダに留学をしたことがある。その際、自国の歴史・文化について、その場で瞬時に発表しなければならないことがあり、語学の問題ではなく、自身の教養の無さ故に、大失敗した苦い思い出がある。今後、真のグローバル人材となる為、語学だけでなく、自国について説明できるだけの教養を身につける必要があることを、本会合で痛感した。

⑦第6回プロのサービスを学ぶ（7月16日）

本会合では、東京 汐留のロイヤルパークホテルを訪問し、一流ホテルのサービスを学んだが、自身の日頃の業務がいかに怠慢であつたか思い知らされた。

ロイヤルパークホテルでは、お客様視点に立ち、ちょっとした気遣い、心配りで、お客様の支払った対価に見合う以上のサービス提供を心掛けている。またそれだけでなく、お客様の潜在的な期待を察知することで、顧客満足から顧客歓喜を目指し



ているそうだ。

自身の業務を振り返ってどうか？

私は、現在、人材開発部 人材育成室という所に籍を置いており、従業員の教育を企画・運営することを仕事としている。すなわち、従業員がお客様である。しかし、ロイヤルパークホテルのスタッフの方とは異なり、日々の業務に忙殺され、研修後のアンケートを斜め読みするだけで、お客様の意見に耳を傾けたつもりでいたことに今更ながらに気がついた。以後、「現地現物」の精神を貫き、業務多忙でも、直接関係者に話を聞き、従業員（お客様）目線で、教育を企画・運営していきたい。その結果、満足だけでなく歓喜につながるような教育が提供できたら良いと思う。

また、ロイヤルパークホテルのスタッフの方が、「ホテルのサービスは、一つでもミスを犯し対応が悪いと、その他全てが完璧にできていても悪い印象をお客様に与えてしまう」と話をしていたことが非常に印象に残っている。

というのも、人事の仕事をしていると仕事を迅速に進めたいが故に、「全体最適」を最優先に考え、「部分最適」をどうしても考えなくなりがちだが、それは間違っていると感じかされた。これから、全従業員に平等に満足していただけるような教育を提供していきたいと併せて感じた。



⑧ 第7回 清掃活動を通じて、社会貢献を考える（9月15日）

この企画は、私たちBグループの担当ということもあり、非常に印象の深い企画である。外山リーダーの下、数回、飲みながらの会合を重ね、企画案を練った。（その内1／3以上、都合により欠席し、グループの皆様は迷惑をおかけしました）本会合に至るまで、諸事情により、企画が潰れたりしましたが、何とか実施にこぎつける事ができた。

前述の通り、多様な意見・価値観を持ったメンバーで、非常にユニークなグループだった。また、企画をより成功に導く為、事前に一部メンバーは、現地を下見するほど熱心だった。今回企画が成功したことも、このグループだったからこそだと思う。Bグループの皆さん、本当に色々ありがとうございました。

各企業は、昨今、利益を上げること意外に、社会貢献をすることが当たり前に求められ、私の会社も「先進的な技術開発と高品質なモノづくりを通じて社会に貢献する」と会社理念にも掲げ、具体的に国内外で植林を行ったり、またゴミの分別を強化したりして、様々な取組みを会社として行っている。

今回、堀川の清掃活動を通じて、「なぜ社会貢献が企業にとって重要であるか」等「社会貢献」について考える絶好の機会を与えていただいた。堀川では、実に様々なゴミを拾った。特に全体で多かったゴミは、タバコの吸殻とコンビニで買ったお弁



当やお菓子のゴミ等であった。個人がモラルを持てば、こういったゴミは出ないはずであり、堀川も綺麗なまま、地域住民の憩いの場としてより活用されるだろう。

これを企業に置き換えた場合、どうだろうか？

愛知県は特に、自動車を初めとした製造会社が軒を連ね、製造すればする程、二酸化炭素やゴミも増え、言い方は悪いかもしれないが、存在するだけで、環境汚染が進む一方だ。もはや会社周辺の雇用を創出するだけでは、社会（地域住民）の理解は得られず、その他の付加価値を付けて、理解を得なければならぬ。その一環が「社会貢献」ではないかと思う。今までは、社内のボランティア活動でさえも全行ってこなかったが、今後、自ら進んで積極的に参加していきたいと思う。

⑨閉塾式（9月15日）

約半年間の活動を通じ、閉塾式をもって活動は終わりを迎えた。活動を通じ、本来に良い仲間と巡り合い、様々な価値観を共有できたと思う。今後、職場で更に自分を磨き、さらに高みを目指してステップアップしていきたい。



⑩最後に

「殻の外へ踏み出そう」が、「産政塾」のテーマであるが、最後に自身の「殻」とは何か考えてみた。自身の「殻」とは何か：それは、「自分は、こういう性格だ」とか「自分はこういう特徴（考える傾向）がある」とか等、ある種の「決めつけ」ではないかと思う。

産政塾を通じて、様々な方々と出会うことができ、こうした「決めつけ」や「既成概念」を払拭できたと思う。「殻」を破るまでは至っていないが、「殻」を破るきっかけを産政塾に与えていただいた。今回の経験を活かし、今後さらに自分を磨いていきたいと思う。

最後になりましたが、今回の産政塾でお世話になった加藤塾長はじめ、事務局の高橋さん、共に活動を行った第20期生の皆さん、このような機会を与えていただいた上司、送り出していただいた職場の皆さんに、この場をお借りして御礼申し上げます。

誠にありがとうございました。

産政塾を振り返って



東邦ガス労働組合

遠 藤 登

《プロフィール》

えんどう のぼる

- 1973年 愛知県名古屋市生まれ
- 1992年 東邦ガス（株）入社
- 2008年 東邦ガス労働組合執行委員
現在に至る

〈家族構成〉 妻、娘（3歳）

◆ はじめに

今回、「産政塾」に参加させていただき、新たな仲間と出会えたことを、まず嬉しく思います。この第20期においては、企画の延期ということもあり、例年より1カ月長い7カ月ではありましたが、本当にあつという間の期間でした。ここでは、その7カ月間で得た貴重な体験、また、考えさせられたことを綴りたいと思います。

◆ 殻って何？

産政塾のテーマである「殻の外へ踏み出そう！」殻の外？漠然過ぎるテーマというのが、第一印象だった。殻Ⅱ既成概念？遠慮？全然わからない。ただ、このときにわかっていたのは、何かしら成長できるということだけで、成長させてくれるなら、ありがたいという気持ちだった（このときは他力本願で成長できると思っていた…）。

◆ #1 「開塾式」



どんな仲間が来るのか、殻とは何だ、大きな不安、小さな楽しみで会場まで向かった。会場につき、どんな人がいるのか？周りをキョロキョロ。そして不安が消えない中、開塾式が始まり、違った不安が更によぎった。「産政塾は基本的に犯罪以外何でもあり！」衝撃的な一言だったことを鮮明に覚えている。すぐに、その意味はわかったが…。

そして、加藤塾長の講話にて、殻を破るには「まず、自分がどれ程の人間か知ること、また、そのためには自らが前向きになること」という言葉だった。前向きさはあるとは言えないが、何となく「殻」もわかり、不安は消えていった。その後、自己紹介、各グループに分かれてのディスカッション、懇親会と進み、自然と不安感↓安心感↓期待感へと変わって行った。

◆ #4 「自分を知る、仲間を知る」

新型インフルエンザの影響により、急遽、事務局にて対応していただいた企画だった。

（事務局の皆さま、ありがとうございます。）

初めて参加した企画であり、正直、当初のBグループ企画（大阪）を期待していたが、運がいいのか、悪いのか…。

この企画は、日々の仕事・生活において、自分自身をじっくり振り返ることはあまりなく、前進の

みでは道に迷うこともある。また、一人だけでは進めないという観点から、自分を振り返ること、自分が気づかなかつたところに気づくこと、仲間を知ること、仲間に興味を持つことを目的にこのテーマが企画された。具体的には「健康宅急便ハーモニーの深見先生」をお招きし、参加型の講義だった。非常に楽しい講義だったと記憶している。トレーニング、メンタルヘルス、疲れ、眠り等の講義をいただいた後、動体視力チェック、足つばマッサージによる疲れの取り方、さらにはコミュニケーションチェックと自分の健康・体調を振り返るいい機会になった。

中でも、TEGエゴグラム・プロフィールという自己分析を行った結果、天真爛漫、明るい、わがままのところが最も高く、楽に生きている傾向であった。（…うん。当たっている！）また、こうした傾向は調子に乗りすぎるとの事で、相手を傷つけることも言ってしまうそうだ。（…うん。確かに一理ある！）しかしながら、こうした結果を一つの特徴として見ることで、いかに自分を振り返るかが重要であると考ええる。（こうしたポジティブな考えも、楽に生きている傾向と感ずる。）

◆ #7 「清掃を通じて、社会貢献を考える」

閉塾式と同じ日に開催した最後の企画である。延びるに延びたBグループの企画であり、自らが清掃活動を体験することで、今までに見えていなかった環境を感じるとともに、清掃活動の大変さ、大切さを学ぶこと、また、捨てられているゴミを拾うことで、捨てないことの大切さを感じるとともに、

職場、地域、家庭にもゴミを捨てない精神を広め、更には社会貢献の大切さを伝える企画である。確かに、私の労働組合でも毎月、大切さ、捨てない精神を広めるなどを目的に地域の清掃を行っているが、タバコの吸殻、空き缶、お菓子の袋等、少し歩けば、どこにでも落ちている。それが当たり前のように…。清掃場所については、白鳥公園から堀川沿いを南下し、宮の渡し公園までであり、地元出身としては、さらにやる気になった。

また、清掃前には名古屋市役所の方から、堀川について講義、今後の整備計画等を伺った。水害から守る為に、整備するのだが、プロムナードを作ることににより、道路もきれいにし、ゴミを捨てる人も減るという考えもあった。確かに、きれいな場所には捨てにくいという心理も働くが、まず一人ひとりが、捨てないということが、そもそもである。

そうした思いも感じながら、清掃を始めたが、本当にゴミが多かった。とくにタバコの吸殻（大体予想は付いたが。）であり、こうしたゴミが、雨・風で川へ落ち、川・地球を汚していく。

「ゴミ箱・灰皿がないから？」

「面倒？」

「これぐらいなら捨てても？」

一部のこうした考えの人により、益々汚れていく。どうしたら、ポイ捨てする人をなくすこと、減らすことができるのであろうか。



その一つの手段として清掃活動であると実感した。実際、清掃活動中に公園で、タバコを吸っている人がいたが、すぐ捨てにくい顔をしていた。(この後、私たちが居なくなつた後に捨てたかも知れないが、)抑制効果はあると感じながらゴミを拾っていた。また、地域の方からは、「ありがとう」「お疲れさま」と声を掛けていただき、人とのふれあいも実感した清掃活動であつた。

そして、今回の企画を通じ、感じたことは、今は、まだゴミの地産地消ではないだろうか？地域で出たゴミは、地域で無くす。これが、地球をきれいにする一つの貢献活動であることに間違いないが、一部の心もとなない人によつて、地産地消になっている。この企画の目的でもある、清掃活動の大切さを学ぶことも必要であるが、何より、学んだことを、人に伝えていくことが重要であり、そうしたことで、一人ひとりの社会貢献活動の意識が高まり、清掃活動をしてくれるのではないだろうか。そして最終的には、地産地消ではなく、自ら出したゴミは、自ら捨てる、「自産自消」に繋がる活動になると思いたい。吸殻という小さなゴミ一つで、改めて社会貢献という大きなことを学んだ企画であつた。

◆ #7 「閉塾式」

いよいよ第20期塾生としての最後の行事となつた。皆がそれぞれ産政塾を通し、発見したこと・今後の決意などを熱く、最後の議論を行った。自分なりに閉塾式の時と比較をしながら、議論に参加していたのだが、全員に共通しているのが、相手を尊重しつつ主体的に議論に参加している姿であつた。

果たして、皆から見ても自分はどうだろうかと思いつつも、この短期間で皆の成長が見て取れ、改めて産政塾の素晴らしさを感じ、素晴らしい仲間と貴重な体験と時間を共有できたことは「本当に良かった」と実感している。

◆ #. 5 「端数会」

これも、産政塾だからであろう。有志でお台場へ行く企画であった。産政塾理念？である「産政塾は基本的に犯罪以外何でもあり！」確かに何でもありとつくづく思った。私の大好きなガンダム等身大を見に行く内容でもあったので、何としてでもと思ったが、敢え無く都合により欠席。残念ではあったが、お土産として、ガンダムクリアファイルをいただき、改めて、塾生の皆さんに感謝です。（クリアファイルは当然、使用せず保管しています。）



◆ 産政塾へ参加して

産政塾では、塾長はじめ、塾生の皆さんと交流することができ、本当に良かったと思いました。会社の中では知ることのできない様々な体験、塾生とのちょっとした会話の中で、自分にはない“考え



方“ 思い”を知ることができ、数少ない参加ではあったが、毎回とても新鮮で、自分の物事に対する視野が広がったように思う。

この事が、産政塾のテーマである“殻の外へ踏み出そう！”へ繋がるのではないか？その殻とは、自分の思想、生き方ではないかと思う。多くの経験を持った人たちと交流することで、「殻の外へ踏み出し、自分と向き合い、足りないものを吸収して、自分の殻を大きく広げる」ことではないだろうか？自分は、人と人との交流が深い人が理想であり、それには、自分に厳しく、周りの人には思いやりがある人だと思う。そういう人の周りには、必然と人が集まり、同じ価値観を持った人たちが集まってきます。こうした人は自分には、輝いて見えます。自分もそうした人になれるように、人と人との交流を大切にし、努力していきたいと思っています。

◆終わりに

結局、自分のグループ企画も含め、多くの企画を欠席するということになってしまい、本当に残念である。ただ、産政塾は閉塾したが、皆さんとの絆は築いたばかりであり、今後とも末永く「殻」について考えて行きたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

最後に加藤塾長をはじめ、高橋さん、中部産政研の方々、また塾生の皆さま本当にありがとうございました。

産政塾で学んだこと



東邦ガス株式会社

太田 敏

《プロフィール》

おおた さとし

- 1991年 東邦ガス株式会社 入社
東邦ガス情報システム株式会社出向
- 2002年 情報システム部へ異動
- 2003年 人事部へ異動
現在に至る

〈趣味〉旅行、音楽鑑賞

はつめい

私の産政塾への参加のきっかけは、上司から「参加してみないか？」と勧められたことだった。職場では、過去に参加した人がいて、「活動は充実したもののだが、正直大変だ」という話を聞いていただけに、日頃の多忙な業務と併行して、こうした活動をすることは難しいことだと思い、参加を決めてからも内心気が重かった。

しかし、活動を終えて今思うことは、異業種の方々と交流することがほとんど無かったこれまでの私の社会人生活の中で、この活動は、大変貴重な体験となった。異業種の方々と対等に語り合い、活動できたこと、自分の考えや力が社外でも通じることを実感したことは、自分にとってとても大きな自信になった。

開塾式 「殻を破る」とは？

開塾式で、参加者及びこれから共に活動するグループのメンバーと初めて会った。どんな人たちが参加しているのか、自分が気後れするようないきなり勢いの人たちばかりだったら辛いだろうと不安に思いながら参加した記憶が残っている。しかし、グループのメンバーと自己紹介や企画の相談をし、中には私のように上司に勧められて来た人や、自分とよく似た考え方で共感の持てる意見を言う人も

いて、とても親近感を覚えた。この後、何度も打ち合わせを繰り返し、半年に及びいくつもの企画と一緒に組み立てていく事になろうとは、まだこの時は想像できなかったが、でも一緒にいい雰囲気では何かをやっていたけそうなメンバーだとこの時確かに感じた。

ところで、この産政塾のテーマは、「殻の外に踏み出そう」である。自分にとっての「殻」とは何か？開塾式で講話を聞きながら考えたが、今ひとつピンと来なかった。「殻を破る」という言葉はよく聞くが、これまでにやったことのない未知のことを積極的に行うことかな、自分にとって積年の課題である「リーダーシップを発揮する」ことをこの普段とは違う環境で思い切って行うことができれば、殻を破ったことになるのかな。などと考えた。上司からも、「会社とは違うしがらみのない環境で、思いっきり自分の力を発揮して来い。」的なアドバイスをいただいていた。しかし、開塾式の日の役割決めの際には、自分から「リーダーをやります！」とは言えず、その場の流れもあり記録係の任務に就くことになった。やはり、性格的なところもあり、今回も殻は破れないのかな？と、この時はそんなことを感じた。



活動を振り返って

難航を極めた自チームの企画

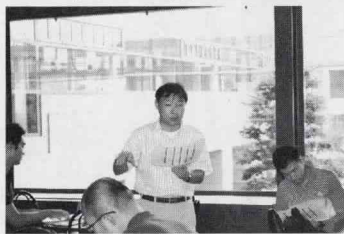
私にとっての産政塾の活動は、自分の属するグループの企画の実現のために、グループのメンバー

と定時後に10回近く打ち合わせを行ったことと、タイミングの悪さにより中止せざるを得なくなつたものを含め、4つの企画を組み立て、最後にひとつ成し遂げたことが最たるものである。

私たちのグループは、開塾式の際に、テーマが他のグループと重なつたため、テーマが実質自由となり、世間の様々な事象に目を向け、新たなテーマを決めることになった。自由な発想で考えられる反面、抛り所がなく、メンバーの意見集約に苦労したのも事実である。

まず、産業面に着目し、この不況の時代に輝いている会社の原動力を研究しようとサントリーの訪問を考えたが、先方の都合で実現しなかつた。次に、この時代に夢と希望を与えることに努めている業界として、関西の独立リーグの経営手法に学ぶことを考えたが、実施時期が、関西地方で新型インフルエンザが猛威を振るつた時期に当たり、下見や訪問先との事前打ち合わせまで行いながら、企画実現の一手手前で中止となつた。

8月に延期となつた企画の再検討にて、時期的にもマッチする「平和」を考える企画として考えた広島県の原爆体験者の訪問は、衆議院議員選挙の時期に当たり、塾生のほとんどが参加できないとしてこれも実現しなかつた。結局、9月に閉塾式とのセットで、「社会貢献」をテーマとした、地元名古屋の堀川沿いの清掃活動を行う企画でようやく実現を見たが、ここまで3月からの約半年間、何度もグループのメンバーと打ち合わせを重ね、産政塾期間の最初から最後まで、ある意味産政塾の活動を目一杯行つた形となつた。それ故に、企画が実現し、最後の講話の



際に塾長から、この「社会貢献」をテーマにした企画について「最後にふさわしい企画だった。」とのお言葉をいただいた時は、感慨も一入だった。

多彩な企画で見てきた異業種の人々

産政塾は、通常業務が忙しい場合はやむを得ず欠席をすることも可能という話は聞いていたが、自分としては、せっかく参加する機会を得たからには、全ての回に参加し、他のグループの企画に迎え、様々なことを勉強したいと思っていた。結局、最初の企画（松阪市長の訪問）のみ、給与計算の＼日に当たり、どうしても業務の都合が付けられず参加できなかった。今回の活動の中で、このことが自分の中では最も残念だった。市長に直に話が聞ける機会はそうそうなく、産政塾ならではと想っていただけに残念だった。しかし、その他は全て出席し、様々な勉強をさせていた。

今回参加した企画で総じて感じたことは、訪問先の方々、全て普段仕事では接することのない業種の方々だが、それぞれ活き活きと仕事をされている、または仕事、地域、さらには自分に自信、誇りを持って取り組まれていることを感じた。自グループの企画で堀川について講話いただいた名古屋市の方もそうだったが、農業体験の松本農園の方、平泉町の町役場の方、ロイヤルパークホテルの従業員



の方々、いずれもそれぞれ自分とは異なる価値感を持ちつつも、共感できる考えと、何よりも自信に満ち、一生懸命取り組み組んでいる姿を感じた。自分も今の仕事にやりがいを感じているので、今回会った方々のように自信に満ちた行動ができるよう勤めたいと都度感じたのを記憶している。

印象的だったこととして、ロイヤルパークホテルの従業員の方の話で、ホテルを間違えて訪れた方に、親切に対応したことで、その後常連客にまでなった人の話には感動を覚えた。その方の「サービスは見返りを求めているものではない。（見返りを求めるとモチベーションは維持できない。）」との言葉は、自分の今の社員サービスを考える業務に直結する話として心に残った。

また、平泉町の世界遺産登録への取り組みについては、企画の中で、町に出て町の人に直接インタビューをする機会があったが、聞いた人皆がこの件に関心を持ち、「行政はよくやっている。」という意見まで聞くことができたことが印象的だった。平泉訪問前、「きつと行政が住民不在で勝手に盛り上がっているのだろう。」と安易に思っていた自分を恥ずかしく思った。行政と住民の意見が一致していることに驚き、本心から平泉町の世界遺産登録の実現を応援したいと思った。また私も、「人事はよくやっている。」と社員の皆さんから言われるような仕事ができるよう精進したいと思った。



活動を終えて

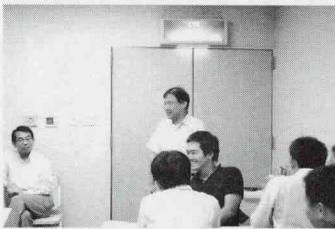
「殻」はどうなったか？

開塾式の時に考えた「殻」は結局どうなったか。「殻」とは何なのか？この活動で破ることができたのか？本当のところはよく分からない。ただ、開塾式の時に考えた「リーダーシップ」だけが殻ではなかったのではないかと思う。

今まで私は、社外の人と一緒に活動することは殆どなかった。今回の活動では、社外の方々と一緒に一つの目標を達成するために力を合わせる事ができた。これは、自分にとって初めての経験だった。

定時後に何回も集まって議論したこと、みんなで役割分担をして、調査や下見を行ったことなど、大変だったがチームの企画を成功させるために貢献したい、塾生の方々に楽しく勉強してもらいたい、そんな思いで一生懸命自分の力を発揮しようと頑張ったことは、自分にとっては大きな経験となり、ひとつ自分を大きくしたのではないかと思う。自分が大きくなったと感ずること、それはひと周り外側にあった殻を破ったことなのかな？殻は一部分を突っ付いて破るものではなく、自分が大きくなることで全体に一気に破れるものなのかもしれないと感じた。

最後に、今回の活動が充実したものであったと、今そう感じることができるのは、偶然にも一緒になったグループのメンバーのお陰だと思う。グループのメンバー



の方々には本当に感謝している。このメンバーだったから、何回も企画が潰れても、再度代替案を考え、新しい企画を作り上げることができたのだと思う。大胆な意見を言う人、違った角度から意見を言う人、チェックする人、整理する人、まとめようとする人、様々な個性が同居するいいグループだったと思う。

また、最後まで充実した活動ができたのは、塾生の方々と事務局の方々のお力によるところと思う。特に事務局の高橋様には、チームの企画の打ち合わせにも数回来ていただき、我々の意見を尊重しつつ、事務局の視点で考慮すべき点をアドバイスしていただくなど、とてもお世話になった。

産政塾で知り合ったメンバーとは、「人脈」というような堅い意味合いではなく、仲間として今後も語り合える関係を続けたいと思う。また、今回ここで学んだこと、仕事に取り組む姿勢、様々な角度からの考え方、助け合い、力を合わせて行うことの貴さ、強さを自分の今後の業務に役立てられるよう努めていきたいと思う。それが、忙しい業務の中、快く送り出していただいた職場の方や参加を勧めていただいた上司、および産政塾の参加メンバーへの感謝の気持ちを表すことになると思う。

産政塾を振り返る



ジェイテクト労働組合連合会

大野田 有 良

《プロフィール》

- おおのだ ありよし
- 1972年 愛知県生まれ
 - 1992年 豊田工機(株) 入社
 - 2007年 ジェイテクト労連 支部専従
 現在に至る

〈家族構成〉 妻、長女(小4)、長男(2歳)

〈趣味〉 スポーツ (観ることとすること。特に草野球)

(1) はじめに

労組専従になり1年と3カ月位が過ぎた頃でした。当労組委員長から「第20期 産政塾に参加してください。」という文面のメールをいただきました。

「産政塾」ってどんな塾？早速、ホームページで産政塾について検索しましたが、統一テーマが「殻の外へ踏み出そう」と言うことと、チームに分かれ企画をして何処かに行って体験をするぐらいの印象を持った程度でしか調べませんでした。

楽観的に物事を考えることが多いので、仕事の合間の息抜きができる的な変な期待も抱きましたが、参加者が自分よりも若い方ばかりで発想や思想が違い孤立してしまうのではないか等の大きな不安を抱えたということもはつきりと覚えています。

「殻の外…」何となくイメージはできるのですが、自分にとっての「殻」というのが何なのかは全くわかりませんでした。「殻Ⅱ弱点」なのか「殻Ⅱ壁」なのかと考えてはみました。

「とにかく産政塾に参加してみよう。そこで自分にとっての殻が見つかるはず。」そんな感じで私にとっての産政塾が始まりました。

(2) 開塾式

2009年2月4日（水）、第20期産政塾の開塾式当日。

塾生同士の初顔合わせということもあり、どんな仲間が待っているのか、そして、しっかりと打ち解けることができるのかと妙な緊張をしながらも集合場所のホテルに向かったことを記憶しています。

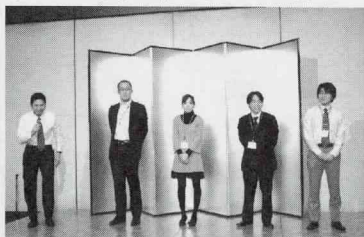
受付を済ませた後にグループメンバーと顔を合わせ、「よろしくお願いします」と初対面ならではの少し「ぎこちない」挨拶を交わしました。

冒頭、産政塾についての説明を受けた後で加藤塾長より「鍛える」というテーマで講話を頂きました。

「discipline＝鍛錬」↓経験の積み重ねにより自分自身を向上させて、昨日よりは今日を良くしよう。そして、今日よりは明日を良くしよう。」

という言葉が印象に残っています。当たり前のことのように感じますが、その時の自分には、自分自身を向上させる方が当然良いという気持ちはあっても、「昨日と同様で明日も今日と同様に」という現状維持的な考えしか無かったような気がします。だからこそ心に響き、そして改心させられました。

次に各グループ討議で企画検討を行いました。改めて自己紹介を行い、グループメンバーのことが段々と分かり、会話の量が増してくると嫌な予感がありました。案の定、自分が一番年上であり最年長の特権（？）でグループリーダーになってしまいました。（自分にはあまり適さ



ないポストであると思いつつも覚悟を決めました。」

各役割分担が決まった後に本題であるグループ企画の検討を行いました。まずは各自が持ち寄った企画案を発表しましたが、前日に急いで考えた私の企画案に対して、メンバーが発表してくれた企画案というのは非常にレベルが高く、「どうしてもこれがやりたい。」という魂が入っていたような気がしました。本当にそれを知りたくて、体感したくてというのが確実に伝わってきて驚いたことと同時に、自身の企画案が安易な考えであつたことに対して非常に恥ずかしく感じました。

結局、我々のグループ企画としては私の案以外の全てが棄て難い内容ばかりでありましたが、多数決で「食の安全について考える」というテーマに決まり、全員でこの企画をしつかりと成立させようと心を一つにして開塾式が終了しました。

(3) グループ企画 (カトレアの企画)

前項で紹介を忘れてしまいましたが、我々のグループはCグループであり、グループ名は「カトレア」に決まりました。(メンバーの会社のイメージであるとのこと。)

「食の安全について考える」という企画案に決定はしましたが何をするのか? 開塾式以降、メンバーと1回のグループミーティングと、メールによる情報交換及び共有化を密にすることで企画に対して

の具現化を図っていきました。

途中には、訪問先を変更するなどの数々のトラブルも発生しましたが、メンバーの積極的な提言や柔軟な対応そしてレスポンスの早さで、最終的には日本の食の代表である「農業」に主眼を置いて考えるというテーマに決定しました。

メンバー全員が問題認識としていたことは、BSE問題や食品偽装表示などの問題が後を絶たない状況の中で、今後、私たちの子供たちや将来にわたって安心して安全な食物を提供し続けることができるのだろうかという懸念を抱いていたことであります。

どうしたら私たちに安全な食料が提供されるのか、そして、どうしたら第一次産業が活性化されるのか？

私たちカトレアの活動目標が固まり方向性をはつきりと見えました。

(4)『殻』の外へ踏み出すために得たもの(グループ企画への参加)

第2回目の産政塾グループ企画は「若手政治家に聞く!」というテーマで、三重県松阪市の山中市長を囲んで懇談会が開催されました。私たちと同世代が市長であるということに物凄く興味がありました。

市長との懇談会で、とにかく「現地」、「現物」、「現認」を優先にした行動を心掛けて、市民一人ひ

とりの意見を大事にされているということが非常に伝わってきました。それが彼の「信念」であるとは思いますが、若干33歳の若手政治家が信念をとことん貫くパワーの大きさに圧倒されました。

その他に彼から頂いた言葉で印象に残っているのが「永遠の偽善者」というフレーズであります。生涯、偽善者を貫けば最終的に善人で終われるという風に解釈していますが、私も絶対になつてやろうと思います「永遠の偽善者」に。

第3回目の産政塾グループ企画は、我々、Cグループ（カトレア）が企画した「これからの農業について考える」というテーマで開催しました。屋外での企画にもかかわらず、当日は本当に微妙な空模様で、カトレアメンバー全員が前日から落ち着かなかつたのではないでしょうか。

食の安全に対しての問題意識から今回のテーマを設定しましたが、「松本自然農園」の農園主である松本直之さんの人間性にも注目する点が多くありました。彼は固い意思を持って肩肘を張らずに格好良く農業を営んでいて本当にやりたいことを仕事にしているだけということがよく理解できました。

また、彼は意外な経歴を歩んで来いています。それらは短期間で決断と行動をしているという話を伺いました。

自転車で日本一周したことやサラリーマンから農家に転身したことも大きな決断と行動力を要する



と思いますが、それらを実行する上で注意していることは何かと質問したところ、「後悔はしないように決めている」と答えられたと記憶しています。彼も強くてぶれない「信念」を持った男であり、松阪市長同様で私よりも年下であるにもかかわらず私に大きな刺激を与えてくれた人物でありました。

この日は、その他にも色々な話を聞いたり農業体験をしたりしましたが、上述したことで懇親会のバーベキュー以外は余り覚えていません。Cグループとして企画を成立させることに神経を集中させていたせいか非常に疲れた一日だったと記憶しています。



第4回目の産政塾は業務の都合上で欠席しました。全会合に出席したいと考えていましたが残念です。

第5回目の産政塾グループ企画は、「平泉の世界遺産登録活動から学ぶ」というテーマの下、岩手県平泉町にて開催されました。事前に企画内容に目を通して気になったフレイズがありました。それは、「日本人のこころ」です。あらゆる観点でグローバル化が進んでいる中で「日本」に目を向けて「日本人」であることを再認識するという意味では非常に楽しみな企画でありました。

当日は、平泉の文化遺産として「中尊寺」や「毛越寺」などを主とした世界遺産登録活動を行っていると感じさせる風景が多々見受けられ、その活動に携わる担当者の思いもしっかりと伝わってきました。

した。そして、あらためて日本にある文化遺産がどれほど素晴らしいものであるのかを再認識したのと同時に、私たちがこの素晴らしい遺産をどうやって後世に引き継いでいくのかを考えさせられる貴重な体験をすることができました。

第6回目の産政塾グループ企画は「プロのサービスを学ぶ」というテーマの下、東京汐留の「ロイヤルパークホテル」にて、接客のプロと言っても過言ではない一流ホテルの「ホテルマン」から「顧客満足度」向上活動について学びました。ホテル内各部屋の見学やスタッフの方々との懇談会を通じて、ホテルの経営理念や社員の行動指針がしつかりと行き届いている様に驚かされるばかりでありました。

特に、お客様の「真の期待が何か」ということを考えて接客するという観点においては、自分自身ができていなかったことに気付き、今後の自分自身に対する課題であると認識しました。

最後に第7回目の産政塾グループ企画として「清掃活動を通じて、社会貢献を考える」というテーマで名古屋市の堀川沿いの清掃活動を行いました。

当日、堀川沿いで目の当たりにしたのは、所々にタバコの吸殻や空き缶、空き瓶、ポリ容器の弁当



箱などが無造作に捨てられているという非常に愕然とする光景でした。清掃活動として、それら全てを拾いきれませんでした。目的である「社会貢献活動」としては成立したと思います。

ただ、このような「社会貢献活動」を推進する以前にゴミを捨てない意識や景観を乱さない意識を向上させなければならないという課題も存在するといふことを考えさせられる貴重な一日となりました。

引き続き行なわれた閉塾式では、第二十期「産政塾」の活動を全員で振り返ると同時に「殻」について全員で語り合いました。私自身としては明確な答えはなかったように感じますが、各々のグループ企画を通じて様々なジャンルで活躍される人たちと出会い、そして産政塾メンバーと活動を共にすることで得たことは「強い信念を持ち、それを貫き通す」ということです。これは自分自身に足りなかった大きなことであり、ある意味では自分自身の「殻」であるのかもしれませんが。

今後、様々な活動に対してこの思いを忘れることなく取り組んでいくことを誓います。

(5) おわりに

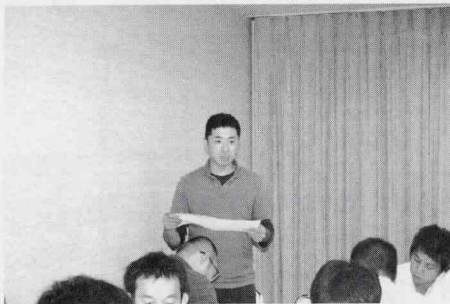
2009年2月以降、産政塾で過ごせた半年間は自分にとって非常に有意義な時間でありました。



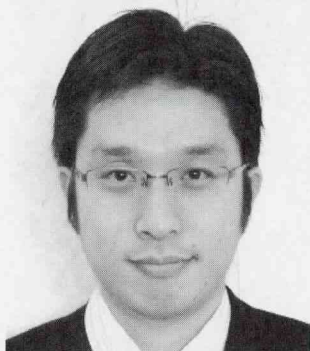
特に現地現物で体験する機会をいただけたことは本当に素晴らしいことと感じています。

「殻の外へ踏み出そう」ということでありましたが、私にとつては産政塾の皆様方と出会えて新たな人脈を構築できたことが大きな財産となり、そして「殻」の外へ踏み出すための基礎固めになったように思えます。この半年間で得たことは、いつまでも忘れることなく日々を過ごしていきます。

最後に、加藤塾長をはじめ第20期産政塾のみなさん、本当にお世話になりました。そして、この「縁」を大事に今後も交流を深めさせていただきたいと思っておりますので、どうぞよろしく願います。



記念すべき第20期産政塾を大きくふりかぶって



中部電力株式会社

沖 本 匡 司

《プロフィール》

- おきもと まさし
- 1977年 愛知県尾張旭市に生まれる
 - 2000年 中部電力株式会社入社
岐阜支店 大垣営業所 営業二課に配属
 - 2001年 本店 人事部人事グループに異動
 - 2006年 人事企画グループに部内異動
現在に至る

〈家族構成〉 妻&長男

〈趣味〉 楽器演奏（トランペット）、カラオケ、ゲーム、幹事

○おつめい

第20期産政塾に参加できて、本当にシアワセでした。偽らざる本音です。

入社2年目の夏に早々と人事部に身を投じ、気づけば今年で9年目。おそらく、就職活動中から「人事がやりたい！」と考えている人間は皆無でしょうし、私も（この点に関しては）一般的な思考でしたので、当時の先輩の「まずは、自分なりの（考え方の）軸を作れ。」という言葉信じ、ひたすら目の前の課題相手に奮闘してきた毎日でした。

気がつけば主任という肩書きがつき、当時の先輩と同じ立場となった我が身を見て、「このままでいいのか？」などと疑問に思う事が多くなる中、産政塾へのお誘いが舞い込んだのです。産政塾といえど、当社では人事部内で主任として各グループの若手を統括する立場の人間が参加する秘密結社（？）として名を馳せる存在。もちろん断る道理もなく、期待に胸膨らませて足を踏み入れました。

果たしてその実態は、歴代の先輩から「行けばわかる」と言われたとおり、なるほど「行かなければわからない」魅力が満載でした。少し思いを馳せるだけで、「文章に残すことができない」ことから、「文章に残すべきではない」ことまで、大小数多のエピソードが鮮明に浮かんできます。個人的には、非公式な「端数会」を主催したり、「法に触れなければ何でも有り」を真に受けて金曜開催の慣習を破つたりと、悪目立ちに近い面もあったなあ、と反省したりもしますが…。

さておき。全てを受け止めていただいた産政塾というフィールドに心から感謝をしつつ、このレポー

トでは私が産政塾の場で考えたこと・得られたものを書き綴りたいと思います。

○破るべき「殻」って何だ？

産政塾のテーマでもある「殻の外へ踏み出そう」。最初にいただいた資料には、卵が表紙に採用されており、「殻」外の世界へ踏み出すために破るべきもの、という認識をもちます。日ごろ接点の少ない他企業からの塾生と接する場、自業務のフィールドに限定されない自由な研修企画テーマなどは、広い外の世界に違いありません。

当然、資料を読んだ当時の私もすっかりその気で、「さあ、破るぞ！」と息巻いてはみたのですが。すぐに「破るべき「殻」って何だ？」と考え込んでしまいました。

私自身のイメージとして、殻には中のものを守る機能があります。屁理屈かもしれませんが、甲羅や甲殻など、殻も極めれば長所足りえるのかもしれない。自分の欠点は、もちろん山ほどありますが、一つに「人の話が聴けない」ことにあります。特に、初対面の人と会話する場面では、普段以上に口数が多くなります。自分のペースで進行しない場面に立ち会う自信がないのです。確実に自分の知っている話で安心したい、という気持ちの現れだと自己分析していますが、これは30数年間の人生の中



で形成された「甲羅」なのだと思います。

産政塾に参加したての頃は、このように漠然と「必要な殻と要らない殻」、そして「破るべき殻をどうやって選別するか」といったことを考えていたように記憶しています。実際、産政塾の初日、先述した「甲羅」を外してみよう、と試みました。結果は芳しくなく、路線変更に失敗していれば、今浸っているような満足感はいいぞ得られなかったかもしれません。

産政塾を終え、改めて考えてみれば、打ち破るべき殻は小手先の手法ではないのでしょうか。無論、物質的なものではありません。自分が精神的に無意識に形成している殻、それは「勝手に定めた限界」なのであろう、と整理しています。

先ほどの私の例で言えば、回避しようとするテクニクを止める・止めないではなく、その背景である「自分がペースを握らなくても揺らがない自信」、結局のところそれがあるか・ないか、の問題ということになるのでしょうか。

何が自信につながるか、などということは人それぞれでしょうが、普段の生活とは違った環境の中で、普段得られない刺激をうけることで、芽を出す自信もある。そのような観点で産政塾での時間を振り返れば、今の自分にかけていることを数多く見つけていたことに気がつくのです。

○一つの企画を形にするために

その一つとして、「任されること」に対する責任感があります。

事前課題として課された研修テーマ・計画の作成。最初に1人で考えている時には、予算枠も意識しつつ、かなり現実的な案、悪く言えば有り物の研修を組み込んだ案ばかりを用意していました。ところが、いざグループ内でテーマを出し合い始めると、産政塾の持つ自由な空気と「1度しか参加できない」というプレミア感が徐々に議論に影響を与え始めます。誰からともなく「どうせなら、会社の研修では絶対に体験できないことを！」という思いが言葉に表れだし、「産政塾らしさ」の名の下に、「○○氏に会いたい」「●●の裏側を見たい」といった、良くも悪くも目的主導によるテーマ決定へとシフトしていったのです。

自分も流れの中で、「リッツ・カールトンのサービスを体感したい！」という目的（というよりも「はや欲望」）を提案しました。無論、緻密な下調べなどありません。根底には、魔法とさえ呼ばれるサービスを生み出すスタッフの方々が日々何を考え働かれているのかを純粹に知りたい、という気持ちがありました。ホテルを舞台とした「コンシェルジュ」という愛読している漫画から、自分の仕事上でも通用する気付きを多く得られていたことも少なからず影響していました。

この提案は望外に支持を集め、他のメンバーの提案と合体し、「リッツ・カールトン東京でCS研修を受けて宿泊し、翌日東京ディズニーランドでさらにCS研修を受ける」という大層煌びやかな研修として採択されました（これにより、グループリーダーを務めることになったのです）。調整の結果、宿泊開催を他グループに譲り、リッツは前泊のみに姿を変えたものの、発表した際のリアクションも

それなりに好評で、妙な安心感も得ていました。

しかし、加藤塾長が各グループの研修テーマを見て発したコメントは、今にして思えば、大変意味深長だったのだと思います。

「どのグループも、非常に興味深いテーマだ。このまま実現できれば素晴らしい。」

一切の否定はありませんでした。担当する研修について全権が自分たちに任せられたということ、そしてその困難さと責任の重さを知るまでに、それほど時間はかかりませんでした。

「一流のギャルソンは、ギャラも一流。」三谷幸喜脚本・「王様のレストラ」の劇中の台詞ですが、超一流のサービスを体感、ましてや学ぶために提示された金額も、決して安いものではありませんでした。限られた予算の中で、「企画倒れになる」危機感は、今も生々しく思い出すことができます。

「No.1のサービスを体感し、管理間接部門で働く自分たちがなかなか意識しづらいCSの精神を学ぶ」という「譲れない大目的」をメンバーで確認し合い、ロイヤルパークタワーアンドリゾーツ（以下、「RPH」）の方々の善意により、満足のいく研修となりました。しかし、約30人もの人間を1日拘束するに見合うだけの企画の一步として、その責任の重大さをもう一步理解しておく必要があったのではないかと考えています。

○RPHの人々に教わったこと

先にも述べたとおり、自分たちの研修が無事に行えたのは、RPHの方々のご助力あつてのことでした。こちらからの申し入れ、それから研修当日までの打ち合わせの中、一貫していたのは「相手の立場に立つこと」と「否定から入らない姿勢」でした。

そもそもRPHに依頼したきっかけは、メンバーに紹介されたJDパワー社の顧客満足度調査でした。客室料金の価格帯別にランキングを発表しているこの調査で、RPHは1泊1.5万円〜3.5万円の部で2年連続1位（編集後記…2009年も含め3年連続となりました。）に輝いています。

人づてに聞いた、というわけではないので、当然コネクションもありません。また、本社が東京（＝東京電力様供給エリア）ということもあり、業務上の接点も当然ありません。中部産政研や産政塾の知名度も期待できない状況。そう、つまり完全な「飛び込み」状況でした。

最初に電話対応していただいたのは、大島次長。「日頃、管理間接部門に勤めているため、CSをなかなか意識することができない。先進的な取り組みをしているホテル業界にあつて、第3者から高い評価を受けている御社から色々と学びたい。」突然かかってきた、得度も知れぬ当方の、未整理な部分が多くもはや我が儘とさえ言える申し出に対しても、ひとつひとつ丁寧に聞き取っていただきました。さらには、内容が不明確な中（かつ、予算がない旨繰り返しPRした）にもかかわらず「出来ることがあるのであれば、お力になりたい」と手を差し伸べていただき、「上司が汐留のホテルの社長を兼務しており、話を伺うのに適任だと思います。東京に来る機会があれば、一度打ち合わせを持

ちませんか？」という望外のお誘いもいただきました。

実際に東京の本社事務所へ伺った際も、こちらが若造1名であるにもかかわらず、朝倉常務以下3名体制で、ほぼ1時間近く、打ち合わせに付き合っていたかったです。こちらの説明は、電話の時以上に、緊張により支離滅裂な説明になっていたと思われる。また、話をする中で、実際に研修内容を詰めていくには余りにも漠然としている部分が多いことも、洗い出されました。完成度が低いこちらの準備を埋め合わせるように、お三方からは意見をいただきました。「ただの座学にはしたくない」「わざわざ東京に来る意味のある研修にしたい」「お金を払えば受けられるような研修にはしたくない」。ただ熱意しかない当方のイメージが、少しずつ整理されていき、実現の可能性が探られていきます。

一方で「予算はない」。「ホテルは研修サービスを提供する会社ではない」というのは当たり前の話。当該ホテル内の会場で実施しようとすれば、部屋代だけで1時間10万円（定価）。さらには、「少しでもサービスを見てもらったほうが」とランチを体験することを強く勧められました。昼食付の半日研修など、どう考えても予算オーバーのはずでした。

しかしそれでも、結果として、RPHからは受け入れOKのご回答をいただきました。



「我々がどんな力になれるのか、どうしたら力になれるのか。しつかり考えます。」

朝倉常務のこの言葉。どれほど胸に響いたかわかりません。RPHの掲げる理念は、「Best For The Guest」。その一端を確かに感じました。

担当していただいた石賀さんには、本当に親身にも、企画作成にお付き合いました。時に「言葉なんか整えなくていいです。もつと本音をお聞かせください。」と指摘をいただきました。空想に過ぎなかったものが、現実に実現可能なアイデアへと置き換わっていく経過も体験させてもらいました。研修の1カ月前からは、ほぼ毎日、細部の調整をいただき、手作り感たっぷりの研修が終わった後には、誰よりもその出来を心配していた姿に、ただただ感謝でいっぱいです。

「なぜ東京まで行く必要があるんだ。」

「なぜ、産政塾でわざわざ（実務的な）CS研修なんだ」

こんな批判が出ることなく、研修が大成功の内に終わった裏には、RPHの方々の「相手の立場に立った」「決して否定から入らない」思考がしつかりとした支えとして存在していました。だからこそ、私自身も、この思考を必ず身に着け、恩返ししたいと思いますと思ってます。

○「魅力ある人」に共通するひと

ついつい自分たちの研修の話に力が入りましたが、他の研修も含め、短期間に多くの魅力ある人との出会いを果たすことができました。

同年代でありながら、市長の重責を担う山中・松阪市長は、溢れんばかりの行動力と、決してぶれない考え方の軸の太さが印象的でした。公約の一つである「借金時計」の設置の記事を読み、胸が熱くなったことを思い出します。

サラリーマンを辞め、自然農法で野菜を育てる松本さんは、飾らない強さを持つ人でした。一步踏み出す勇氣、について彼が言った「ボンとやればいい」、その「ボン」が出来る人が中々いないだけに、格好良く見えました。

平泉を世界遺産に！と活動される方々からは、純粹に地元を愛する真つ直ぐな気持ち、その爽やかさを感じさせてもらいました。認定に向けての道のりは決して平坦ではないと想像されますが、皆さんの前を向く姿勢、自らを語れる力には本当に頭が下がります。

RPHのスタッフからは、損得勘定をも超越するプロ意識、しかもそれを自然に身にまといつていることの美しさを感じました。タオルの向き、ライトの角度。お客様が気付くかどうかではなく、その先のステージで戦っている凄みさえ発していたように思います。

皆それぞれに個性的な人々であつたにもかかわらず、皆それぞれに魅力的だと感じられたのはなぜだろう？そう考えてみると、一つの共通点が見つかります。



ありふれた言い方ですが、皆、「自分」があるのです。何かしらの判断が必要になった際、必ず基準とするべきものを持っている気がします。そのため、発言内容にぶれがなく、結果として信頼感につながり、魅力を感じるのでしょうか。

果たして、「私自身はどうだろう？」と考えずにはられません。たとえば、仕事において、胸を張って語れるほどの信念が今の自分にあるでしょうか？第三者から見ても、信頼感を抱かせる働きが出来ているのでしょうか？説得力のある言葉をもっているのでしょうか？「サラリーマンだから」は何の意味もない言い訳です。まずは、自分が納得の出来る自分の芯を整理することからはじめる必要があります。と理想への取っ掛かりを得ることが出来ました。



○あるべき「殻」の破り方

閉塾式で課された課題の中で、「殻を破ることが出来たか？」という問いがありました。その時は、「きっかけは貰った」と答えたと言憶をしていますが、今改めて考えると、「押し広げることは出来たが、突破は出来ていない」といったほうが適切な気がします。

殻Ⅱ自ら設けた限界とするのであれば、産政塾の活動を通じて得た刺激によって、新しいものの見方や、新たな価値観を得ることが出来、少なからず「出来ると思えること」の領域は増えています。

ただ、「これぞ！」といって革新的に変化した、と言えるものもないのが実態です。

産政塾自体、即時性のある劇薬ではないのだと、経験してみています。むしろ、日々の生活習慣を改善しよう、という健康指導に近いもののように感じます。たとえば、塾での活動以降、今まで以上に、知り合う人の考え方や価値観に興味を持つようになりました。展示会場での営業マン、タクシーの運転手などなど、話す機会がある人に対して、一層の関心を持つて接するようになった気がします。

抱えきれないほど得ることが出来た気付きを一気に消化しようとすれば、吸収しきれず捨ててしまう部分もあるかもしれません。また、一つひとつの要素をとってみても、決して一朝一夕で身につくものではないでしょう。一方で、自分と同世代の人がまとっているオーラでもあります。焦ることなく、でも諦めることなく、自分を磨いていく。それこそが、あるべき殻の破り方である、と自己消化しています。

○おわりに

第20期産政塾に参加できて、本当にシアワセでした。つい繰り返してしまうほど、本音です。

単に楽しかったから、というわけではありません。もちろん、日常的な業務から外れ、「産政塾ならではの」の機会を満喫したのは事実です。ただ、塾生全員が試行錯誤のうえ実現した企画それぞれの

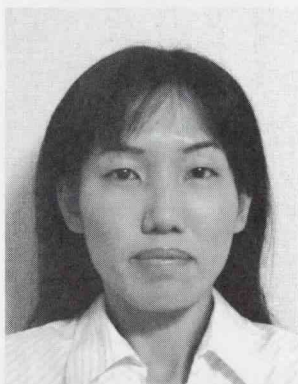


重みが、少なからず「氣付き」として自身に刻まれたからこそ、今振り返っても充実した時間だった
と言いつけるのだと思います。また、貴重な体験を共有することができた素晴らしい塾生や事務局の
方々との出会いも、間違いなく「一生モノ」です。

「卒業論文」ともいえるこのレポートを提出することで、一つの区切りとなるのでしよう。寂しさ
もありますが、確かに得たものを一つずつ消化し、一回り成長した企業人となることで、恩返しとし
たいと思います。

さ、OB会もガンバロウ!!

第20期 産政塾を振り返って ～気づき～



豊田市役所

柿 本 理 恵

《プロフィール》

- かきもと りえ
- 2005年 豊田市役所 入庁
豊田市教育委員会 スポーツ課配属
 - 2008年 豊田市都市整備部営繕課へ転属
 - 2009年 組織の再編成により
豊田市都市整備部建築住宅課に配属
現在に至る

〈趣味〉旅行、お菓子作り

～ はじめに ～

今期も「来たれ、意欲満々の若者たち！」と題して募集が開始されました。今年から参加可能となった産政塾は、以前から参加してみたいと思っていきましたが、通常業務との調整、代表して参加させていただくという責任など私に勤まるのか心配になるところもありました。しかし勇気を振り絞り申込みをすることが、産政塾のテーマ「殻の外へ踏み出そう！」の第一歩だと思い、応募しました。

私は、産政塾に参加する目的が2つありました。1つは公務員という枠を超え異業種が集まる研修であることです。毎年受講する庁内の研修とは異なり貴重な体験ができ、多くの異なる考え方や視野の広がり期待し応募しました。そしてもう1つは、庁内の研修では実施されることがないだろうと思われる「一流のプロ意識を学んでみたい」ということです。

応募の際に提出した書類の熱意が伝わったのかどうか分かりませんが、選考の結果、幸運にも参加することが出来ることになりました。

～ 松阪市長との対談 ～



最初の研修「若手政治家に聞く！」では、33歳という若さで市長になった山中市長との対談でした。市長という近づきにくい、怖いというイメージがあつたのですが実際はどのような人かとても興味がありとても楽しみにしていました。

市長になるには、大きな決断と苦勞をされているようでしたが、「永遠の偽善者」、「1%の痛みに挑戦」といったような身近なところからできることからやろうという印象と、現場に行き、話しを聞くというスタンスをとっておりとてもバイタリティーに溢れた市民目線の市長である感じを受けました。

まだ就任して2カ月しかたっていないということで、マニフェストに書かれている内容を実施していることは少ないようでしたが、マニフェストを実施することが重要ではなく、市民にとって一番いいことをするという信念を持ち進めていることに感銘を受けました。

この研修では、日々の業務に追われ忘れかけそうになつていた「改善しようと思う気持ち」を思い出させていただくきっかけとなりました。そして思いを行動に起こすことの大切さを感じました。

「価値観」の殻

研修の中で私自身の価値観に一番大きく影響を与えたのは、第3回産政塾「これからの「農業」について考える」の研修です。

松本自然農園を営む松本氏の農家を志すまでの経緯と現在の農業の取り組みについて話しを伺うと、自然体でやりたいことを実行しているように感じました。

その後、農作地に行つて驚いたのは、土地が思っていたより狭いことと、水は始めの苗植え時程度で、あぜ道に生える雑草も抜いてしまうのではなく、ある程度まで成長させ、草刈り機で切つたものを苗の周りに置き土の保湿をするなど、手を加えるのが最小限であることでした。

たくさん種類の野菜を植え、その上同じ野菜においても収穫時期ができるだけ長くなるように調整をするなどしており、経営が順調になると事業の拡大をしていくのではなく自分のできる範囲の量をマイペースで力を入れすぎないスタイルで農業をしているところに感銘を受けました。

この研修で会社へ就職し、たくさんのお金を稼ぐことが良いという事や農業に関する偏見など一般的な価値観を自分自身も無意識のうちに作っていることに改めて気づくとともに、自身の想いに素直に生き「幸せに生きるとは何か？」を改めて考えさせられました。多様な価値観のあることを常に心掛けて勝手な価値観の殻を作らないようにしていきたいと思います。

世界遺産の街



第5回は1泊2日の平泉での研修でした。1日目は、世界遺産登録を目指している中尊寺、毛越寺の施設見学と、座禅体験を行いました。2日目には平泉文化遺産センターでの講演とグループワークを行い、グループワークでは、「中心市街地の景観と観光開発の現状観察」、「隠れた重要史跡を知る」、「平泉のもうひとつの側面を知る」の3つの視点から平泉を学びました。

2日目には、散策しながら市民の方に話を聞くというグループで、地元住民と思われる方にインタビューをしたところ、平泉について話す姿や遺跡の上に住んでいるということをとて誇らしげに話す姿に、住んでいる街をとて誇りに思っていることが伝わってきました。その中でも、一番印象に残っている言葉は、住民の方が「行政もがんばっている。地域もがんばっている。」という言葉でした。行政の仕事をしている身としては、とてもうれしい言葉であり平泉町民と行政がとてよい状態でつながっていると感じました。

グループ企画

この研修を振り返るとどの研修にも多くの気づきがあり、刺激を受けることができました。その中でも特に印象に残っている研修は、自身のグループで企画した第6回企画の「プロのサービスを学ぶ」です。



私が産政塾に参加しようと思った目的の一つである「一流のプロ意識を学んでみたい」の具体的な研修としては、ドイツニールランドを経営しているオリエンタルランドが行っている研修やホテル業界でNo.1といわれるリッツカールトンでの研修を受講してみたいということでした。

当初はこれらの研修先が候補に上がっていたのですが、予算やその他の条件が合わず泣く泣くあきらめることとし、J・D・パワーアジア・パシフィックが行ったホテル宿泊客満足度（1泊15,000円以上～35,000円未満部門）で1位に選ばれた「ロイヤルパーク汐留タワー」となりました。

ロイヤルパークホテル汐留タワーではCS（顧客満足度）よりCSよりも更に高いCustomer Delight（顧客が期待以上のサービスを提供することで、顧客に予想外の喜びや感動を与えること）を目標としているそうです。今回の研修は、まさに「お客様の要望にできる限り尽くす」という精神がこの研修にも表れていると感じました。

今回の研修を実施していただいたロイヤルパーク汐留タワーでは、このような研修を企画・実施したことが無いにもかかわらずこちらの要望とする研修内容をオリジナルで作成していただきました。この研修プランを作成していただいたことに感謝するとともに、「やれる、やれないという前に私たちが出来るかを考えたい。」と言っていたいただいたロイヤルパーク汐留タワーのお客様に対する顧客満足度の高さを身をもって体験することができました。



この研修で一番心に残ったことは、「Yes、Noで答えるのではなく、なぜそのような質問・相談をしているかを考える。」という言葉です。庁舎内においても「聞かれたことに対して答える。」という対応の仕方が多いと思いますように感じています。回答としては、聞かれたことに対して答えることは当たり前ですが、市役所へ来られる方は、自分の知っている単語を並べて質問する方もいますので、そのような方に対して真意を聞き取り適切な案内が出来るようにならなければいけないと改めて思いました。

今後、相手の真意を聞きだせるような話し方が出来るようにしていきたいと思っています。

ゝ 社会貢献への入り口 ゝ

最後の研修は「清掃活動を通じて、社会貢献を考える」でした。清掃前は参加することに対してあまり前向きな気持ちではありませんでしたが、皆で掃除を始めてみるとごみを全て拾おう、きれいにしようという気持ちで芽生え積極的に楽しく参加できました。今回の清掃活動をしてみて、ボランティアや社会貢献は参加するまでのきっかけとなるものがとても重要であることがわかりました。

身近にボランティアや社会貢献ができる環境があれば地元で愛着を持ち、近所付き合いが生まれたりするなどの地域活性化につながると思いました。

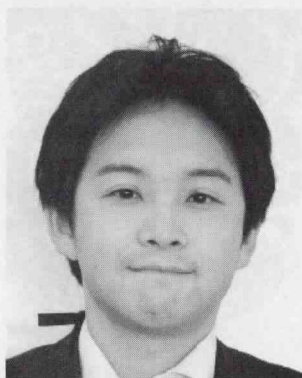
） 最後 に ・ ・ ・ ）

6つの企画全てにおいてそれぞれ貴重な体験と、「気づき」がありました。始まる前は、長いと思っていた8カ月の産政塾の研修があつという間に終了しました。

研修で出会った人々は、信念を持ち、行動して輝いている方ばかりでした。そして、周りの人々にも影響を与えていました。この「気づき」を自身の「殻を破る」につなげて成長していきたいと思えます。そして、今後たくさんの方の殻を破っていきたいと思っています。

月1回の研修は業務との調整が難しく、欠席するか迷うこともありましたが、全ての研修に参加したのも職場の皆さんを始め多くの方の協力により実現できたことであると思っています。この研修に参加させていただく機会を与えてくださった上司、人事課の皆様、出席するために迷惑をかけた職場の皆さん、ありがとうございました。そして、第20期産政塾で出会った塾生の方との出会いを今後大切にしていきたいと思えます。

相田みつを好きです



アイシン精機株式会社

蔵 田 英 登

《プロフィール》

くらた ひでと

- 1980年 愛知県大府に生まれる
- 2005年 アイシン精機(株)入社
- 2005年 人材開発部渡航駐在Tへ配属
- 2006年 妻（有香）と付き合い始める
- 2007年 賃金Tへ部内異動
- 2008年 妻（有香）と結婚
- 2009年 アイシン精機(株) アメリカ現地法人へ出向
現在に至る

〈家族構成〉 妻

〈趣味〉 部同僚とのフットサル、読書、旅行

【産政塾への王女】

『塾』という言葉が好きだ。まず漢字のバランスがとてもいい。歴史上で一番尊敬する人物は？と聞かれれば松下村塾を開いた吉田松陰と答えるし、大学時代は友人と5人で借りたボロい一軒家を『立志塾』と命名し、住んでいた。今でもそこは人が移り変わりながら続いている。約7カ月に渡る産政塾の研修を終えるに当たり、この経験によつて私が得られたものと今私自身が感じていることを率直に綴りたい。

まず、産政塾に入塾する前の私について少し述べると、2005年4月に、現役で大学を卒業するよりも2年遅れて新卒でアイシン精機に入社し、3カ月間の研修を経て、希望していた人材開発部に配属された。その後、部内にて海外赴任関係に約2年間半携わり、今の国内資金業務に移り、主に組合員の給与や賞与を担当させて頂いている。昨年（2008年）の11月には、2年半付き合った女性と結婚し新しい生活をスタートさせ、公私ともにまあ充実したと思える毎日を送っていた。そんな折である。当時の上司から産政塾の話を受けた。諸先輩方から兼ねてより、産政塾について伺っており、いつかは参加してみたいと思っていた私はまさに二つ返事で応えた。

しかしながら、時は誰もが講演の挨拶冒頭にて、枕言葉に『100年に1度の経済危機』という表現をつけるほどの大不況。当然、このような時に研修を受けている場合か？といった雰囲気があったことは間違いない。出張費も決して馬鹿にはならない金額だ。そんな時、塾OBの先輩から『何があつ

でも産政塾だけは一度も休むな!』と力強い言葉を頂き、その言葉を支えに最後の閉塾式の回では午後からの参加となってしまったものの、(最終班の皆さんごめんなさい) 皆出席で塾を終えることになった。

ここからは、自分の感じていることを中心に書きながら、塾での体験に触れていきたいと思う。

【30代を前にして自分が思っていること】

今現在私は29歳であり、もう半年もすれば30歳を迎える。ということは恐らく塾誌が出る頃には30歳になっているのではないかと思う。今まで良くも悪くも会社同期の仲間とはどんぐりでやってきた。どんぐりというのは、実際の能力は別にして、周りにいつも助けられ、まだまだ自身を大きく試されるようなことがなかったということだ。30歳を超えればそうは言ってはられない。会社でも家庭でも今までにない責任を与えられ、今までにない負荷を自分にかけていかなければならない。同時に30代というのは、まだまだ大きな可能性を持ち、それを実際に形にできる世代でもあると思う。大学を出て5年近くになるが、大学生という可能性と希望に満ちた時を過ぎ、社会人になって間もなかった頃は、一つの会社を選ぶことで、自分のやりたい道に実際に進んでいくという



実感とともに、今まで幾多にも無限に伸びていた可能性が急にしぼんだ感覚を覚えた。その細い一本の道の先に何かあるのかわからず、仕事もわからず、自分はこれでいいのかと問いかけ、時には、自分はいかにいいのだとかみ締めながら、今まで進んできた。特に工学部を卒業しながら、事務職に就いた自分としては、別の道に進んだ旧友と語り合うことで、そう考える時が多かったように思う。自分の選んだ道の答を見つけ出し、形にすることができることができれば、社会人になることでしぼんだと感じた可能性が、実はまだあらゆる分野に繋がっていることに気づくはずと信じている。自分の可能性を再び広げられるかどうか。30代はその境目。だからこそ、産政塾の塾生の対象者としても30代の若者としていていいのではないかと感じる。

【殻、そしてそれを打ち破るものは】

そうは感じながらも、入社してこの5年間、自分は何かを打ち破ってきたのであろうか。それなりに忙しくもあり、仕事を通して色々な経験をさせてもらい、身になったことも多いと思う。でも、何か根本的に大きな力で持つて、まさしく殻を破るようにして新しく生み出したもの・出されたものがあるだろうか。

茶道の言葉に守・破・離という言葉があり、大学時代の時に習った。確か茶道だと思うが、詳しくは知らず、それは今問題ではない。私の解釈が入るが、物事の順序として、まずは、決められた掟を

しつかり学び、それを継続し（守る）、そこで初めて問題点に気づき（破る）、新しい境地へと進む（離れる）ということになると思うが、これは仕事でも同じことだ。私は決められたルールは守るほうだ。ただ残念ながら、それ自体が壁、今で言えば、殻になっていることは否めない。まさしく私は守破離で言うところの『破る』が弱いのだ。その殻を打ち破るには？これをこの塾を通して漠然と考えていた。

【山中市長】

もうすぐ30代を迎える自分にとって、強く影響を受けたのは、私が所属する班で企画した第一回の企画で出会った三重県松阪市の山中市長である。山中市長は当時、史上最年少で市長となり、私とそう年齢が離れていない方が市長として市の将来、日本の将来を真剣に考え、我々に力強く講義してくださる姿にはおおいに感銘を受けた。医師の免許を持ち、アフリカへ医療ボランティアにも行かれたという経歴を持ちながら、『人を救うために本当に大切なのは政治だと気づいた』という志の高さとそれを実際に行動に移す実行力に素直に驚かされた。本当に必要なのは、あれやこれやと頭でっかちに考えるのではなく、動いて肌で感じることだということを強く感じた。

やや話はそれるが、参考までに山中市長の言葉を一つ紹介したい。山中市長は自身を『永遠の偽善者』と語っていた。あることを為す時にこれは本当に誰かのために思っているのか、それともそれをするにより、人によく思われたりしたいという偽善なのか、そう悩むときがある。しかし、

悩むこと自体に意味はない。どちらであろうが、それを実際に為すことにこそ意味があり、それを続けていけば、いつかそれは真の善になるはずだ。私は市長のこの言葉を決して忘れないだろう。

【お客様へ感動を与えるといいたい】

山中市長にお会いでき、当然、今のままの自分で本当に良いのかという感覚が沸き起こった。入社して今まで、常に先輩方の背中を追ってきた。部内にはたくさんの先輩が活躍しているが、中途入社の先輩方は特に何でも知っているなと感じさせられる人が多い。社内での視点しか持っていない自分とは明らかに異なる視点で物事を捉えている。

仕事における幅広い視点という意味で強い影響を受けたのは、東京での企画の時だった。仕事では、常にコストパフォーマンスとトヨタウェイであるムダ・ムラ・ムリの排除が求められる。私自身それを当然だと思っていた。しかし、このムダの捕らえ方というのを間違えてはならない。誰をターゲット、つまりお客様と考えるかによつて、ムダの捕らえ方は異なる。そう気づかされたのが、製造業とは全くの異業種であるホテルのCS (customer satisfaction) について学ぶ会だった。そこで我々はロイヤルパークホテルさんの様々なサービスの紹介や説明を受けた後、直にホテルマンとのざっくば



らんな話し合いの場を頂いた。その中で、あるホテルマンの方が話してくださったことは、『部屋を飾る花、その花の位置一つにしても1万人に1人のお客様でもいい、誰かが気づいてくれると思って、最高の思いを持って、その位置を決める』という言葉だった。ムダという言葉を履き違えれば、そんなほとんどの人が気づかないようなことに時間や神経を使つてないで、他のことに使えとなる。だが、お客様は誰かということを考えてみれば、それがいかに重要なことかに気づかされる。そういつた一見、ムダとも思えることによつてお客様は感動を受けるのではないか。お店を出たとき、時々振り返るとこんな私にですら、私が見えなくなるまでお辞儀を辞めない店員さんがいる。振り返らなければお客さんは気づかない。だけれどもお客様への感謝と敬意、それを心から思うことであのスタイルが生まれ、それによつて、感動を受けるのだなと感じた。何より、産政塾のために支配人の方まで1日中お付き合いしてくれたことにこのCSが言葉だけではないことを強く感じさせられたのである。

なお、余談ではあるが、この時、ホテルの取り組んでいるサービスとして紹介してくださったお部屋の弊社製のベッドが導入されていたことには、恥ずかしながら、それまで知らなかったものの、一社員としてとても誇らしく思えた。

【いよいよ出会った仲間へ】

最後にもう一つ感銘を受けたこと、それはこの産政塾の仲間だったと思う。普段、社内での付き合

いしかな自分にとって社外の方と語り合えることは本当に大きな意味があつた。改めて感謝を申し上げるとともに今後とも末永いお付き合いをお願いしたい。

【海外赴任が決定!】

さて、実は自分はこの産政塾の研修中にアメリカの赴任が決まつた。自分たちの企画が終つた、その翌週の月曜日の朝のことであつた。上司に呼び出され、個室に連れていかれた。何かと思いきや、『お前先週の金曜何食べた?』と問われた。その件を知っている部内の関係者は少ない。私はすぐに同じチームの後輩の顔が浮かんだ。上司は組合の経験もあり、産政塾の活動にも明るい。逃れられまいと思ひ、正直に『松阪牛です』と答えた。(三重松坂市長にお会いする際に寄りました。)上司は笑ひながら、『まあそれは別としておまえアメリカ行かにやらんくなつた。』と言つた。冗談としか聞こえなかつたがどうもそれが事実であつたらしい。

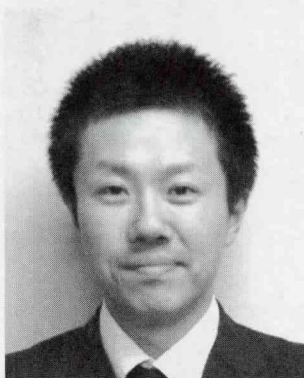
アメリカに赴任することが決まつていた私に加藤塾長は、『オバマがいる今のアメリカを肌で感じられるなんてうらやましいよ。』と言つてくださったことが印象に残っている。もちろん仕事で行くのだが、アメリカの文化や政治、価値観にも大きく触れてきたいと感じる。

【殻を破るには】

字数の関係もあり、そろそろ締めに入りたいと思うが、残念ながらこの塾を通して、私は殻を破るには至らなかった。しかし、殻を破るためには何が必要か、それを知るきっかけになったと感じている。自分自身で気づいた自分の分厚い殻。その殻を破るには相当硬い武器を持たなければならないだろう。固い何か、産政塾を通して出会った人々から、私はそれが『仕事への信念』ではないかと気づかされた。世の中を救おうという信念、お客様に感動をとという信念、そして、塾生の学ぼうという信念。信念こそ自身が殻を打ち破り、新たなステージに進んでいくのに必要なのではないだろうか。恐らくこの塾誌は私にとってのマイルストーンとなると思う。アメリカから帰ってきた時、予定通りであれば辞令は3年であるため、32歳になっているはずである。その時の自分がこれを読んでどう感じるか非常に楽しみである。一つ目標をあげたい。今まで自分は、入社以来誰かの指示に基づき、動くことが多かった。産政塾のねらいには次世代のリーダーを育てることがある。産政塾で出会った仲間はずでにリーダーとして活躍されている人ばかりで、私はたとえば、この塾でも色々な方に引つ張っていただき、付いていくことが多かった。加藤塾長、産政塾事務局の皆さん、塾生の仲間、企画で出会えた皆さん、および私を産政塾に快く送り出してくれた人材開発部の皆さんにお世話になった分を少しでも返せるように、アメリカでは現場に多く触れ、『自分の信念に基づいて自分で考えて動けること』を養って、帰ってきたい。それでは、行ってきます！



産政塾を振り返って



丸栄労働組合

鈴木 貴裕

《プロフィール》

すずき たかひろ

- 1999年 株式会社 豊橋丸栄 入社 営業第一部配属
- 2000年 丸栄労働組合 豊橋支部 執行委員
- 2002年 丸栄労働組合 豊橋支部 書記次長
- 2006年 丸栄労働組合 本部執行委員（豊橋支部 書記長兼務）
- 2008年 丸栄労働組合 本部書記次長（豊橋支部 書記長兼務）〈専従役員〉
現在に至る

〈家族構成〉 妻、子供一人

〈趣味〉 映画鑑賞

私は入社2年目の2000年9月に労働組合の役員に就任し、これまで様々な上部団体主催のセミナーや講演等に参加し、通常業務では得ることができない経験、他企業の仲間と交流する機会を得ることができました。

特に、この産政塾は当労組から参加された先輩方から活動内容等を聞く中で、参加することを期待していたので、参加が決定した際にはどのような体験ができるかと共に、仲間と出逢いが非常に楽しみでした。

【開塾式】

そんな期待と不安が入り混じる中、まだ肌寒い2月初旬に、第20期生の顔合わせとなる「開塾式」が行われ、出席にあたり、自分の取り組みたい企画を決めるという事前課題がありました。

事前課題については、どんなことを産政塾でやりたいのかを様々な視点から検討し、私達が働く百貨店に身近な接客サービスに関するテーマとこれまで興味が少なかった政治に関するテーマの2つに絞り込みました。特に政治に関しては、その当時夏に任期切れが迫る衆議院選挙が話題となっていたことに加え、労働組合の専従者として政治と身近に接する機会が増えたことか



ら、これまで以上に興味を持っていました。

しかし、「開塾式」が刻々と迫る中、こうした漠然としたイメージを持ちながら、企画内容が明確に決まらない状態が続きました。こうした中、三重県松阪市の市長選挙において、当時の最年少市長が誕生したというニュースを知りました。その頃、日本経済は100年に一度とも言われる未曾有の危機的状況を迎える中で、身近な雇用問題や少子高齢化、福祉・医療等の問題が山積している状況でした。

これらの問題については、私達自身も直面する時代となっており、そのような障害に立ち向かう若き政治リーダーは、どのような考え方を持っているのか、その人柄に触れるという得がたい経験に期待しました。この産政塾で私達の同世代である若き政治リーダーに会いたいと考え、開塾式に臨みました。

開塾式当日は、加藤塾長の講話の後、早速各グループに分かれて、お互いに持ち寄った企画テーマについて、議論を始めました。当Aグループは、テーマを決定するのに右往左往しながらも、最終的には、私の熱い(?)思いが通じ、若手政治家に聞く」というテーマで企画主旨が決定しました。

【第2回】若手政治家に聞く！

△企画実施に至るまで▽

私達Aグループは、第20期の最初の企画というプレッシャーに加え、「開塾式」からの準備期間が少なく、時間に追われながらの準備となりました。企画の目玉は、山中松阪市長と懇談であり、その目的が果たせない場合は、企画自体の変更も余儀なくされる可能性がありました。様々な紆余曲折を経ながら、最終的には市長と対談する機会を得ることができました。

また、山中市長と対談するにあたり、松阪市が積極的に取り組む施設や特産物等を視察することに決めました。様々な施設の中から、地域の活性化に向けた取り組みを視点に、「松阪市農業公園ベルファーム」と松阪市の名産である『松阪牛』肥育農家を視察場所に選びました。

△松阪市を訪れて▽

当日は、「松阪市農業公園ベルファーム」を訪れた後、『松阪牛』の肥育農家を訪問しました。ここでは、松阪牛の育てられ方について若干触れてみたいと思います。松阪市を訪れる前の牛を育てるといふ自身のイメージは、大きな牧場で放牧されているイメージでした。ところが、農家を訪れると牛舎しか見当たりません。それはそのはずで、大きな牧場ではなく、肥育しているのです。つまり、肥料で育てられているから、肥育農家と呼ぶのです。

松阪市の特産品として、松阪牛は確立がなされ、その美味しさを追求すると同時に、管理を徹底し、安全・安心を消費者へ提供する農家と行政の取り組みが非常に印象的でした。一方で、現在の育成者

は高齢化しており、後継者不足が課題との説明を受け、農家の担い手が不足している現状に問題意識を持ちました。

△山中市長との懇談より▽

私達は昼食を取り、山中市長と懇談するため、松阪市役所に向かいました。若き政治リーダーはどのような人物で、何を考え、市政を通じて何を成そうしているのか、様々な思いを巡らせる中、市長との懇談がスタートしました。

約1時間という短い懇談会でしたが、山中市長の人柄や考え方を垣間見ることができたと感じています。自分の住んでいる町を少しでも良い方向に変えた、そんな強い意志を貫き通す圧倒的な魅力を持った方でした。

また、山中市長は現在の松阪駅西再開発計画を含めた、いわゆる行政の「箱もの」事業の大幅な見直しを政策の中心に掲げて当選しました。その中でも特に、市長選でも争点となった再開発計画の問題については、市長就任3カ月が経過した中で、どのように市政の取り組みが変化しているのか、非常に興味を持っていました。

この駅西再開発計画は、私達の百貨店業界とも密接な関わりがあることから、個人的に再開発計画に対する市政の取り組みに非常に興味を持っていました。また、数年前に松阪市を訪れた際に、松阪駅前を歩いており、それ以降どのように変化したのかを体感することができると感じまし



た。

松阪市の担当者から、駅西再開発計画に関わるこれまでの経緯や現在の進捗状況等の説明を頂いた後、実際に松阪駅前視察を行いました。私が数年前に訪問した時と大きく様変わりしており、直近の新聞報道やニュースで聞いて想像していた通り、市街地の空洞化が進んでいました。市長のマニフェストにもあるように、現在進んでいる駅西再開発計画は一度白紙に戻し、改めて「市民の声」を重視した中心市街地活性化プランに期待したいと感じました。

こうして松阪市役所を後にし、肥育農家で美味しさを追求し、徹底された管理が行われている『松阪牛』を味わい、堪能しました。

△企画を振り返って▽

私達の同世代である山中市長と懇談する中で、自分の住む街への熱い志や強い思いを感じました。しかし、市長一人にこうした思いがあっても、重要なのはその街に住む一人ひとりが一緒に考えを持つことだと思います。

即ち私達自身が、自分の住む街の市政の取り組みに対して無関心にならないことであり、少しでも関わり合いを持つことが重要だと考えます。少子高齢化という時代を迎える中、住みやすい街を目指し、今から少しずつ、自分の住む街の市政に興味を持つて接していきたいと思っています。

【第3回】「これからの「農業」について考える」

“これからの「農業」について考える”をテーマに、豊田市にある「松本自然農園」を訪れ、私達と同年代である松本さんから農業に対する熱意を感じ、何かに一生懸命取り組み素晴らしさを改めて感じました。

「松本自然農園」は、安全・安心の食を提供し、食・健康・農への関心を高め、農業への新規参入を支援することを柱に掲げ、消費者のためにおいしいものを作ろうという思いで農業に取り組んでいます。特徴的キーワードはまさに「自然」であり、生物の多様性を大事にした農法を実践されています。

例えば簡単に言うと、畑に雑草が生えたら取り、また虫が発生したら駆除するという考えがないのです。自然農法はある害虫が爆発的に増えても、その害虫の天敵が大発生を抑えるという生物の多様性があり、そこに人間の手が加わることで自然の連鎖を壊さないことを重視しています。すなわち、害虫を害虫と見なさず、雑草を雑草として見ない、土は生きていると考える、それが自然農法だそうです。

これまで、実際に農園に訪れて、農業に接したことがなかったので、全てが非常に新鮮に感じました。また、昼食では、「松本自然農園」で収穫された野菜を使用した「情熱弁当」のお弁当が出され、無農薬・無化学肥料で作られた農作物を味わうことができました。農薬を使って育てられた農作物と

は味が異なり、大変美味しかったです。

今回は松本さんの農業に対する熱い思いに触れると共に、安心な食物を食べることができるよう、自分自身が食への関心を高めることが重要だと感じました。そのために、松本さんのように農業を活性化させる取り組みも重要であり、私達がどのように係わっていくことができるのか常に考える必要があると考えます。

【第4回】自分を知る、仲間を知る

産政塾は異業種の仲間の集まりであることから、その仲間を知ることが重要です。産政塾事務局企画として、「健康宅配便ハーモニー」の深見さんから「自分を知る、仲間を知る」をテーマに話を伺いました。

日頃の仕事や生活において、自分自身を振り返る機会は少なく、心と体の健康づくりという視点から、自分自身の普段の心身状態をチェックしました。もちろん結果は秘密です。その後、自己診断を行う中で、自分自身の性格を知り、さらには仲間の性格を知ること、これまで以上に仲間との信頼関係を深めることができました。

会社や職場には上司や部下がおり、自分一人で行える仕事には当然限界があることから、チームで

仕事を進めることが重要です。その際に、自分自身を含めた仲間の性格を知っていることが必要であり、仲間に興味を持つことが大切だと感じます。

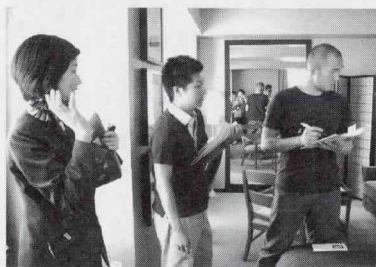
【第5回】※欠席

【第6回】プロのサービスを学ぶ　く見えない「お客さま」を意識するためにく

東京にある「ロイヤルパーク汐留タワー」において、ホテルの接客サービス等を含めたCS（顧客満足）への取り組みに触れられるということで、非常に楽しみに参加しました。

ホテルの経営理念やサービスに対する考え方等の講演や客室見学、従業員との意見交換等、充実した内容でした。特に、普段は宿泊しなければ見ることでできない客室見学や従業員との意見交換は、非常に有意義なものとなりました。

昨今、CSという概念が注目を集める中、多くの企業が積極的に取り組みを進めている。一方で、概念そのものは漠然と認識されているものの、理解や意



識の浸透には至らず、実際に行動へと繋がっていないことが多いとも云われています。

「ロイヤルパーク汐留タワー」におけるサービスに対する取り組みは、従業員一人ひとりがお客様をもてなすという意識が非常に高いことに加え、従業員同士でも褒め称え合うことが当たり前のように行われていました。また、お客様からの期待を察知することを心掛け、顧客満足を超える顧客歓喜へと具現化することを意識しながら、様々な取り組みを行っていました。

また、当日はCS向上に積極的に取り組む飲食店のサービス精神や取り組み姿勢を体感し、こうした接客サービスのレベルアップやCSに対する取り組みには、ゴールというものは存在せず、継続して取り組むことが重要だと改めて感じました。

【第7回及び閉塾式】※欠席

(最後に)

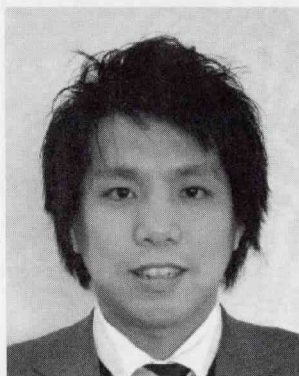
私は入社してから、売場業務を約10年間経験した後、労働組合の専従役員となり、これまでの環境とは大きく変化しました。加えて、これまでの自分を振り返った時、10年が経過する中で自分を見つめ直す機会が必要だと感じていました。産政塾のテーマである「殻の外へ踏み出そう」は、次の10年に向け、正に今の自分に当てはまるテーマだと感じました。

この産政塾を通じて多くの仲間を得ると共に、これまで経験したことのない貴重な体験をすることができ、自分の中にある人生経験という引き出しも増やすことができました。加えて、この産政塾でお世話になった方の熱い志や思いに触れ、自分自身を鍛えること、仕事に対する責任が重要だと思えます。改めて、自分自身を客観的に認識することで、「殻の外へ踏み出そう」と決意を新たに持っています。

様々な理由から、全ての企画に参加できなかったことが少し心残りではあるものの、閉塾式後の懇親会に参加し、この産政塾を通じて、異業種の仲間との交流を図ると共に、同世代の仲間と議論する機会を得られたことに改めて感謝しました。



第 20 期産政塾を振り返って



全トヨタ労働組合連合会

鈴木 祐 生

《プロフィール》

すずき ゆうぎ

- 1979年 愛知県名古屋市生まれ
- 2002年 某ファーストフード系企業に入社 営業部配属
- 2004年 愛三工業(株)に入社 人事部配属
- 2006年 愛三工業労働組合 専従役員
- 2008年 全トヨタ労働組合連合会
労働政策局配属
現在に至る

〈座右の銘〉人生については全員がアマチュアで新人だ

〈趣味〉サッカー観戦、フットサル、建築物巡り、読書

1. はじめに

「産政塾」の募集要項などを見たとき、大学時代、就職活動中に経験した自己分析に改めて取り組むような、自分の価値観・立ち位置を再認識する貴重な機会だと感じた。

自動車業界に身を置くようになり早や5年（うち人事2年、労働組合3年）。決して長いとは言えないが、この間で自分の意識にどのような変化が起きたか、言い換えれば、どういう色に染まってきたのか、自分では気付き難い部分を、「産政塾」で同世代の他業種・他職種の方々との交流や、同塾での様々な経験を通じて認識し、仕事を離れた部分で「人」としての自分、または「社会人」としての視野を広げ、自分を少しでも成長させたいと思い、参加を決意した。

全ての企画に参加することが出来ず残念ではあったが、様々な貴重な経験をさせていただいたこの7カ月間を振り返り、まとめたい。



2. 若手政治家に聞く（三重県松阪市） 〓 2009年4月10日 〓

自分が所属するAグループの企画テーマであったが、2～3月の殺人的なスケジュールをかいぐつての企画参加はほぼ不可能に近かったため、企画全般をお任せしてしまったことに對し、まずは

Aグループの仲間にお詫び申し上げたい。特にグループリーダーの鈴木さんや、横井さんには頭が上がない思いである。

さて、「若手政治家に聞く」と題したこの企画では、2009年1月に32歳で松坂市長に当選した山中光茂氏との懇談を主目的に、三重県松阪市を訪問した。

結論から申し上げれば、山中市長ほど「信念」と「覚悟」を持った同世代の人間に出会ったことがなかったため、同氏との懇談を通じ、自分の「信念」や「覚悟」とのギャップに大きなショックと刺激を受けた。

とりわけ、私の心に残ったのは、「永遠の偽善者」というフレーズ。

その行動が、偽善と捉えられるか、善意と捉えられるかは、人によって様々ではあるが、市民の気持ちを第一に考え、行動したことが、結果的に市や市民にとって良い結果が出るのであれば、偽善者と呼ばれても「信念」を貫き通すべき、という意味だと解釈しているが、このフレーズからしても、山中市長の揺るぎない「信念」と強い「覚悟」が伺い知ることが出来た。

この企画を通じ、自分の軟鉄のごとき「信念」や「覚悟」という『殻』の存在を認識出来ただけでも、大きな収穫だと感じている。

3. いれからの「農業」について考える（豊田市松本自然農園） 〓2009年5月8日〓



正直申し上げて、生まれてから現在に至るまで、本格的な農作業というものをしてことがなく、「農業」と「私」の接点は皆無に等しい。

知っていることといえば、「世界規模での食糧問題への注目が年々深刻化してきており、食料のほとんどを輸入で頼っている日本において、いかに食糧自給率を高めていくかが重要」や、「農家の後継者不足が深刻な問題となっている」というような、新聞紙面上でいくらでも書かれているようなごく一般的な事象だけである。

今回の企画では、個人で無農薬野菜を生産・販売している松本自然農園（豊田市）を訪問し、現地で農業の現状を確認した。

松本自然農園の園主である、松本直之氏は、手間がかかり、儲けの少なそうな無農薬野菜を個人で生産・販売していることから、「聖人君子」のような存在だと考えていた。

しかし、実際に直に話を伺ってみると、「農業活性化のためには儲かることが重要」「農家も経営意識を高めることが必要」「農業技術以外のスキルも活かして経営すること」など、「農業」を極めて客観的に捉えており、高い経営意識を持った「俗人」であつた。

松本氏の言葉で印象に残っているのは、「農業をやりたいと思つたらまずやってみること。やる気があるうちに行動に移すことが重要」という言葉。



「思い」から「行動」へのスピードをいかに早くするか、頭で考えるだけでなく思い切って行動することも、ときには重要であることを改めて認識することができた。

もちろん、無農薬野菜もおいしくいただいた。

4. 奥州平泉の世界遺産登録活動から学ぶ（岩手県西磐井郡平泉町）／2009年6月26・27日▽

この「世界遺産」とは、1972年に採択された「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」に基づき、全世界の人々の共有財産として国際的に保護・保全していくことが義務づけられている「遺跡」や「建造物」、「自然」などのことである。現在、日本では、「厳島神社」、「姫路城」、「石見銀山遺跡とその文化的景観」などの文化遺産11件と、「屋久島」「知床」など自然遺産3件の計14件が世界遺産登録されている。



「世界遺産」といえば、観光するものというのがごく普通感覚である。

しかし一方で、「世界遺産」とは登録するもの、という意識で活動されている方々もいる。

その一つが「平泉―仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群―」。

「日本」が世界に誇れるものを全世界の人々の共有財産とすべく活動している、岩手県西磐井郡平泉町を訪問した。

世界遺産に登録する意義は、観光地化し、地域を活性化することだと考えていたが、実際に世界遺産登録活動を行っている平泉町教育委員会世界遺産推進室室長補佐の千葉氏や、周辺住民の方々から話を伺うと、必ずしもそれだけではなく、奥州平泉の原点であり、誇るべき「浄土」の思想をいかに世界の方々に知ってもらうかを大切に考え、活動していることが分かった。

目先の利益に走るのではなく、純粹に「日本の大切な文化」や「日本人の心」を、世界の人々に知ってもらおうという大義を果たすべく、決して簡単とは言えない活動をしている点に、大きな刺激を受けた。大げさではあるが、何事にも「本当の意義はどこにあるのか」という意識を持って取り組むことの大切さを再認識することが出来た。

5. 清掃活動を通じて、社会貢献を考える（名古屋市 堀川周辺） 2009年3月15日

今回の企画は、名古屋市堀川周辺の清掃活動を通じて、社会貢献を考えるというものである。

「社会貢献活動」という言葉をそのまま捉えると、どうしてもハードルの高い活動だと感じてしまうのは私だけだろうか。

生まれてからずっと名古屋で育ってきた私としては、堀川と聞くとどうしても「汚い」というイメージを持ってしまいが、現在は、堀川の整備計画に加えて、地元ボランティアの清掃活動などにより、



少しずつではあるが、きれいになってきているらしい。

当日は雨の降る中、一定区間の清掃活動を実施したが、少しの区間であつても相当量のゴミを回収することができた。堀川周辺にあるゴミの絶対量に比べれば、今回の回収量は微々たるものであるかもしれないが、少しでもきれいになった状況を見ると、やはり気持ちのいいものである。

今回の活動を通じて、思い出した言葉がある。私が大学卒業後に2年間お世話になった某企業で使われていた、「ゴールデンルール」と「プラチナルール」という用語である。

ゴールデンルールとは「自分がして欲しくないと思うことは、他の人にもしてはならない」、プラチナルールとは「自分がして欲しいと思うような態度、言葉、行動などを、他の人に対しても実行しなさい」という意味だが、この考え方は「社会貢献活動」に繋がるものではないかと改めた意識させられた。

「社会貢献活動」とは、決してそれぞれに科せられたものではない。やらなくとも誰からも咎められない活動である。だからこそ、一人ひとりが率先して活動することが重要といえる。

事の大小はあれども、見知らぬ誰かが喜ぶであろうことをすることは、紛れもない「社会貢献活動」であり、あまり「社会貢献」と肩肘張らずに、小さなことを実践することから始めていこうという意識が芽生えた。



6. 最後に

産政塾の統一テーマは「殻の外へ踏み出そう」である。一連の企画を通じ、「殻の外へ踏み出す」前に、「殻」とは何かを考えた。

産政塾の企画を通して出会った方々に共通していたのは、そのレベルは違えどもしつかりとした「信念」を持っていることであつた。

「固定概念」と「信念」は、全く異なるものである。

自動車産業では当たり前のこと、労働界では当たり前のこと、他業種、他職種ではそうではないかもしれない。自分では常識だと思つていたことも、視点を変えればそうではないかもしれない。そのことを常に意識した上で出した結論が「信念」といえるかもしれない。

「殻」とは何か、明確に定義することは難しいが、自動車産業や労働界に身を置いてからのこの数年間で少しずつ凝り固まつてきた「固定概念」も、「殻」の一種と言えるかもしれない。

固定概念という「殻」以外にも、「殻」は何層にも続いているもので、それが何枚あるのか、その「殻」を何枚目まで破れたかどうかは現時点では分からないし、この先も分からないであろう。

ただ、産政塾を通じ、見聞を深めることや、視野を広げることが出来たことや、漠然とではあるが「殻」を意識することが出来たことは大きな意義があつたように思う。

これからも節目節目において、「殻」を意識しながら行動していきたい。

最後に、加藤塾長をはじめ、事務局の高橋さん、そしてAグループをはじめとする第20期産政塾同期の皆さんには、大変お世話になりました。貴重な経験を積ませていただいたことに対し、心から御礼申し上げます。

これまでの自分を見つめ直す



松坂屋労働組合

田 中 やよい

《プロフィール》

たなか やよい

- 1981年 岐阜県生まれ
- 1999年 株式会社 松坂屋 入社（食品売場 配属）
- 2007年 松坂屋労働組合 専従
- 2009年 専従休職のまま産休。現在に至る

〈家族構成〉 夫、長女（2カ月）、次女（2カ月）

〈趣味〉 料理、買い物

はじめに

まず、第20期産政塾に参加させていただきありがとうございました。

閉塾式が終わって2カ月経ちましたが、この9月24日に待望の双子の女の子を無事出産しました。事務局の方々、塾生の皆さん、そしてチームカトレアのメンバーには本当にご迷惑おかけしました。切迫早産のため8月に緊急入院したため、皆さんの企画、閉塾式にも出席できず本当に残念でなりません。

結局、Aグループの企画と私達のグループの企画、事務局の方が用意してくださった企画しか参加できませんでしたが、産政塾のテーマ「殻の外へ飛び出そう」の意味を考えながらこれまでの自分を見つめ直してみようと思います。

プチ殻の外へ・・・？

私は、高校卒業してすぐ今の企業に入社して今年で10年になります。なんかこの10年は長かったような短かったような・・・。

組合専従になって2年が経ちますが、それまで8年間ずっと食品売場で仕事をしていました。なんとなくこの8年間は、ただ毎日同じことの繰り返し、もちろん接客は好きな業務だし、お客様に「元

気で、笑顔がいいね！また来るね。」なんて言っていただけなら気持ち良く次の接客につけるし、店頭に出ると商品知識も身につくため、やっぱり売場は魅力的でした。

ただ：、8年経ってもなんだか自分が変わっていないような気がしました。商品知識を伝えたり、接客は問題なくこなせますが、（もちろん片手間なことはしていませんが）うまく言えませんが、先輩に言われた事しか出来ていない、自分で考えて行動に移すことが出来ないことに気がつきました。

そう思った年の異動で私は組合専従になりました。初めは「専従？何？どんな仕事？」もともと組合の事は全くといっていいほど知らなかったので（お恥ずかしい話で：）「とりあえず、やってみよう。」「これから何か変わるチャンスかな！」とまあこんな感じで就いた仕事でした。これって、少しだけですが最初の「殻の外へ飛び出そう」につながるのかなあ。

私の仕事は書記で、主に会計業務です。でも、簿記の資格はもちろん持っていませんし、パソコンなんて全然話にならないぐらい打てないので大丈夫かな・・・と不安でした。

当時、私は会計業務はもちろん、組合がどういった組織なのか知らなかったため、売場のような上司と部下みたいな感じではなく、上下関係がすごく厳しく「何？体育会系？」と思ったことを覚えています。会計業務を一手に引き受けていた先輩が半年後職制に戻られるため仕事を半年の間に引き継ぐとの事でしたが、「こんなに沢山の業務が私にできるはずない・・・」「もし、失敗してしまつたらどうしよう・・・」「売場に戻りたい。」とネガティブな考え方しか出来ず、仕事に慣れるまで結構時間が

かかりました。しかし、時間が経つにつれて、周りの方々の支えもあり、仕事にも慣れ、今までにな
い色々な経験をさせてもらって、仕事がすごく楽しくやりがいをもつて出来る仕事になりました。（残
念ながら今は産休中ですが・・・）組合の仕事もさせてもらって色々な方と知り合い、今回、産政塾に
も参加させていただき、組合の仕事ができて本当に良かったと思います。

開塾式

2月8日知立セントピアホテルへ未完成の企画書を持って緊張しながら会場に向かったのを覚えて
います。もうすでにグループ分けしており、そのグループで企画について話し合いました。

まず、自分が持ってきた企画をグループ内で説明をしました。が、緊張してい
て何を話したかあまり覚えていません。が・・・、私が持ってきた企画が採用さ
れました。正直、会場に向かう電車の中でギリギリに考えた企画だったのでびっ
くりしました。

でも、簡単に考えた企画なため、内容や詳しいことなど何も考えておらず
ごく不安でした。でもみんなが「これから一緒に考えていくから大丈夫だよ！」
と言っていた少し不安が軽くなりました（泣）。あとは勢いでチーム名がな
ぜか松坂屋の「カトレア」になり、当初のテーマが『「食」について学ぶ』に決

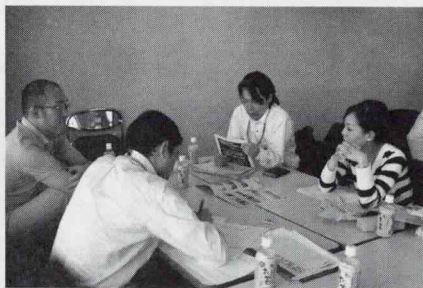


定。のちに『これからの「農業」について考える』がテーマに！夜の懇親会にはすっかり緊張もほぐれ、楽しい時間でした。ただ、残念なことはこの日は少ししかお酒を飲めなかった事。それがみんなと最後のお酒になるとは…。この2月末妊娠発覚!!!

「殻」とは、また「殻」を破るには・・・

私なりに「殻」について考えてみました。「殻」とは自分だけの世界（性格）を守っているもの。今までの経験で身に付け、周り・社会から防御できる世界（性格）守っているもの。自分自身が過去に失敗や経験が蓄積して自分を守り自分なりに社会に通じるように何十にも重ねたもの。ではないかなと思います。殻の中を理解してないことには破ることが出来ないため自分の殻の中を探ってみると…。

「あまりいいものではない。」私は、心配性。まだやつてもいないのに駄目だと決めこんでしまう。自分には出来ないかと決めてしまう。一人では物事を決められないため誰かについて回る。失敗するのを恐れ誰かの意見に賛同する。失敗すると立ち直れない。自分を責める。八方美人。調子いい。…。（なんかメンタルヘルス不全になる要素がありすぎる…。）



しかし、殻を破って外へ飛び出すことは不可能ではないと思います。自分自身「チャレンジする意識」を持っていれば出来る。なにことも「楽しんで挑戦する」ということを産政塾への参加を通して実感できました。

グループ企画 『これからの「農業」について考える』

Cグループ、チームカトレアの企画、実施したテーマです。場所は豊田市「松本自然農園」。当日は、午前中からパラパラと雨が降る中、松本自然農園を訪ねました。(週間の天気予報では晴天だったのに!!!)すごく空気のきれいな所でした。

松本さんは、痩せていて一見農業やつてみえる方には見えませんでした。松本さんの農業の仕事を始めるきっかけが、「自転車一周旅行の途中でたまたま出会った人から有機農法の話聞いた。」とか「研修先の農家のご夫婦の笑顔が良かったから。」というのにびつくりしました。松本さんの「前向きな考え」「決断力」「行動力」はすばらしいと思いましたし、見習いたい部分でもありました。

お昼には「松本自然農園」が野菜を卸しているお弁当屋「情熱弁当」の弁当を注文。これまた、その店長が情熱的ですごくいい方でした。



午後から、降っていた雨もすっかりあがり、松本さんの農園を見学。入口にはなんともユニークなカカシが立っていて、（どうやら管理者がいるらしい）何種類もの野菜が植えられていました。また、松本さんは自ら草信者と言うくらい、畑にはたくさん草が生えており（草は無駄に抜かないらしい）、松本さんの農法には衝撃を受けました。

雨上がりの少しぬかるんだ畑で農作業を塾生全員が体験しました。

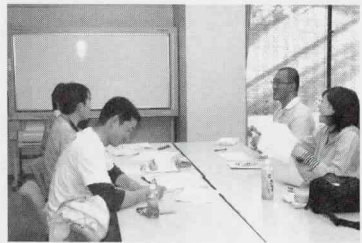
①表面の草を抜く（根っこも）↓②土を耕す（これが結構難しい…）↓③苗を植える↓④抜いた草を苗の回りに敷く（かなり多い）。⑤最初だけ水をたっぷり

あげる。こうすると、どこに何を植えたか分からなくなるが、成長するからいいらしいです。

松本さんは人前では話すのが苦手だと言ってみえましたが、畑で塾生に説明しているときはすごく楽しそうに見えました。今回の訪問を通して、「私達に出来ることは、身近なことから始めよう。」「まずは地産地消の率先。」「自分達で何か作ってみて興味・関心を持つことからやってみよう。」という意見を塾生と共有することができました。

やさい塾

今回せっかくこういった機会を与えていただいたにもかかわらず、開塾式のあと妊娠がわかり、な



かなか思うように参加できなかった事が残念です。少ない時間でしたが、産政塾の仲間と過ごせた時間は私の貴重な財産になりました。

実際、自分の殻を破ることが本当に出来たかどうか正直わかりません。でも、破るきっかけは見つけることが出来たと思います。これから私が歩む人生の中でさまざまな苦労、苦難があつたとしても、色々チャレンジして自分の殻を破り、一回りでも二回りでも大きく成長したいです。

さいごに、加藤塾長をはじめ、事務局の高橋さん、産政塾のみなさん、そしてチームカトレアのみなさん、今回産政塾に参加でき大変貴重な経験をさせていただきました。ありがとうございました。今は、3時間おきの授乳とオムツ替えの毎日です。きつとまたいつか会える日を楽しみにしています。双子用ベビーカーを押している人を見かけたら私かもしれません。ちょっと見てください！そのときは声をかけてくださいね。

本当にお世話になりました。

産政塾テーマ「殻の外へ踏み出す」とはどういうことを考える

～ 10年後の自分に向けたメッセージとして～



株式会社デンソー

田 村 元

《プロフィール》

たむら はじめ

- 1977年 福岡県福岡市生まれ
- 2001年 株式会社デンソー入社 人事部へ配属
現在に至る

〈趣味〉サッカー、キャンプ、読書 等

1. 入塾にあたっての問題意識

本年度第20期を迎える産政塾生として、09年2月の入塾以降、約半年間に亘り、様々な企画・活動に取り組んできた。そして今、卒業論文でもある塾誌をまとめるにあたり、テーマは「特に制約無し、自由に作成」ということであるため、どういった視点でまとめようか頭を悩ませている訳であるが、まずは改めて産政塾の狙いを振り返ることとした。入塾式の際に配布された産政塾パンフレットを開いてみる。

産政塾テーマ『殻の外へ踏み出そう』く意欲に溢れる若者たち！あつまれ！く

・入社して10年前後、それなりに仕事は面白い時期。しかし、企業や組織に長くいればいるほど新鮮な問題意識が希薄化し、心躍らせる刺激とは縁遠いものになっていませんか？今、何も考えないことはやさしいことですが、これから先、ずつと何も考えないことはつらいことです。

・人生で一番充実しているこの時期にこそ、自分を見つめ直す機会が必要だと思いませんか？さまざまな分野に活躍する人や同世代の異業種の仲間とともに切磋琢磨し、自らを磨きましよう。

端的に言えば、産政塾の狙いは①人脈を広げること、②自分を振り返ること、の2つである。この2点を通じ、自分の成長に繋げることが求められている。一見、いかにも有体で一般的な狙いである

様に聞こえる方もいるかもしれないが、少なくとも私にとっては、この塾に今年参加できたことは、大変有意義な機会であったと受け止めている。

2001年に会社へ入って職場配属されて以来、私は新入社員あるいは若手社員として、とにかく目の課題をどう解決するかだけを考え、企画と社内調整に明け暮れていた。景気も右肩上がり、会社も順調に成長する中で極めて繁忙な毎日。しかし今振り返ると、それは、与えられた仕事をいかに効率的にこなすかという域を出ないものであった。そういった中、入社して7・8年と月日も流れ、気付けば職場でも中堅社員となり、徐々に大きな課題やテーマを担当する様になる中で、従来の様な効率重視の働き方では徐々に通用しなくなってきたことを感じつつあった。つまり、細切れに与えられた仕事をこなすのではなく、自ら課題を形成し、自分らしい仕事をするという次のステージへの成長が求められ、壁に直面していたのである。

そういった問題意識を抱いている時期に、ちょうど入塾という機会に恵まれた。自分を振り返り、次なる成長に向けたきっかけにしたいという思いで、2月の入塾式へ参加した。

2. 活動の結果及び感想

入塾式以降、全7回の企画・活動が実施され、残念ながら業務の都合もあり内



1回は欠席となったが、参加した企画・活動には積極的に参画させて頂き、また25名の塾生の皆さん全員とも懇親を深めることができた。訪問先も多岐に亘り、松坂市長との対談、無農薬農業体験、一流ホテルでのCS体験、名古屋市内の清掃活動等、日常では味わうことの出来ない刺激を数多く得ることができた。

特に、私の属するDグループで企画・主催した「奥州平泉の世界遺産登録活動から学ぶ」において、岩手県という遠く離れた土地で、20名近くの塾生の皆さんに、少しでも多く何かを得て頂ける様、事前準備や当日運営に腐心したことは印象に残っている。何より、そういった準備・運営を通じ、Dグループメンバーである刈谷市役所内藤さん、豊田自動織機労組長倉さん、東邦ガス労組遠藤さん、豊田合成労組三宅さんの4名の皆さんと、垣根無くフランクに議論し、そして企画成功のために支え合った人間関係は、この産政塾で最も貴重な財産となった。企画を成功させるという目的に向かって議論したり協力したりする中から自然と信頼関係が生まれ、徐々にお互いの壁が低くなり、打ち解け合える仲になっていくことを毎回の活動で実感できた。そういった意味で、狙いの1点目については達成できたと考える。そして今後も、皆さんとの人脈を是非大切にしていきたい。なお、奥州平泉での活動内容については、産政研フォーラム第83号の誌面上で別途報告させて頂いているため、感想を含め、当原稿上では詳細を割愛させて頂く。



次に、狙いの2点目である「自分を振り返る」に関して述べたい。産政塾は自分を振り返る良い機会であるが、この原稿は、最終的に冊子としてまとめて頂けるということもあるため、これまでの活動の振り返りというよりもむしろ、将来の自分に向けたメッセージとして、勝手ながら現時点の私の思いを保存する場とさせて頂き、例えば10年後、この塾誌を自分が読み返した時に、成長できているか、殻を破れているかを確認するためにまとめることとしたい。それでは、私自身にとって、「殻の外に踏み出す」とはどういうことであるかについて、日頃抱いている問題意識に結び付けながら少し深掘りしてみる。



3. 「殻の外に踏み出す」とは10年後の自分に向けて

(1) 環境認識

米国発の世界的不況と日本経済の急速な変化により、09年は、多くの企業が過去に経験したことのない環境変化の渦の中で幕を開けることとなった。とりわけ自動車産業は、従来のガソリン・軽油からEV・HVといった動力源へのシフトが鮮明であり、「新たな産業革命」の到来と言われる程、環境変化が激しい。競争の構図も大きく変わりつつある。系列を軸とした部品メーカーがボデーメーカー

を支えるという構図は徐々に崩れ、電機・重工・IT等、従来競合相手ではなかった企業が新たに参入してきている。また、中国・インドを始めとした多くの新興国が台頭する等、従来にない困難な課題が山積している状況である。

このような環境変化を踏まえると、日常の仕事の場面において、これまでのやり方や考え方の延長線上では、変化に対応できなくなるということは容易に想像がつく。また、この“新たな産業革命”は、一部の経営者や技術者だけの問題ではなく、当然のことながら、私も含め自動車産業に携わる全員の課題と捉えなければならぬものである。そういった意味で、私は、一人ひとりが自らの力を高める努力をしなければ、個々の企業の存続というレベルの問題でなく、日本の自動車産業あるいは日本全体が負け組になるのでは、という不安を感じている。

(2)私のとつての「殻の外に踏み出す」とは

①勤勉にコツコツ学び続けること

次に、そういった不安を感じる背景について述べたい。先ほど触れた通り、これまでの私は、与えられた仕事をいかに効率的にこなすかという意識しか持っていなかった。つまり、自分の仕事を自分らしいものにするために、これまで、十分に「勉強」して来なかったのだ。遡れば、学生の時も十分勉強していたとはやはり言い難い。目前の課題をクリアするために最低限のインプットで要領よくそ

の場を乗り切る、それが私のスタイルであった。「若い時に勉強しておけば良かった」とはよく聞くフレーズだが、正に私に当てはまるものであり、反省・後悔せずにはいられない。そしてこの気持ちは、産政塾において、他業種の同じ年代の方と議論したり、あるいは松阪市長を始めとした各方面の第一線で活躍されている方々の考えを聞いたりする中で、改めて認識させられるものであった。

とくに最近こういった反省をしているわけだが、さらに問題が深刻なのは、少なくとも私だけではない、「若者全体」の傾向が同様であるという点だ。誤解を恐れずストレートに言えば、「昔と比べて、日本の若者はバカになっている」ということだ。この点に関連して関心を持っているのは、日本の学生の学力低下だ。07年9月にOECDが発表した各国の教育に関する調査結果によると、日本の中学校の授業数はアメリカの半分程度であり、また日本の中学生の家庭での学習時間も先進国中ほぼ最低の部類に入ららしい。また、07年4月に文科省関連の日本青少年研究所が発表した高校生の意欲に関する調査でも、「偉くなりたいか」という問いに対し「強くそう思う」と答えた高校生は、中国34.4%、韓国22.9%、アメリカ22.3%に対し、日本はわずか8.0%という結果である。競争して差がつくことへの恐怖心が日本の教育の場で実際に叫ばれ、受験競争を緩和するために「ゆとり教育」が導入されたことは、この傾向を助長してしまったのではないか。もはや、「勤勉で向上心にあふれる日本人」という姿は、今の若者世代で消えてなくなるのではないかと感じられる。

その一方、よくビジネス書等で目にするが、大企業のトップには、読書家の方が少なくない印象を受ける。経営者は、歴史・思想・哲学といった教養的なものを好み、迷いを晴らすために同じ本を繰

り返し読む傾向が強いとのことである。さらに明治初期まで遡ると、当時は「書生」と言われる人達が、日々、読書と研鑽を重ねていた。多くの書生を鼓舞した代表的な本として、「学問のすすめ」や「自助論」が挙げられる。とくに自助論に関しては、当時、攘夷運動をしていた人が多いにもかかわらず、イギリスを中心としたヨーロッパの成功事例を読んで啓発されていたというのは興味深い。やはり、勤勉こそが成功の条件と信じていたのだと思う。そして、そういった人物が、日本を支えていたのが事実である。

私自身あるいは私の世代を含め、ここ10〜20年の日本人が何となく「勉強なんてしなくて何とかなるさ」という雰囲気であった一方で、世界は、前例に捉われずに自分自身でスピーディに判断できるエグゼクティブ人材を要求するようになってきており、このままでは、日本人は世界を舞台に戦えなくなっていくのではないかという不安にかられてしまうのである。

漠然とした話しになってしまったが、これからの私にできることとして、日本人の強み・原点である勤勉さ、あるいは謙虚にコツコツ学び続ける姿勢を大切にしていきたい。1日に1つでも良い。欲張らずに少しずつ積み上げていくことが、自分の仕事をより良いものにしてくれるはずであり、それが結果的に自分の殻を破ることに繋がると信じている。

②本質を捉える知恵、正しい倫理観・哲学を身に付けること

ここまででは、学び続ける姿勢についてまとめたが、次に「何を学ぶべきか」について考えてみたい。

この点を掘り下げるにあたっての前提として、90年代から急速に進展・浸透したIT化の影響を考慮する必要があると考える。具体的には、パソコンがインターネットに接続され、世界中のデータ・情報が瞬時に無料で集められる様になったことで、「物知り人間」の価値が低くなったという点である。記憶やデータ処理といった役割はコンピュータに取って代わられ、知識の豊富さや記憶力といった人間の能力は、従来ほど求められなくなっている。代わりに人間に求められる様になったのは、「知恵」と言えるのではないだろうか。

20世紀までは資本主義経済の時代であり、代表的な重厚長大型産業は、文字通り資本がなければそもそも成立しなかった訳であり、資本（カネ）のあるところに優秀な人材が集まっていたと思われる。しかし21世紀は知恵の時代であり、少ない資本でも極めて高い知恵があれば、ビジネスを拡大させることができる時代となったのである。マイクロソフトのビル・ゲイツも、ガレージで友人2人とソフトウェアビジネスを始めたところがスタートであり、そのモデルを拡大させたことで今の地位を築いており、他にも、iPodといった新しい形態のソフトウェアを提供するApple社や、新しいサービスを提供するGoogle社等、従来の枠組みを超えた新たな知恵を生み出す企業が一人勝ちできる時代である。価格競争が熾烈な衣料品業界の中でもユニクロは売上げを伸ばしており、外食産業低迷の中でもマクドナルドは成長を続けている。つまり、日本全体の経済成長が止まった今、厳しい環境の中でも伸び続けられるのは、知恵を持つ社員と経営者が一人でも多く育っている企業ではないだろうか。

このように、陳腐化する知識ではなく普遍的で根源的な知恵という力が必要、ということころまでは

イメージできるのだが、残念ながら現時点の私には、知恵というものに関して、これ以上具体化できる思考力とボキャブラリーを持ち合わせていない。従って、せめて他の方の言葉を借りるならば、稲盛和夫氏の言葉が私にとって一つのヒントになると感じているので、引用させて頂く。

『稲盛和夫の実学』より：「物事の判断にあたっては、つねにその本質に遡ること、そして人間としての基本的なモラル、良心に基づいて何が正しいのかを基準として判断することが最も重要である。」

知恵という単語は、奇をてらったアイデアやこれまでにない発想を意味する様にも聞こえるが、物事の理を知り適切に処理する能力、あるいは人生の指針となる様な哲学的知識という意味を持っている（広辞苑より）。これからの時代は、先例に倣っておけば大丈夫という時代ではなくなるため、善悪の判断基準は、社会常識からみて健全か、あるいは一般大勢の人が喜ぶものであるかという問いへの答えとしての「自分の中の倫理観・哲学」に、究極的には行き着くと考える。本当に世の中に喜ばれるものは何かを突き詰め、生まれた結果がマイクロソフトのシステムであったり、Apple社のソフトウェアであったりしたのだろう。

一生かかっても私には達成できそうにはないが、本質を捉える知恵や正しい倫理観・哲学を身に付けようと努力する姿勢は、必ず私にとって私の殻を破ることに繋がると信じている。

以上の通り、取り巻く環境変化が激しい中で、自分の殻を破るため、①勤勉にコツコツ学び続けること、②本質を捉える知恵、正しい倫理観・哲学を身に付けることの2点を挙げさせていただいた。

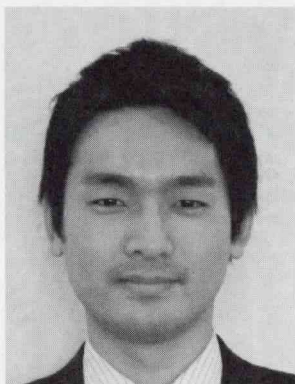
そして10年後、自分を振り返った時に、多少は殻を破ることができている様、産政塾の卒業生として自分の力を高める努力を怠らずにこれからの日々を送りたい。

4. 最後に

第20期という節目に入塾させて頂き、そして様々な企画・活動を通じて貴重な経験を得ることができたこと、自分を見つめ直す機会をいただいたことを改めて感謝したい。そして今後も、塾生の皆さんとの人脈を大切にしていきたい。

最後になりましたが、加藤塾長を始め、事務局の高橋さん、スタッフの方々、また塾生の方々、そして内藤リーダー他、Dグループの皆さん、本当にお世話になりました。ありがとうございました。

産政塾を振り返って



株式会社豊田自動織機

外 山 遥一朗

《プロフィール》

とやま よういちろう

- 1982年 名古屋市生まれ
- 2004年 株式会社豊田自動織機入社
繊維機械事業部にて4カ月間の工場実習
- 2004年 株式会社豊田自動織機ウェルサポートへ出向
給与部に配属し、給与計算や税・社会保険担当となり
現在に至る

〈家族構成〉 妻

〈趣味〉 旅行、スキューバダイビング

▼はじめに

私は入社して5年間ずっと同じ部署で、ほぼ変わらない仕事を担当してきた。そのためか、最近はどうどんチャレンジしよう！という意気込みも薄れ、ともすると深く考えずに仕事するのが普通になってきてしまっていた。日常生活でもだらだらと過ごすことが増え、「なんとかしないと」という危機感はあるものの何もしない、そんな毎日を過ごしていたような気がする。

そんな時、産政塾への参加の話をいただいたことは大変幸運であった。会社の産政塾OBに聞くと、「産政塾は本当に勉強になる」だとか、「刺激的なメンバーの集まり」と言われ、なんだかとてもワクワクした。これをきっかけに何か新しいことにチャレンジできたらいいな、との思いを抱きながら開塾式に挑み、予感はそのものとなった。産政塾のメンバーは個性的な方ばかりで、これは半年間楽しくなりそうだと思う私は、ちよつと気が大きくなっていたせいか、僭越ながらBグループのリーダーを務めさせていただくとなった。

しかし、ここからBグループの苦難の道が始まったのである。

▼Bグループのエピソード



私がリーダーを務めることになったBグループは、一言で表現すると「アイデアマンの集まり」であつたと思う。

初回の開塾式のディスカッションの際、他グループは大体のテーマが固まり、実際にその時の企画案をもとにして実施している。しかし私たちのグループは、メンバー持ち寄った企画案が多く、その時には「食について考える」というテーマを決めたものの、その案は次回打ち合わせ時には変更となり、その後も何度もテーマを変えて企画案を作り直した。

しかし、残念ながら諸事情により、いくつもの企画が企画倒れとなつてしまった。企画が甘かったもの、不運だったものといういろいろあるが、是非ともこの場を借りてその企画案を少しでも紹介させていただきたい。その企画一つひとは私たちBグループのアイデアと苦労の結晶であることに変わりないのだから……。

(1) サントリー工場見学

「産政塾Ⅱ産業政策について考えるところ」という発想のもと、実際の企業を訪問してその経営方針や事業内容について学ぼうというところから出てきたアイデア。金融危機からくる不況の中、08年に過去最高益を出したという点と、赤字でもあきらめずにヒット商品を生み出したチャレンジ精神を学ぶため、「サントリー株式会社」に注目した。

経営企画担当者とディスカッション↓ビール工場見学↓夜はプレミアムモルツの店で懇親会、という企画内容や、ちょうど日経ビジネスに特集が組まれていたこともあつてかなりメンバーのテンションは上がっていたのだが、先方の事情により企画を実行できないこととなりあえなく断念。非常に残念…。

ただ、サントリーという企業を注目した時、過去最高益・ヒット商品etc.といった視点ではなく、株式上場をしていない、という点に注目するのも面白いんじゃないか、といった議論をできたのは非常に勉強になり、有意義だった。

(2)「夢と希望と元気を与える場に学ぶ」→関西独立リーグ経営を通じて

前回の件は仕方がないと、改めてメンバーで集まって出てきたアイデア。この時も多くの代替案がでてきたので、多数決で決めたほどであった。

プロ野球でも経営が厳しいとされる現在のスポーツ業界において、関西独立リーグは、「野球を通じて青少年の育成と地域活性化を図る」という趣旨によって設立された。そうした新しいアイデアを実現するための行動力やビジネスモデルを学ぶという企画であった。

今回は先方にも快諾いただき、スケジュール調整も順調に進んだ。会社のある大阪や球場のある神戸まで下見にもいったのだが、ここで思わぬ事態が！

「関西での新型インフルエンザ発生」である。5月下旬、私の会社でも関西方面への出張自粛令が出て、

先方からもインフルエンザの影響で試合ができないかもしれないから中止してほしいと要望があり、事務局と相談しこの企画も開催中止を決めた。ただ、その日夜のニュースでは、関西独立リーグ経営危機と報じられ、これはもしやインフルエンザに救われたのか？とも考えさせられてしまった。

この頃から「Bグループ企画は呪われているのでは」とか冗談で言い始める……。でもこの頃はまだ笑っていられた。次頑張ればいいさうって感じで。

（3）「被爆体験を通じて平和について学ぶ」 ～広島平和記念公園～

関西独立リーグ企画を決めた時に、代替案として決めてあった企画。最初の企画がボツになったとき、私たちは用心して多くの企画案に優先順位をつけておいたのである。

本年は北朝鮮によるミサイル発射やオバマ大統領の核兵器縮減宣言もあり、戦争や平和に対する関心が高まっていると言える。しかし私たちの多くは戦争を体験したわけでもなく、平和であることがあたりまえ、いわゆる平和ボケしていると言われても過言ではない。そんな中、被爆者の戦争体験を聞き、改めて平和について考える機会を作ろうという企画であった。

戦争が終わって60年以上が経ち、実際に話を聞くことも難しくなるなか、これは産政塾のテーマとしてもふさわしいのでは…と思いつながら、広島平和記念公園や市役所、広島大学等に電話をかけ、私たちの考える企画案を聞いてもらい、スケジュール等も調整しているところだった。

しかし、またしてもこの企画が日の目を見ることはなかった。前回の企画延期を受けて再設定され

た日は、8月27日。7月、衆議院総選挙が8月29日になったことを受け、諸事情によりこの日も延期となり、今回は地元開催することとなつてしまった。

この企画中止、延期を受けて、メンバー内でもだいたい意気消沈し、「Bグループはこのまま企画を実行できずに終わるんじゃないだろうか」と不安になる。

▼私たちの企画 「清掃活動を通じて社会貢献を考える」

9月初旬、今度こそ自分たちの企画を実行するため、再度メンバーで集まり、企画案を出し合った。今度は閉塾式を兼ねて行うため、近場で実施してなるべく多くの方に参加してもらうという条件つきであつた。

そこで決まった案、じつはこれかなり初期の打ち合わせの時にアイデアが生まれていたものだった。改めてBグループの発想力に感心する。その後、詳細をつめていく中で、名古屋市を流れる堀川の清掃活動を実施することに決めた。

事前準備において、私の担当は企画書の作成と関係各所との交渉であつた。生まれてこの方ずっと名古屋市民であつた私であるが、堀川のことについてはよく知らず、ひとまず名古屋市役所の所轄部署に電話してみることに。す



ると、その部署でも清掃活動についてはよく知らないとの回答。うーん、せっかくやる気になってい
る市民がいるのにそれはないよ、と思いながら、その後土木局や環境局などいくつも電話をかけるこ
とに……。

そこで私は、時間が無いし電話だけでなんとかならないかな、という甘い気持ちを捨て、実際にそ
れぞれの担当の方に会いに行くことにした。これが正解だった。私が訪問すると快く受け入れていた
だき、企画案もほとんどん拍子で固まっていた。やはり自分の足で訪れ、相手と面と向かって話すこ
とで仕事は進んでいくんだと再認識した出来事であった。堀川整備局の小島様、本当にありがとう
ございました。

当日の清掃活動では、本当にいろいろなゴミが落ちていることに驚いた。実は私は、会社周辺の清
掃活動ぐらいしか参加したことが無く、こうして本格的にやることは初めてである。

▼自分の殻をやぶれたのか

私が考えていた「殻」とは「無理だという思い」だった。そんな無理だ、自分にはできない、と
いう気持ちの方が分厚い「殻」となっているのでは、と感じていた。では、産政塾を通じてその殻をやぶ
れたかと言うと、まだまだだと思う。でも、きつかけはつかんだ。今回、Bグループはいくつもの企
画を作っては駄目になり、それでもあきらめずに最後には納得いく企画を実現することができた。あ

きらめずにチャレンジするという気持ち、これを思い出させてくれたことは、今後大きく「殻」を破って成長するきっかけになると信じている。

冒頭にも書いたが、私は入社以来ずっと同じ仕事に携わってきて、ずいぶんマンネリ化していた。しかし、産政塾の活動を始めてからは仕事を進める上でも、無理だと思っていたこと、面倒だと思っていたことにも積極的にチャレンジしようと思えるようになってきた。この気持ちは今後も忘れないようにしたい。

▼最後に

今回、産政塾に参加させていただいて、一番うれしかったことは、やはり「出会い」である。私が所属したBグループは、前述の通り企画を実行するまで大変だった。しかし、そのために業務後に集まった打ち合わせ（飲み会？）を幾度となく開催し、何度も何度も意見をぶつけ合い、時には仕事の話や趣味の話をして過ごした。私が産政塾で真つ先に思い返すのは、この打ち合わせの時間である。同じ目標に向かって、いろいろな思いを持った人間が集まって1つのものを実現していく過程が本当に楽しかった。

また、リーダーを努めることの難しさも実感できた。リーダーにとって必要な



もの、なんていうのはまだ理解したとは言えないが、年も会社も違うメンバーの中でやらせていただけたことは、とてもいい経験になった。

Bグループのみなさん、ふがないリーダーでしたが、一緒に活動できたこと、本当に感謝しています。

最後になりましたが、加藤塾長をはじめ事務局の皆さま、ともに楽しい時間を過ごさせていただいた第20期生の皆さん、本当にお世話になりました。ありがとうございます。

産政塾物語～大きな一歩と永遠の絆～



刈谷市役所

内 藤 隆 史

《プロフィール》

ないとう たかし

- 1978年 愛知県名古屋市に生まれる
- 2003年 刈谷市役所入所 上下水道部下水道建設課配属
現在に至る。

〈家族構成〉 妻

〈趣味〉 中日ドラゴンズの応援、音楽を聴くこと、登山、カメラ、
フットサル、読書、演劇・落語鑑賞、歴史探索

☆プロフィール

ある日のこと、上司のひとりから声を掛けられた。

「内藤君、サンセイジユクに応募してみたらどうだ？」

「サンセイジユク？」聞きなれない言葉に思わず「賛成塾？」などと想像する。大変失礼な話であるが、私は工業都市として多くの企業の本社機能を有する都市に公務員として勤めていながら、このとき初めて「中部産政研」の存在を知ったのだ。しかし具体的な内容を知った瞬間に僕の頓珍漢な想像は吹き飛び、その魅力にとりつかれてしまったのだった。

☆産政塾参加の動機

市役所に入所して6年目（当時）。一度も部署を変わずに過ごしてきた自分は、仕事に対する慣れと固定観念から感受性が弱まり、感性は失われ、新しい発想ができずにもがいていた。そんな矢先にこの話は舞い込んだ。まず参加するメンバーに惹かれた。そこには自動車産業から販売業、インフラ関係、交通産業まで中部産業界でも指折りの企業の名前が並んでいた。公務員である自分にとって、は正に未知の世界であり、また同じ塾生となるのが同世代であることが非常に刺激的であり、魅力であった。そして産政塾共通のテーマ「殻の外に踏み出そう」は正に自分が求めていたものであった。

☆開塾式までの不安と葛藤

「こんな機会は二度とない」私は迷うことなく研修に申し込むことを決めた。研修参加が決まってから開塾式までの間は本当に待ち遠しかった。だが同時に、小心者である自分は知らない世界へ飛び込む不安も感じていた。官民の隔たりや未知なる労働組合という世界を急に意識してしまい、自分がそこに溶け込めるのかがわからず、過去に参加した先輩などから話を聞いて不安の解消に努めていた。

☆カルチャーショック

平成21年2月4日水曜日。ついに第20期産政塾の開塾式の日を迎える。会場に到着すると他の塾生らしき人々を見かけ、本当に同世代が多かったことに少し安堵した。でも緊張感が残っていて、受付後に撮った顔写真は変な顔になってしまった。この写真はその後の研修の度にレジュメ等に使われることになる…。

開塾式冒頭、加藤塾長からの講話に大きなカルチャーショックを受ける。同時に研修に対する意欲が一気に高まる。ときはリーマンショックに端を発した世界的金融危機の真只中であり、日本有数の企業が集積する中部地区もその影響を多大に



受けていた。アメリカではオバマ新大統領が就任、日本でも参議院議員選挙では民主党が第1党となり（後の衆議院でも民主党が第1党となり歴史的な政権交代となる）、日本も世界も変革の時期を迎えようとしていた。自動車産業の最先端で時代を見てきた塾長の言葉は、近年聞いたどの言葉よりも重たかった。特に印象的であった内容をふたつ挙げよう。ひとつは「新しい責任の時代—new era of responsibility」。国が何かするのではなく、国民自らが責任を自覚し国を作る理念である。求める体質を脱却し、自ら考え行動する。自治体の限界という言葉は耳が痛い、地方公共団体としても住民とのあり方を考える時代に来ている。民間企業で生きてこられた塾長からの言葉は、自分にとつて非常に新鮮なものであった。もうひとつは己を「鍛える」こと。厳しい時代に直面している今だからこそ、「殻をやぶる力」をつけるためにじつくりと己を「鍛える」ことが大切であるという話は自分にとって新しい考え方であった。これらの言葉を受けて、産政塾に対してだけでなく、一社会人としての意識も変わった。

塾長講話の後、各グループで研修の企画に入った。初対面の面々は互いに緊張していたが、「なんでもあり」というのが後押ししてグループ内で様々な提案が出され、話は非常に盛り上がった。そしてメンバー全員の思うがままに宿泊付の研修を企画してしまった。この後思いもよらぬ苦労を経験するとも知らずに…。

☆仲間の存在の大切さ

ついに産政塾がスタートした。初回は4月。しかし産政塾は開塾式が終わった翌日から始まっている。研修内容を企画することがこんな大変な作業になるとは思ってもいなかった。他のグループでは企画が二転三転するなど、自分なら挫折してしまいそうな話も聞いた。我々は開塾式で平泉の世界遺産登録活動について企画し、その点については現地へのアポイント等もスムーズに進行し、順調な滑り出しとなった。しかし、このときはまだ自分達が様々な問題に悩まされるとは夢にも思わなかった。

産政塾でまず何を思い出しますか？と聞かれたら、まず自分達の企画作成の道のりを思い出すだろう。最初から最後まで悩んだのは予算だった。与えられた予算は宿泊付きであっても他のグループと同額の予算。不足は他のグループと交渉して下さいとのこと。しかし自分たちのグループと同じように他のグループにも当然やりたいことがある。その想いを尊重したい気持ちと予算が足りない現実の狭間で深く悩み、多くの方々にご迷惑をかけた。まずはDグループの企画は塾生全員と事務局の多大なる御厚意と御協力があつたからこそ成功したということを伝えたい。またスケジュール管理、旅行計画、不透明な現地状況など問題は山積みであった。先方の世界遺産推進室の千葉氏とは電話、メールを駆使して構成をまとめていったが、直接顔を合わせて話ができないことから互いの想いを伝えることにも苦慮した。何より宿泊付の研修は塾生から一番期待されていて、そのプレッシャーは非常に大きいものだった。何故か自分はグループリーダーを引き受けていた。適任とは到底言えないその仕

事振りは多くの人に迷惑をかけた。

苦しいときにこそ何が必要なのか。それは仲間の存在だった。同じグループのメンバーの存在は本当に心強かった。また事務局にも多くの御協力を頂き、企画を無事終えることができた。全てを通して仲間の大切さを心の底から感じた。参加していただいた塾長、塾生からは多くの劳いの言葉を頂いた。涙が出た。改めて、同じDグループで頑張ったデンソーの田村さん、豊田自動織機労働組合の長倉さん、豊田合成労働組合の三宅さん、東邦ガス労働組合の遠藤さん、事務局の高橋さん、平泉町世界遺産推進室の千葉さんにこの場を借りて御礼を申し上げます。

この経験は自分の中で非常に大きなものとなった。帰ってきた時に感じた達成感は今でも忘れられない。

☆研修から得たもの

企画立案だけでなく、研修そのものからも非常に多くのものを得た。文化財保護という意識が希薄な日本とグローバルイズムの中で失いかけている日本人のこころを考えるという観点から平泉の世界遺産登録活動に焦点を当てて様々な内容を企画したが、現地視察、坐禅体験、グループワークによって平泉文化の真髄に触れることにより、そのねらいは見事に達成された。平泉の歴史は平和の理想郷Ⅱ浄土の世界を創造していることから現代の平和憲法に通じるものがある。またそこに残る文化は歴史が育んだ日本独自の美しさを湛えていた。戦後から60年以上が経過し、戦争を知る人々も少なくなるとともに、多くの歴史的建造物を犠牲にして発展した日本はもう一度原点に立ち返る必要がある。我々

は再び歴史から学び、日本人のこころを後世に伝えていかなければならない。現在の国際社会において日本の役割や立場は政治的にも経済的にも大きく変わろうとしていて、個性を上手く出せない日本が国際社会でどのように存在感を出せるかが試されている。今こそ日本人のこころを学ぶことにより、自分を知ることが必要である。そのために大切なのは自分の目で見て感じることに。実際に平泉に足を運ぶことにより、メディアを通してではわからない物事・問題の本質や歴史の真髓を知ることができた。元々歴史好きな自分であるが、平泉訪問以来歴史とともにそこにある日本人の姿・こころに興味を持つようになり、様々な角度から「日本」を見るようになった。いつかまた平泉を訪れるときは、今回とは違ったアプローチで見てみたい。そのときどのような「平泉」を見ることができのか今から楽しみである。

産政塾で取り組まれる研修内容は実にバラエティに富んでいる。それは研修の企画を塾生たちで行うところにひとつの要素がある。各々の個性が発揮された各グループの企画は実に興味深く、有意義なものばかりであった。

現職の市長と直接意見交換ができたことは非常に貴重な経験であった。自分も市長のもとで働いているが、市長と話す機会などほとんどない。一般企業で言えば社長と意見交換するようなことだ。また改革派として当時史上最年少で当選した山中松阪市長が同世代であることが一番の刺激であった。

松本自然農園では現代の農業問題を学んだが、何より松本氏の行動力と「やる気があるときにやらないとやれない」という言葉に大きなショックを受けた。

こころと体の健康づくりに取り組んだ研修では初めてゆつくりと自分を見つめ直すことができた。

最後は清掃活動を通じて社会貢献活動を考え、そこにある精神は行政に携わる人間として最も大切にすべきものであることを感じた。全ての研修がどれも貴重な経験であった。唯一CS (Customer Satisfaction) に関する研修に参加できなかったことは悔いが残るが、全体を通して非常に充実しており、またこれらの経験と塾生同士の意見交換から自分の中に新しい感覚が芽生えてきたことを感じた。



☆運命的な出会い

第20期生のみんなは本当に素晴らしい人たちばかりだ。最初から溶け込みやすく、楽しく、頼もしい。意見交換をすれば自分とは違った視点から語られる言葉のひとつひとつが非常に刺激的であり、また人間性も非常に魅力的な人たちばかりだ。そしてそんなみんなと産政塾という絆で結ばれたことがすごく嬉しい。この出会いを大切に今後も末永いお付き合いをお願いします。

☆本当の「殻」をやぶるための意識改革

産政塾は終わった。終わってみるとやはり短く感じた。それだけ充実したものであった。果たして「殻の外に踏み出す」ことはできたのだろうか？閉塾式では「産政塾から得た経験により今すぐ何かが急激に変わることはないと思う。しかし今後様々なことに出会ったときに感じるもの、得るものが今までとは変わり、そのとき初めて変わった自分を感じるだろう」と述べた。今、仕事から日常生活に至るまで意識の変化を感じている。どんな些細なことでも思いついたら行動に移し、疑問を感じたら調べるようになった。意識改革という点では「殻」をやぶることはできたかもしれない。しかし、本当の「殻」をやぶるのはこの意識の変化から物事の捉え方が変わり、それによる新しい発想から行動に示したとき、初めて「殻の外に踏み出す」ことができると思っていいる。私は産政塾により新しい自分へのきっかけを掴むことができた。小さなことかもしれないが自分にとっては大きな一歩であり、産政塾に参加して初めて得ることができたものである。改めて加藤塾長を始め、事務局の方々、塾生同期のみんな、そして忙しい時期にも快く送り出してくれた職場の皆様、心から御礼を申し上げます。

☆エピソード



産政塾が終わって1カ月以上過ぎた。同期のみんなの活躍がすでに聞こえてきている。終わった後も非常に刺激的だ。確かに第20期生として産政塾は卒業した。しかし、これからも様々なことに悩み、壁にぶち当たるだろう。そのときは産政塾で得たことを思い出し、同期の仲間と語り合おう。そして刺激し合おう。ここで得た経験、ここでできた絆は永遠なのだから…。

自らの殻を破るとは



豊田自動織機労働組合

長 倉 健 司

《プロフィール》

- ながくら けんじ
- 1998年 入社
 - 1998年 技術部配属
 - 2005年 事業企画部へ異動
 - 2007年 技術部へ異動
 - 2008年 労働組合専従執行委員
現在に至る

〈家族構成〉妻

〈趣味〉ウィンドサーフィン

今までの自分の人生の中で、「自らの殻を破る」ことについて、考えたことがあっただろうか？少なくともこの産政塾に入るまでは、そんなことを考えたことは無かったような気がする。そもそも自分の殻とは何なのか？まずはここから考えてみたい。

生来目立ちたがりでもなく、積極的な方かと問われればそうでもなく、自ら行動を起こすようなタイプではなかった。しかし、「自分の殻にこもる」タイプでもなく、このような性格ゆえに「自らの殻」について考える機会が無かったのも当然のような気がする。

改めて考えてみると非常に難しい言葉ではないかと感じるが、そう言っている前に進めないのです、ここで、「自らの殻」を「現状のままで満足している状態」と仮定し、「自らの殻を破る」ことを「現状の自分に満足せず、新たな自分を見つける」と仮定してみる。

この仮定に基づいて、今までの自分の人生の出来事を振り返りながら、どの時期に自分の殻を破ることができたかを考えてみたい。

まずは、高校時代までを振り返ってみる。

小学校入学前は、一歳年上の兄にいつも付いて回っていたように感じる。どこへ遊びに行くのも兄と一緒に、遊び相手も兄の友達だったり、少なくともこの時期に自らの殻を破ろうとしていた自分はど



こにもいない。

小学生時代を振り返ってみると、さすがに遊び相手は自分の友達へと代わっていき、クラスでは学級委員をやったり、児童会をやったりもし、責任感が増えてきたが、何かを変えようと積極的に動いた記憶は残念ながら出てこない。やるべきことはきっちりやったが、「自分の殻」の中で動いていた時期だったように思える。

次に中学から高校時代。

人の性格というものはなかなか変わらないのだが、この最も多感な時期に少しずつ自分の中で変化が出てきたのかもしれない。中学は地元の公立に進学し、高校受験では自分の進みたかった高校に無事進学した。中学高校時代は、勉強もそれなりにした。部活も、恋愛もそれなりに経験した（人に自慢できるようなものではないが）。その中で何が変わってきたのか考えてみると、一つ挙げられるのは、自らの意思でやりたいことをやるようになってきたこと。私の通っていた高校は自由な校風で、校則の制服の項には「黒の学生服」としか書いていなかった。そんな中、中学時代までの坊主頭から一転し、高校3年生の時には肩の先まで延ばしたロン毛にしてみた。当時、私の高校に男子生徒は1000名近くいたと思うが、ロン毛は私以外に誰もいなかった。人のやらないうことをやってみようと思つてやってみたので、ある意味殻を破ったことになったかもしれないが、本質的なものではないような気がする。このころはやりたいことをやるようになっただけで、それに



よって自分が成長したわけではないと思う。自分の殻を破ることによって成長が無ければ、ただのやりたい放題である。事実そうであつた気がする…。

こうやって振り返ると高校時代にやつと自分の殻を破るという土台が少しずつできてきたのではないかと感じる。

続いて、大学進学後を振り返ると、この時期は当然ながら自分の将来について真剣に考えるときであり、一人暮らしをしていたこともあり、自分のやりたいことが最もやれた時期であつた。

同時に、最も遊んだ時期であつた。もちろん勉学に勤しんでいたのは言うまでもないが、時間だけはある余つていたので、今考えると実にくだらないが、24時間耐久麻雀をやつてみたり、この時期にしかやれない多くのこと（ここでは書けないようなこともたくさんした）ができたのではないかと思う。

大学時代は、勉学に遊びに一生懸命でその時々で充実した日々を送つていたため、あまり自分の殻を破るということを考える必要がなかったのかもしれない。

ここまで振り返つてみて、自らの殻を破るということに関してはあまり特筆すべきことは無かつたが、社会人になつてから二つのスポーツとの出会いを経験し、これは自分の殻を破ることに大きく関係しているのではないかと感じる。

社会人2年目に出会つた一つ目のスポーツ。それはウィンドサーフィン。

ウィンドサーフィンという世間ではどのようなスポーツと思われるのだろうか？一般的にはサーフボードに帆がついて、波乗りをしてジャンプするといったイメージが強いのではないか。私も始めたときにはそういうイメージしかなかった。しかし、私の出会ったウィンドサーフィンは、海面に設定されたコースをいかに早く回るかを競ういわゆるコースレースというものである。

最初に先輩に誘われたときには、何か格好良さそう、面白そうという軽い気持ちで始めたのだが、何度かやっていくうちにその奥深さにのめりこんでいつてしまった。最初はバランスを取るのが精一杯で前に進めなかったり、やっと進んでもすぐに落ちてしまったりして、悔しくて何度も何度も練習をした。ほぼ毎週のように練習をすることで、始めて4ヵ月後にはレースに出るようになった。まだまだ自信がなかったし、レースに出るのは消極的だったが、先輩に誘われるがままに出場し、結果は最悪だったが、このレースに出たことで自分の課題がわかり、さらに頑張ろうという気になったので、出場したことと自分が自分の殻を破ることになったと思う。

ここ愛知県はウィンドサーフィンが盛んな土地で、毎年8月に新舞子で「伊勢湾カップ」という全国大会が開催されている。この「伊勢湾カップ」は海の甲子園と言われており、全国の子選会を勝ち上がった選手総勢200名が一堂に会して行われている。この大会に私も4年連続で参加している。毎年の成績は決して良くはない（下から数えた方が圧倒的に早い…）が、それでもこの大会に出続けるのは、自分を大きく成長させることができるからである。つたないながらも戦略を考えることはもちろん、自分を極限まで追い詰め、どこにそんな体力が残っているのかという状況で力の限り漕ぎ続

け（真夏の海上で35℃に迫る気温の中、風が弱ければ自分で風を起こして前に進まなければならぬ）、手を抜いた瞬間にライバルに抜かれてしまうため、一切妥協ができない。今までこんな極限状態を経験したことはなかった。これを持ち切れば、他の辛いことは何でも乗り越えられる、新しい自分を見つけられるという気持ちになれる。これによって、自分の殻を一つ破ってくれた気がしている。来年以降も積極的に出場していきたいと感じている。

余談ではあるが、このレースは土日の2日間で行われ、大量の汗をかくため、水分をいくら補給しても全くトイレに行きたくならず、月曜日までトイレに行かなくても済む場合もあるほど、ほぼ脱水状態となる（熱中症で救急車で運ばれる選手もいる）。そして、昨年出会った二つ目のスポーツがマラソンである。

社会人になり、労働組合に関わるようになってから、会社の駅伝大会や、地域の10 km程度のマラソン大会などに参加することはあったが、ここで取り上げたのは、42.195kmを走るフルマラソンである。それまでは10 kmが最高距離であったため、某副委員長に「河口湖マラソン」に誘われた際には、最初26 kmの部にエントリーを検討したが、フルマラソンを走ると世界観が変わるという話を聞いていたこともあり、どうせ出るならということで無謀にも初のフルマラソンにエントリー。

エントリーから本番まで2カ月程度の準備期間で自分なりの練習はしたが、最長で10 km程度しか走っていなかったため、42.195kmは未知の世界であったし、周りの仲間からは無謀な挑戦と言われ



ていたが、とにかく完走を目標に本番に臨んだ。

大会本番では、最初の10 kmを55分（5分30秒／km）と軽快なペースで通過し、20 km地点でも1時間50分とこのままで行けば4時間を切れるタイムで走りきれられるのではないかと思われた。ところがである。25 kmほどから右ひざの外側が痛み出し、一気にペースダウン。30 kmを超えると走って（歩いて）は止まり、止まっては走り（歩き）を繰り返すようになり、残り10 km以上を走りきれないのではないか、制限時間の6時間で走りきれないのではないかと弱気になることもあったが、とにかく前に進むことだけを考え、栄養補給をしつつ40 km地点まで何とか到達。ここから先は絶対に止まらないし、歩かないと心に誓い、ラストスパートをかけ、何とかゴール！タイムは4時間18分22秒。ゴールした瞬間にはものすごくすがすがしい気持ちになり、それと同時に「悔しい、来年は4時間を切るぞ」という気持ちになった。

まさに自分の殻を破った瞬間であった。自ら苦しい道を選んで成し遂げた達成感と、自分を上手くマネジメントできなかった悔しさ、これらを同時に味わうことができたのである。

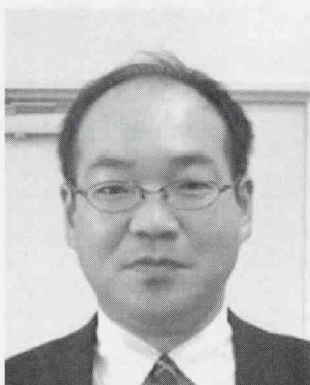
このように自分の過去を振り返ることで、二つのスポーツを通して自分の殻を破ることができたと実感できた。また、最初に仮定した「自らの殻を破る」ことが「現状の自分に満足せず、新たな自分を見つける」で正しいであろうことが分かった。さらに、「自ら選んだ困難を乗り越え達成感を味わう」ことを加えれば、より大きく自分の殻を破ることができるのではないだろうか。

今期の産政塾の活動に参加し、自分たちで企画立案することで今までにない経験をし、新たな自分を見つけることができたのではないかと思っている。今後の会社生活の中でもこの経験を活かし、常に自分の殻を破ることを頭に入れて行動していきたい。

このような機会を与えてくれた労働組合関係者の皆様、企画立案をフォローし裏から支えていただいた産政塾事務局の皆様はこの場を借りて感謝を申し上げます。



産政塾で学んだこと



全ユニー労働組合

中 村 隆 誠

《プロフィール》

- なかむら たかせい
- 1997年 ユニー株式会社入社
ユニー千代田橋店精肉担当
 - 1998年 アビタ岡谷店精肉担当
 - 2002年 ユニー高蔵寺店精肉担当
 - 2005年 アビタ高蔵寺店精肉担当主任
 - 2005年 ユニー新城店精肉担当課長
 - 2007年 全ユニー労働組合中央執行委員（非専従）
 - 2008年 全ユニー労働組合中央執行委員（専従）
現在に至る

〈性格〉優しい部分が多いがその分厳しさが少ない

〈趣味〉旅行、スポーツ観戦

今回、第20期産政塾生の一員として、様々な企画に参加して得られたこと、また、グループ内で企画を立てるにあたって得られたこと、今までの仕事や生活の中で得られなかった色々な経験を得られることが出来たように思います。

企画に参加して……といつても計2回しか参加できなかったことは非常に残念ではありますが、まず初めて参加した4回目の産政塾企画「自分を知る。仲間を知る」というテーマの中で（そもそもこの企画は我々Bグループの企画でありましたが、新型インフルエンザの影響で急遽事務局企画に変更になりました）紐やコルクを使って体を動かすことで、改めて、自分の体の硬さや常日頃から体を動かすことの重要性、また、性格診断テストのようなもので自分の良いところ、悪いところを知ること、自分が病気になるために心がけるべきことを知ることができ、改めて自分というものを知るきっかけになりました。また、この企画で自分が一番良かったことは煙草をやめる事が出来たことです。元々やめようという意思はありましたが、なかなかきつかけがなく、なんとなく吸っていた部分がありました。しかしながら、今回の話の中で「意思の強い、弱いは関係ない。自分の身の回りからタバコがなければ吸わなくなる。」という話とともに、自分の手元にあった煙草を取り上げられてしまいました。とても些細なことでしたがこのことがきっかけで煙草をやめる事ができました。さらに不思議なことに煙草を吸いたいという欲求も無くなりました。今思ってもなぜそんなに簡単にやめる事が出来たのか、なぜ今でも禁煙が続けられているのか、自分でも正直良く分からない面があります。ただ潜在的に煙草をやめようと思っていたところに今回のようなきつかけがあつて、やめる意思が引き

出されたような気がするのと、今まで強く意識をしていなかったもので、やめるときもあまり強く意識せずに自然体でいられたのがよかったのではないかと思います。ちなみに今も禁煙は続けています。

もう一つ、自分が参加した企画は一泊二日型の平泉の世界遺産登録への取り組みについてです。世界遺産の申請をしたものの、登録延期という扱いになった平泉周辺が、2011年の世界遺産登録のために行われている活動から文化遺産保護の重要性や日本人の心や文化について考えるよい機会になりました。私は歴史というものにはあまり造詣が深くなく、平泉と言われても中尊寺ぐらいいしか思いつきませんでした。今回訪問してなぜこの地にこのようなお寺を創ったのか、なぜ金色堂にしたのかということが良く分かりました。今の日本の考え方の原点である「平和」というものはこのころからすであつたのだなあと感じました。またそういつたことを後世へと伝えていくことも重要であるということも同時に感じました。また、この中で初めて座禅というものも経験しました。座禅というと自分の中で勝手に「耐える」というイメージがありました。そうではなく、「無」の境地になること、何も考えないことであるということを知りました。ただ、30分という短い時間ではありましたが、どうしても座禅を組んでいる間に色々なことを考えてしまい、雑念を一切取り払い集中することは難しいと感じました。翌日は、我々のグループは平泉に住んでいる住民に話を聞き、文化遺産と共存した街づくりが必要な一方、観光地化による影響が懸念される中で住民は今回の世界遺産登録にどのくらい期待



をしているのか、逆にあまり期待していないのかを調べました。私の最初の印象では、以前、白川郷や五箇山の合掌造りの集落が世界遺産に登録されたものの、実際にそこに住んでいる方が雨漏り等で家を修理したくても許可が必要で時間がかかり困っている、という話を聞いたことがあったので、地域の住民にとつては必ずしも歓迎されていないのではないかと思っていたし、実際にそういった意見の方が多いのではないかと思っていました。しかしながら、実際にインタビューをすると、ほとんどの方が世界遺産登録に対して期待されていて、平泉を活性化させたいという思いが伝わってきました。また、観光地として施設や建造物を見学するだけではなく、文化遺産として時間をかけてじっくり見てほしいという意見が多く聞かれ、地元の方の思いというものが伝わってきて、自分にとつて非常に印象に残りました。やはり、写真やパンフレットだけで見た印象と、実際に現地へ赴き地元の方と話をして得られたことはかなり違いがあるなと感じました。また、今回地域住民の方にインタビューをするという事で、基本的にアポなしで店に入ったり、通りすがりのおばあちゃんに話を聞いたり、自分にとつてかなり勇気のいる事でありましたが、皆さん誠意をもつて答えていただき、さらにせっかく来たのだからとお土産までいただいたりと地元の方の優しさを知るとともに、自分自身の殻を破れたのではないかと思います。

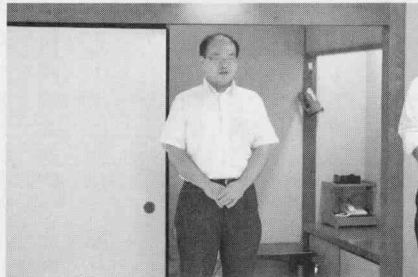
このように実際に企画に参加して殻を破れたこともあります。それ以上に自分たちのグループで企画を立案、計画し実行するまでに得られたことが多くありました。

当初、我々Bグループの企画は5月下旬に開催することを決め、それに向けて2月下旬から取り組

みを始めました。みんなで企画を持ち寄って議論を重ね、具体的に企画がまとまりつつあった段階で「産政塾でないといけない企画に：」というところでスタートに戻ってしまいました。次に考えた企画は野球の関西独立リーグに学ぶ、というテーマで独立リーグに対する社長の思いと、今後環境が厳しくなる中でいかに経営を黒字化させるという視点で企画がまとまり、具体的な日程や先方への連絡、塾生への連絡から現場の下見まで行つて、あとは当日を迎えるのみ：というところで関西で新型インフルエンザの発症が確認された、との報道があり一旦様子見をしようという判断にさらに追い打ちをかけるように関西独立リーグの経営の危機、資金未払い騒動など起こり、とても行けるような状況ではないという判断で急遽我々のグループの日程の延期と、企画の練り直しをすることになってしまいました。他のグループの企画もあり日程が定まらない中、一旦8月下旬に行われるという想定で行き先と内容まで考えてアプローチをかけようかという段階で、今度は衆議院議員選挙の対応でそれどころではなくなり、また企画の練り直しを余議されなくなりました。我々のグループは何かに取りつかれているのでは、という噂も流れる中、結局閉塾式の日に同時開催をするということで落ち着き、身近なところで環境問題を通じて社会貢献活動について考えるというテーマで、地元堀川の清掃活動から社会貢献活動の重要性や、会社や組織の中で出来る社会貢献活動についてみんなで議論してきました。色々と紆余曲折もありましたが、そこで感じたことは、企画を考え、実行するに当たり色々な段取りが必要であり様々なアプローチが必要であること、自分自身が少しでもレベルアップするためには既存の概念だけでなく、新しいことを考えたりトライすることが必要であることを感じました。

今回、参加できた企画は少なかったですが、そんな中でも自分自身新たな経験や知識を得る事が出来、多少なりとも新たな自分を出す事が出来るきっかけになったと思います。

自分にとっても色々なことがあった1年間でしたが、第20期産政塾の一員として一番良かったと思うことは、他のメンバーとの交流が出来たことではないかと思います。とくに、私は開塾式にも参加できず、他の企画も参加することは非常に限られてしまいましたが、そんな中で初めて参加した際には皆から暖かく迎え入れていただき、自分自身非常に緊張していたのですが、すぐにみんなと溶け込むことが出来たと思います。また、我々のグループは結局1年間通して企画を考える羽目になってしまいました。逆にいえばそのおかげでグループのメンバーとは1年中会って色々なコミュニケーションも深める事が出来たと思います。私とは違う業態に所属しているメンバー、組合や会社を問わず集まったメンバーではありますが、産政塾の企画の話だけでなく、会社の話や組合の話、組合の取り組みの考え方や取り組み方法、会社の現状など普段知ることが出来なかった話などを知ることができ、またプライベートの話もたくさんして、自分にとって新たな知識や情報を得られることが出来たと思います。おそらく産政塾のメンバーでなければこういったことは経験できなかったと思いますし、そういった部分でも自分自身の殻を破ることが出来たのではないかと感じています。



私自身、2008年の9月から組合専従となり、今までとは異なった物の考え方や違った視点から物事を考える事が必要になってきています。今までどちらかといえば色々な物事を考える際に、「昨年はどうだったから」とか、「今まではこうやっていたから」といった既存の概念にとらわれながら考えていた部分が多かったように思います。そういった部分も必要ではありますが、とくに今のようない経済環境や会社の中での状況の中ではそういった部分だけではなく、新たな考え方や今までにないアイデアがないと生き残ることが出来なくなっていると感じています。会社の業績が伸びない中で縮小均衡ではなく、新たな取り組みに積極的にチャレンジしていくことが生き残りへの道になってくると思っています。そういった意味では今回私が産政塾に参加して得られたことというのは非常に大きく、今後の組合活動や会社の取り組みにも活かしていくことが出来ればと考えています。また、産政塾としての活動は終わりましたが、これからも今回一緒に参加したメンバーとは定期的にあつて情報交換をしていき、これからの自分の成長の糧としていきたいと考えています。最後に今回産政塾のメンバーとして関わることが出来ました加藤塾長や高橋さん、すべての参加メンバーに感謝したいと思います。本当にありがとうございました。

産政塾を振り返る



トヨタ紡織労働組合

永谷 啓 介

《プロフィール》

ながや けいすけ

- 1999年 入社 生産管理部配属
- 2008年 トヨタ紡織労働組合専従執行委員
現在に至る

〈家族構成〉 妻

〈趣味〉 ショッピング、ゴルフ、ツーリング

【はじめに】

労働組合執行部に出向し、大きな転機を迎えたタイミングで、産政塾に参加させていただきました。話を頂いたときは、まだ新たな仕事に慣れていない中で、参加することを少し後ろ向きに捉えてましたが、産政塾の体験を振り返ると、参加できて本当に良かったと素直に感じています。多くの仲間と出会い、「殻の外へ踏み出そう」というテーマのもと、企画立案から実施運営、さらには他グループの企画に参加し、新たな価値観に触れ、体験し、多くの財産を得ることが出来たと思います。すべての企画に参加することはできませんでしたが、産政塾の活動と感じたことについて少し振り返ってきたいと思います。

【開塾式】

開塾式に参加する為、いざ知立セントピアホテルへ。私の場合は、あまり事前に情報を入手できておらず、まだどのような世界か分からないため、いささか緊張していました。そもそも「塾」なんて名の付くところは体育会系な活動をするところなのか…等と考えたりしていました。ですが、いざ始まってみると、すぐに企画検討を始めて会ったグループメンバーで行うということで、緊張を感じている間も無く、この開塾式で仲間意識がすでに芽生えていたのを覚えています。

そして、グループの担当決めで、我々Aグループの偉大なリーダーの鈴木貴リーダーは自らリーダーを志願し、率先して企画、実践までリーダーシップを如何なく発揮されました。まず、リーダーを志願するその心意気・モチベーションに対し、早速、見習うべきことを目の当たりにした感じがしました。まだ企画を経験してないにも関わらず……。恐るべき産政塾。そして、企画検討は、やはり鈴木貴リーダーの提案内容となり、〃若手政治家に聞く〃という企画に決まりました。

最初は、少し硬い企画だなと思っていたのですが、内容を聞くにつれて大変興味が沸いてきました。最年少で市長となった、松阪市の山中市長へスポットを当て、問題が山積している松阪市の市長へ立候補したその動機はもとより、同年代の市長がどうリーダーシップを発揮し、何をなそうとしているのか？私の想像する市長像とは、ある程度の年齢と経験を持った人物になるのが常識として捉えていました。この常識を覆した、まさに型破りな山中市長と接すれば、必ず塾生全員、何か得るもの・感じるものがあるはずだと思ったからです。

【若手政治家に聞く】

この企画は前途で記したとおり、我々Aグループの企画でした。現在の世界的な金融危機は実質経済にまで影響を及ぼしており、日本にとつても例外はなく、危機的な状況を迎えております。また、



雇用問題、少子高齢化、福祉・医療など立ちゆかない問題が山積している状況でもあります。この荒波に立ち向かい、正しい方向に道筋をつけてゆけるリーダーとは、どのような資質を持っているのでしょうか？そのようなことを考える中、松阪市の市長である山中市長が最年少（当時）で当選し、敏腕を振るっているという情報を得て、我々は松阪市へ赴く企画を立てました。

市の施設見学（農業公園ベルファーム、松阪牛飼育農家）を挟みながら、山中市長との懇談を行ったのですが、非常に感服したのを覚えています。何よりも我々と同世代でありながら、家庭も顧みず（これは良いことか賛否はあるかと思いますが）、市民のために自分を捧げている献身的な姿や、強いポリシーを持つて市政に立ち向かう力強い意志を感じ取ることができました。山中市長の言葉は実績に裏付けられた重みを感じられて、大変説得力があったことも印象的でした。この機会は、「リーダーの資質とは、年齢や経験だけでなく、本人の資質によるものである」また、「信頼は実績と強い意志から生まれてくるものである」という2点を特に学ばせてもらいました。この経験から、塾生の多くが多くのことを学び取れたのではないのでしょうか。

【これからの農業について考える】



この企画では、将来の日本農業を考えるとという主旨で、松本自然農園へ赴き、その理念や農業体験をさせていただきました。この企画での経験は、非常に考えさせられるものがありました。特に現在の日本では農業をする技術者という側面だけでなく、経営者としての能力がなくては成功しないという現実を知ることができました。当たり前のようにスーパーなどで必要な物は簡単に手に入り、食に不自由していない現在の日本にとって自給率の低下などの問題は身近には感じていませんでしたが、この経験を通じJAのあり方を含め日本の農業は大きな転換期に來ていることを実感することができました。私も含め、消費者の意識の变革も必要であると感じました。

【奥州平泉の世界遺産登録活動から学ぶ】

この企画では、平泉の世界遺産登録に向けた取り組みから、守るべき日本の文化は何か、大切にすべき日本人らしさや自分らしさは何かということ学びました。一番大きな収穫は平泉に対して、またその世界遺産の取り組みに対して、現地現物で見て、考え、学んだことであると思います。改めて日本文化の奥深さを知り得ることができましたし、またその文化は世界遺産登録に恥じないものだと実感しました。取り組みを肌で感じたものの1人として、1日も早く世界遺産に登録されることを願ってやみません。



【プロのサービスを学ぶ】

この企画では、CSに観点を置き、ロイヤルパークホテルの取り組み、及びその重要性、また自分自身の業務へどう生かしていくかを学ぶことができました。JDパワーで2年連続1位を取得しているロイヤルパークホテルズのCSは非常にレベルの高いものであったと感じました。CS向上への継続的な取り組み、何よりスタッフ1人ひとりの意識の高さに感銘を受けました。顧客要望に対して不可能なことはなく、何ができるかをまず考えるという理念が、しっかりと浸透しており、その意識が全体のモチベーションを高め、ホテル全体のCS向上を担っているのだと実感できました。私は今、労働組合に所属していますが、顧客である組合員へのCS向上に向けて大きく意識が変わるきっかけを頂きました。本当に良い経験をさせて頂きました。ありがとうございました。



【最後に】

産政塾の活動を通じ、自分自身を思い返せば、私は自分の限界はここまで、自分が出来ることはこ

これまで、自分の仕事はここまで、と「ここまでづくし」で自ら殻を作っていたように思います。

最初に、産政塾のテーマである、「殻の外へ踏み出そう」という言葉を聞いた時、率直に自分に言っていることだ……と感じました。そして、今回の産政塾の経験は、物事の見方や、価値観を見直す大きなきっかけをいただきました。

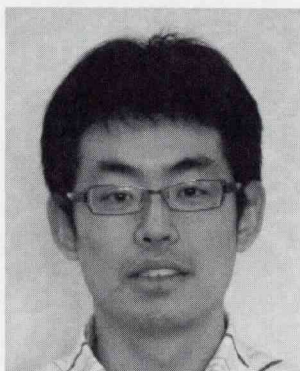
この「きっかけ」で自分をどう変えていくか、これからの大きなテーマです。本当の意味での卒業には、まだ道のりは遠いですが、リミッターを外し、常にチャレンジスピリッツを持って、物事に取り組みでいこうと決心しています。

最後に、加藤塾長はじめ事務局の高橋さん、塾生の皆さん、大変お世話になりました。

塾生の皆さん、この出会いを大切に、また必ず会いましょう！



殻の外へ踏み出すために



豊田合成労働組合

三宅 洋 右

《プロフィール》

みやけ ようすけ

- 2004年 豊田合成株式会社入社
- 2004年 開発部 生技開発室配属
- 2007年 生産技術開発部へ異動
- 2008年 豊田合成労働組合 常任執行委員
現在に至る

〈家族構成〉 嫁と娘の3人家族

〈趣味〉 テニス、ゴルフなど

〈はじめに〉

09年の9月に労働組合の専従となつて、4カ月程度過ぎた09年の年末近く、委員長から「産政塾というものに参加してみないか？」と声をかけていただいたことが、私が第20期産政塾に参加するきっかけになりました。最初は、産政塾というもののものが分からず、産政塾とはなんだろう？と思いました。しかし、非常にいい経験ができる、他の企業や組合の関係者との横のつながりができるなどのお話を聞き、労働組合の専従になる前までは、生産技術の開発に携わり、なかなか他の企業等との関わりの少なかった自分としては、自分の視野や考えが広がる良い機会になるのではないかと思います。参加することになりました。

〈強い思いが、行動の原動力になる〉

産政塾を通して一番感じたことは、見出しにも書いています「強い思いが、行動の原動力になる」ということでした。

今回訪問させて頂いた松本自然農園の松本さんからは「お客さんに安全・安心で美味しいものを食べてもらいたい」ということ、ロイヤルパーク汐留タワーのスタッ



フの方は「顧客に、サービスを提供し、期待以上の満足をしてもらいたい」ということが、お話している中で言葉の端々から伝わってきました。言葉にすると非常に簡単に当たり前のことになのですが、訪問する先のみなさまは、ありきたりな言葉として言っているのではなく、確固たる信念として思いを持っているということが非常に印象的でした。

なぜそのような思いを確固たる信念として持てるのか？改めて考えてみますと、個人個人の持つ背景や環境は違うものの、「自分の顧客のために」「顧客に満足してもらうために」ということを常に考え、顧客からの自分の行動に対する評価（おいしい、ありがとうという感想や笑顔など）がすぐにかえってくるのが大きく影響しているのではないかと感じました。自分の業務に置き換えてみても同じことが言えると思いました。やはり「誰のために」「何のために」ということを自分の中にしつかり持つことが非常に重要であり、どんな間接的な業務であっても、それらを常に頭に入れることが必要であると感じました。

〈テーマ「殻の外に踏み出そう」にうつて〉

2月から9月までの8カ月間 このテーマで行動しましたが、結論としては踏み出すことはできなかったものの、そのきっかけは掴めたのではないかと思います。前の項に書きましたく強い思いが行



動の原動力になる」ということは、私なりの答えとして持っていますし、少しずつ実践していきたいと思っています。

また、今後その答えを実践し続けていくためにもということでもいくつか印象的なことがありましたので、書きたいと思います。それは、またもや松本自然農園さんでのお話なのですが、松本さんとのお話の中であった「草むしりをしなくても野菜は問題なく育つので、めんどろくさいからやらない」という言葉です。畑に雑草が生えていても野菜はおいしく育つという経験はあるからその言葉だったと思うのですが、非常に肩の力を抜いてやられているなということが印象的でした。自分に置き換えると、昔からの畑に雑草が生えていることはいけないという常識に捕らわれて、逆に疲れてしまうんだろかなと思ひ、継続するためには、肩の力を抜けるところでは、しっかりと抜くということが重要になるのではないのかな?と感じました。(そのためにも、自分の思いを強く持つ必要があるとは思いますが……)

もう一つ印象的だったことですが、これは松本自然農園さん、ロイヤルパークタワー汐留さんのどちらも訪問した際に思ったことですが、非常に楽しそうにやられているということです。松本自然農園さんでは、就農当初、なかなか利益が出せずに苦しんでいたというお話がありました。そんな話でも楽しそうにお話されていました。お話している中「やりたいことをやらずに後悔して、他人や環境のせいにするくらいならやったほうが良い、またやる気があるときに行動しないと結局やらない。」という言葉があったのですが、いろいろと苦しいことはあるとは思いますが、やりたいこ

とをやっているから楽しい（楽しそうにみえる）のではないかということを感じました。また、ロイヤルパークタワー汐留さんでは、自分のサービスを非常に楽しそうにお話されていました。例えば「チェックアウト後、ホテルを出る際にお客さんは見ていないかもしれないが、見えなくなるまでお辞儀をする。お客さんには分からないかもしれないが、100人に1人でも気づいてくれれば良い。」というものだったのですが、なかなか反応が得られない中、継続することは難しいと思うのですが、それでも楽しそうに話をされるのは、言われたことではなく自分が考えたことを実践しつづけているからではないかと感じました。自分はどうなのかと考えると、組合専従になって現在1年強過ぎましたが、自分の思いは入れようとするものの、やはり言われることをきちんと行うことが多く、なかなか楽しいというところまでは辿りつけてはいけません。やはり『楽しむ』ことが大事なのではないかと思ひ、仕事中も緊張感の中にも少しの笑顔、少しの楽しみを自分で見つけ行動していきたいと思ひます。（やるべきことはやることは当然やるとして）

いろいろ書きましたが、私なりの「殻の外に踏み出そう」というものに対する答えとしては、『強い思いを持ちつつも 肩の力を抜いて楽しく笑顔で継続していく』ということになります。その結果として、どのような成果が生まれるかは思い次第だとは思いますが、この経験を生かし何事も続けていきたいと思ひます。

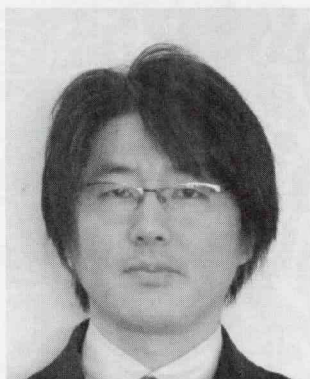
〈最後に〉

業務調整が上手く出来ず、全体を通じて半分程度の活動しか出ることができず、非常に悔しいということが、今回の活動の反省です。しかし、数少ないとはいえ出た活動全てが非常に印象的であり、素晴らしい経験をさせていただきました。労働組合専従となつてすぐの不安と期待が入り混じっている中、このような経験をさせていただいたことで、今後の組合活動さらには人生の中でこの経験を活かしていきたいと思えます。

最後に産政塾にこころよく送り出していただいた委員長始め組合事務所のスタッフ、さらには貴重な経験をさせていただきました産政塾事務局の方々に心より感謝致します。ありがとうございました。



今後も人とのつながりを大切に・・・



トヨタ車体労働組合

山口 智史

《プロフィール》

やまぐち さとし

- 1999年 トヨタ車体株式会社入社 第1生産技術部に配属
- 2008年 トヨタ車体労働組合 専従執行委員
現在に至る

〈趣味〉ラジコン、ガンダム、ゴルフ

〈はじめに〉

塾誌の原稿を書くにあたり、入塾申込書を読み返した。入塾の動機の欄に「自分自身にバイタリティーがなければ組織改革などできない。チャレンジ精神あふれる人達と本音で議論しお互いを高めあいたい」と書いていた。入塾前は綺麗事として考えた動機ではあったが、こんな理想的な動機にも応えてくれる産政塾であり産政塾生であった。

私ごとで恐縮だが、単組のイベントと重なったり、自分の体調不良などで、貴重な体験の場に参加できる回数が少なく、本当に残念ではあったが、自グループの企画には事前の打ち合わせから含め参加できたのが、唯一の救いであった。

今回は産政塾に参加して感じたこと、気づいたことをキーワードに塾誌をまとめることにする。

― キーワード ―

1. 自分の弱みの克服
2. 1つのことをみんなで作り上げてく充実感
3. やっぱり井の中の蛙ではだめ
4. 産政塾の魅力は人

1. 自分の弱みの克服

ある研修で自分の基本的指向性や行動スタイルを明らかにするテストを受けました。その結果、自分の特徴は「他の人たちと意見が食い違うと、感情的に発展しないように、できることなら議論を避けようとする」、要するに、重要な問題を棚上げして、安易に妥協してしまう傾向にあるということです。ここで自分の本音を言わなくてはいけない場面でも、その場の調和を優先し、発言せずに妥協してしまい、後悔した経験もあり、これは自分の弱みだとはつきりと認識しました。そのような診断結果もあり、今回のグループの企画の話合いでは、安易に妥協せず自分で納得できるところまで議論することを心に決めて臨みました。

グループでの話し合いでは「食の安全」を学ぶために、どこを訪問して、何を体験するか具体的に決めていかなくてもなりません。その際に各自で案を持ち寄り議論するわけですが、まさに自分の弱みを克服する絶好のタイミングです。自分は安易に妥協せず自分で納得できるところまで議論することを心に決めて話し合いに臨みましたが、閉塾式の時に知ったのですが、他のメンバーも「自分の意見を通さず、みんなの意見を聞こう」とかそれぞれ自分の弱みを克服しようと話し合いに臨んでいたそうです。さすが産政塾の塾生ですね。

本音での議論をしたので時間は掛かりましたが、メンバーみんなが相手を尊重する気持ちがあるの

で、納得できる企画を作ることができました。自分も良い企画にするために積極的に発言し、衝突を恐れずに議論することができ、みんな同じ方向を目指していれば、恐れる必要はないということを実感することができました。

2. 1つのことをみんなで作り上げてく充実感

私はいろいろ企画するのが好きなタイプです。産政塾は自分たちの思いの中で何を企画してもいい。楽しいじゃないですか。もちろん予算は気にしないといけないですが。

企画していく中で、いつも大事なあと感じるがあります。それは、一緒に企画をしてくれる仲間の存在です。仲間が前向きでそれぞれの意見に対して承認にもらうと、更にアイデアが出て、すばらしい企画になります。「相手を承認する」こんな簡単なことですが、会社の中ではなかなかできないことが多いです。

グループの企画では無農薬野菜を個人で栽培している農園「松本自然農園」へ訪問しました。その詳細企画段階では、「松本さんの野菜を使った弁当をみんなで食べられないか？」とか「バーベキューで普通の野菜と無農薬野菜の食べ比べができないか？」など、体験にこだわった企画の提案がメン



バーからありました。企画を実行しようと思うといろいろ障害があるものですが、お互いの提案に対する尊重の気持ちと、何とか実現させて充実した体験をしてもらいたいという気持ちがメンバー全員にあつたからこそ、松本さんの農業に対する情熱を伺った後に、その思いが詰まった野菜を食すというすごい体験を皆さんに味わって頂くことができました。

1つのことをみんなで作り上げてく充実感は、役割が明確になつた最近の会社業務では味わいにくいものです。多様化や個人主義がはびこる社会では、職場で一体感を醸成がすることはなかなか難しくなっているのが現状です。職場の活気はモチベーションにつながります。職場の活気を向上させたいなら、職場に一体感がないと向上しません。会社を良くしていきたい一人として、私自身もみんなで何かをつくり上げることをやっていきたいし、核となる人を増やしていきたいと思っています。

3. やっぱり井の中の蛙ではだめ

産政塾のパンフレットには、『皆さんは「創造性」「独創性」「チャレンジ精神」等の言葉が念仏化してないか』とあります。自分も入社して10年余り経ち、仕事もぼちぼち覚え、社内での身のこなしもわかってきて、悪く言えば、こなれて落ち着いてきている状態だと思います。労組専従になり、労組専従でしか経験できないことをさせていただくことで、ある程度成長できたかなと感じてい



ますが、現状を維持すればいいのではという消極的な気持ちは少しずつではありますが、増長している気がします。要するに、問題を問題と思わなくなっているのかもしれない。

しつかり問題を認識するにはどうするか。異業種に接し、視野を広くし、いろんな判断基準を持つことだと思っています。産政塾の目的もここにあると思いますが、各班の思いのこもった企画による体験（あまり参加できてませんが・・・）や、様々な業種から参加している塾生との懇談により、視点の違い・価値観の違いなどを体感し、本当に多くの刺激をいただきました。産政塾には毎回懇親会が開催されることも納得するところです。

我々は縁あつて産政塾に入塾させていただきました。こういう体験は自分で留めず、周りに広めていくのが、産政塾に入塾した者の使命だと思います。幸いにも、私は今現在、労組の仕事をさせていただいていますので、一般組合員にも異業種と交流できる機会を与え、個人の成長・会社の成長につながる取り組みを行っていきたいと思います。

4. 産政塾の魅力は人

ここで言う人とは、「訪問先での人」と「塾生」のことを指しています。

まずは訪問先での人です。私自身、冒頭でも書きましたが、本当に参加回数が少なかったので、自グループの回の話しかできないですが、訪問先の松本自然農園の農園主、松本さんからはいろいろと

感じ取れることが多かったです。失礼な言い方ですが、小さな農園を興して経営するだけでも、こんなに多くの経験をされていて、自分も松本さんとは同年代なのですが、自分が訪問されても、何も語ることができないのに、この人はすごい思いのある人だなあと感動してしまいました。もちろん思いも強いのですが、それがすべて行動に結びついているのがすごいと感じました。松本さんの経営理念で生産者の顔が見える様にしたいという思いから、松本さん自身が宅配で野菜を購入者に届けていらつしやいます。私もまずは行動をとということで、訪問後から松本さんから定期的に購入を続けています。野菜もおいしいですし、いろんな種類の野菜も届いて、楽しいですよ。皆さんも是非どうぞ。

(松本自然農園HP <http://www.matsu-farm.com/>)

次は塾生です。実はこの塾誌を書いているときも、産政塾のグループでの懇親会の企画をしていました。正直、そんなに長いこと一緒にいたわけでもないのに、また、みんなで集まって話したいと思うのは何ででしょうか。縁あって同じ時期に産政塾に入塾したのだからという理由だけではないと思います。みんな目標は違いますが、殻を破るチャレンジ精神を持っている。だから集まってくる塾生はみんなパワーを持っているのだと思います。パワーを持った人たちが集まって語って、またお互いのパワーを高めあって、帰っていく。少し言いすぎかもしれませんが、実際にそのような気持ちで今回の懇親会の企画をしているので、間違いないと思います。

産政塾という企画や枠組みも素晴らしいと思いますが、本当の魅力は人にあるのだと、実感しています。

〈最後に〉

産政塾のテーマ「殻を破る」についてですが、産政塾の中では、周りの塾生のおかげもあり、自分の弱みの克服や、異業種の人との交流など、「殻を破る」ことはできたと感じています。ただし、本当に「殻を破る」とは、産政塾で学んだことを、社会や職場などの実践で活かすことだと思っています。本当に殻を破れたかどうかは、今後も定期的に開催されるであろう「第20期産政塾同期会」で皆さんにお話したいと思います。

最後に、第20期産政塾を支えてくださった皆さん、塾生の皆さん、そしてCチーム（チームカトレア）の皆さん、大変お世話になりました。また、同じ単組出身で事務局を担当していただいた高橋若葉さん、本当にありがとうございました。

今後も産政塾が末永く続いて行くことを祈念しております。



永遠の偽善者



中部電力労働組合

與 後 誠

《プロフィール》

よご まこと

- 1993年 中部電力株式会社三重支店 入社
- 2006年 中部電力労働組合 本部常任執行委員
現在に至る

はじめに

第20回産政塾への参加、さらには、20回という人間に例えるならば、大きな節目となる回に参加することができた、この「ご縁」を今は、素直に喜びたいと思っています。

しかしながら、私には開催日に関しては、ことごとく「ご縁」がなく、開塾式から開塾式にいたるまで、ほとんど参加することができなかったことが非常に残念であるとともに、グループのメンバーに申し訳ない気持ちでいっぱいです。

と、言うならば、今回の寄稿は、当然自分達の企画である「これからの「農業」について考える」について、お世話になった「農園主であり、かつ草信者でもある松本直之氏」について熱く書き綴るべきところではありますが、もうひとつご縁をいただいた「若手政治家に聞く！」について、思いを書き綴ることをリーダーはじめCグループの皆さま、お許しください。

ご縁

私がこの産政塾に参加させていただくにあたり、産政塾のテーマである「殻の外へ踏み出そう」は、



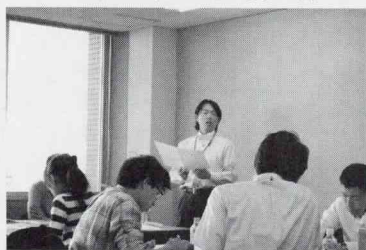
「何事にも一歩前に踏み出すこと」であると考えました。

産政塾が本格的にはじまる第2回の開催連絡が手許に届き、その企画内容は「若手政治家に聞く！」。当然、参加する限りには、その人物についてまず知る必要があると考え、一番てつとり早いブログにて確認（一つの方向での確認でしかないため適切ではないかも知れませんが）をしました。すると、読めば読むほど「松阪市長 山中光茂氏」は、常に、前に踏み出すことを意識し実践されており、産政塾のテーマである「殻の外へ踏み出そう」そのものであると感じました。当時、全国最年少市長の誕生は、ごくごく自然な事だったのだと確信いたしました。

また、ブログを読んでいると、よく「ご縁」という言葉が目につきました。私自信も「縁」という言葉を常に意識しており、労働組合の専従も縁がなければできなかったですし、当然この「産政塾」にも参加できませんでした。こうして塾生のみなさん、グループのメンバーと出会えたこと、このご縁は大切にしなければならぬと考えています。こうしたことも私が、「松阪市長 山中光茂氏」に惹かれた理由の一つもかもしれません……。

＼ 政治家とは ｝

私が、労働組合の専従となつて今までの会社生活と大きく変わったことは、「政治」への関わりです。



選挙活動はもちろんのこと政治活動に携わる機会を数多くいただきました。昨今、マスコミの影響が非常に大きいのかとは思いますが、「政治不信」という言葉が一人歩きしているように感じています。確かに、いろいろな政治家のみなさんがおみえになります。が、「志」も「思い」が相当強くなければできない職業であるが故に、ただ単に自分自身ができないという、妬みややつかみでしかないように感じています。私には、とても出来る職業ではないですし、やろうと思ってもできませんが、覚悟のある職業であることに間違いはありません。

こうした政治に対するある意味「逆風」の状況、さらには、新人の県議会議員としての立場や政党、地元などの数多くのしがらみ、そして、「自分の信念」と「組織の筋」、「市民の思い」と「組織の思い」、「あるべき理想」と「動きにくい現実」という相反するものがある中で、自分の信念・信条を貫き、市政に対する思いを持つて松阪市長選挙に立候補された、この一歩前へ踏み出すことは、いかに大きな決断であったかは、推し量ることはできません。

私は、お会いしたときに、「県議会議員を1期目途中で辞職されましたが、県民の皆さんから付託を受けた以上、任期を全うすべきであつたと思います。山中市長が、松阪市長選挙出馬へと心を突き動かしたものは、なんだったのでしょうか。」となげかけてしまいました。今考えると、大変失礼な事を聞いてしまったと反省しております。

ゝ 1%の想いに心を寄せ、1%の痛みへの挑戦 ゝ

「政治に対して大きな声を出す人もいれば、その大きな声にかき消されてしまう小さな声や声なき声がある。」これは、組合にも同様のことが言えると思います。しかし、政治も組合も同じですが、さまざまなしがらみがあるため、なかなかその声に対して即座に対応することは難しいのが現実であると考えます。「1%の想いに心を寄せ、1%の痛みへの挑戦」このことは、永遠の課題なのかもしれません、この思いは、私も常に持ち続け、バランス感覚を持って、何事にも取り組んでいきたいと考えています。

＼ 永遠の偽善者 ＼

山中市長のいろいろな言葉にふれるにあたり、「1%の想いに心を寄せ、1%の痛みへの挑戦」もそうでしたが、私自身共感できるものがたくさんありました。その中でも「永遠の偽善者」という言葉があり、「偽善か善か悩んで前に進めないより、少なくとも善と考えることを目指して精一杯毎日毎日動いて生きたい」と表現されていました。言葉的には、なかなか受け入れにくい言葉であるとともに、表現自体が偽善ではないかと思われる方もおえになるかもしれませんが、私の中では、「ストーンと腹に落ちた言葉」でした。

また、私は過去、自分自身がかわいいが故に、誰に対してもよくみられようとしていたことから、

偽善者や八方美人と揶揄されることも少なくな、はじめはネガティブに受け止めていましたが、いつの間にか「八方では足りません。三十二方ぐらいですかね。」と、笑って話すことが出来るようになっていたことを思い出しました。

私は、人として生きていく上で、「偽善」というものは、必ずついてくると思っています。なぜならば、それを判断するのは、人であり、それをどう思うのかも人であるからです。「善」とは何か、「偽善」とは何か、どこまでが、「善」で、どこからが「偽善」なのか、この答えはないと思います。しかし、自分自身がどう判断し、どう受け止めるのかによって、何色にすることも可能であるし、前に進むことが出来るのだと考えています。

ゝ 鳴かぬならそれもまたよしホトトギス ゝ

山中市長は、「松下政経塾」の塾生であつたこともあり、松下幸之助塾主の言葉を引用されていることがあります。その中で「ひとつの主義や立場にかたよつて善悪を定めると、人間にムダな努力をさせるばかりではなく、かえつて苦しめることになります」とし、「鳴かぬならそれもまたよしホトトギス」との表現がありました。鳴かないホトトギスは鳴かないホトトギスとしてこの世界のなかで意味をもっており、その存在の意味を考え、「ホトトギスは鳴くものである」という、世間的な常識にとらわれないことが大切であると。今回、自分達の企画の内容を練り上げていくにあたっては、い

ろいろな角度・視点から考えなければならないことを改めて認識するとともに、今後、自分の「価値観」にとらわれず何事にも携わらなければならないと考えています。

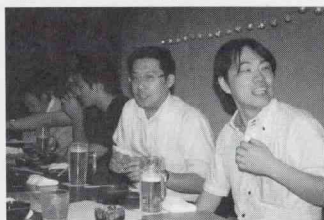
～ やる気 ～

「殻の外へ踏み出そう」は、入塾前に「何事にも一歩前に踏み出すこと」であると位置付けた。今もこの考えに変わることはなく、より一層強くなった。

今後はこれに加え、これから多くの人と接するにあたり、なにかに悩み、迷い、立ちすくんでいるのであれば、「一歩前に踏み出すことができるように、その背中をそつと押してあげることのできる人間になりたい」と考えている。

最後に、この産政塾に参加できたことを私にとって、大きな財産にしていかなければならないと考えているが、この財産を活かすも殺すも自分次第である。

～ ご縁を大切にし、人と人との結びつきをさらに大切にしていこう ～



すべてのみなさまに 感謝

こだわりと熱意を持つこと



名古屋鉄道労働組合

横 井 功

《プロフィール》

よこい いさお

- 1973年 長崎県生まれ
- 1996年 名古屋鉄道株式会社入社
- 2008年 名古屋鉄道労働組合
専従 中央執行委員
現在に至る

〈家族構成〉 妻、長女、長男、父、母

① はじめに

産政塾のお話をいただいたのは、組合専従になって数カ月目。選挙の手伝いや泊まりの会議が多くなるなど、生活が一変した頃でした。周りには塾生OBが何人か見えて、事前に話を聞くことができましたので、開塾式の時は不安よりもむしろ期待の方が大きかったのを覚えています。そこから閉塾式を迎えるまでの間は、本当にあつと言う間でした。グループディスカッションや壇上での自己紹介がつい先日の様に感じられます。当然全ての企画に参加するつもりでいましたが、6回のうち健康と堀川の2回は単組の会議と重なってしまい、欠席となりました。しかし、参加したすべての企画が初めて訪れる場所ばかりであり、松阪市長選の経緯や駅前再開発などの問題、日本の自給率や農業の仕組み、世界遺産登録に向けた取り組みなど、現場で直接感じることで、また、多くの気づきの機会も与えてくれたので、大いに満足しています。

また、余談ですが初回の松阪と2回目の農業では名鉄観光バスを、4回目の平泉では名鉄観光サービスをご利用いただきました。御礼申し上げますとともに、来期以降のご利用もお願いいたします。

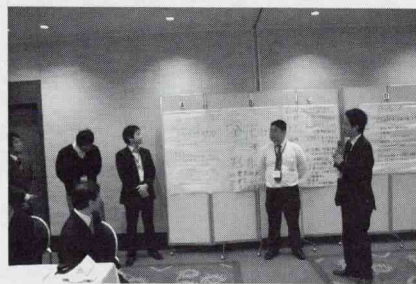
② 自分にとっての「殻」とは何か

さて、産政塾のテーマである「殻の外へ飛び出そう」について、閉塾式の時には、会社で行った自

己分析で認識していた自分の弱点「計画性・分析力の欠乏」と「知ったかぶり」の克服が「殻」の外に踏み出すことにつながると分析しました。その時は、外には踏み出せていないし、他にもまだまだ「殻」はあるだろうという感想で終わっています。

閉塾後しばらく経った今、改めて「殻」について考えてみると、長時間同じ状態に置かれると形成されるといったイメージが挙げられます。会社にあてはめると、長く同じ業務に携わること、特定の人間関係の中で業務を進めていくことだと思います。慣れた仕事を慣れたメンバーで進めていけば、安心感・安定感がある反面、行動や考え方が固定化し、柔軟性や創造性は乏しくなるということなのでしょう。

しかし、自分に当てはめると、そういった意味での殻が形成される状況にはなく、これまで、おおむね2〜3年で担当替えなり異動・出向を経験してきました。駅員・車掌に始まり、ダイビングショップの店員、旅行の企画・添乗、バス会社でのクレーム処理等々を経て、労働組合専従者に至っています。自分にとっての殻は何で、どう形成されたのかを突き詰めると、出向先のサイパンで形成された「南国気質」ではないかと思ひ当りました。年中温暖な気候とゆったりと流れる時間という急激な環境の変化で、形成されていったようです。“何かにつけこだわらず”、“何とかなるさと深く考えず”、“追いこまれてもあせらずイライラもせず”、“結果オーライと反省しない”、“こんな傾向が未だにある



ように思います。南国の方全員がそんなではないので、「南国気質」という表現は適切ではないかもしれませんが、自分のそういった気質こそが、破るべき「殻」であろうと認識を新たにしました。

③ 「殻」を認識した上で活動を振り返る

自分の「殻」を認識した上で産政塾の活動を振り返ってみたいと思います。まずは、参加者について。さすがは産政塾、自分に欠けているものを持った方がたくさんみえました。例えば我々Aグループの鈴木リーダー。いきなり初回の企画を担当することになりましたが、力強いリーダーシップで、企画を成功に導いてくれました。企画自体も鈴木リーダーの発案でしたが、企画に対する「熱意」と「こだわり」があり、自然にその企画に決定したのを覚えています。一方で、自分の案はどうだったかというと、日雇労働者の町、あいりん地区（釜ヶ崎）の現状視察を提案しました。「派遣切り」が問題になっている時で、テレビで取り上げられていたのを見て思いついたのですが、鈴木リーダーほど思い入れがあった訳でもなく、あつさりと取り下げ、また、良い代案も出すことはできませんでした。

企画の中でお会いした訪問先の方々についても、「熱意」と「こだわり」をお持ちの方ばかりだったように思います。

△第1回の山中市長▽

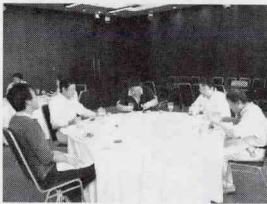
当选当時の最年少首長の山中松阪市長。事前にインターネットでこれまでの活動や考え方について調べてはいましたが、直接お会いしてお話を聞くことができ、改めてその凄さを実感しました。あれだけの経歴と能力であればどんな道でも開けただろうと思いますが、あえて困難な道を選択されたように思います。プライベートな時間もほとんど削り、郷土の発展のために奉仕される姿に感銘しましたが、常人とは次元が違っていると感じました。

△自然農法の松本さん▽

松本さんは、普通ならあきらめてしまうであろうタイミングがいくらかでもあった中で、自らの信念を貫き、専業農家として独立を勝ち取りました。自分にもあれだけの粘り強さがあれば・・・と思いました。

△ロイヤルパークホテルズの朝倉社長▽

「お客様満足」では満足せず、一步先の「顧客歓喜」を追及し、宿泊客満足度のトップを維持。会社の方針に従業員一人一人がよく理解し、行動に移していることに本当に驚きました。私も以前指導担当としてCS向上を担当していたことがあるので、浸透させるまでには相当なご苦労があったと推測できます。



△平泉町の皆さん▽

金色堂以外には目玉となるような現存する施設が乏しい中、粘り強く世界遺産登録への道を模索し取り組みを続ける姿勢は素晴らしいと思いました。努力が報われて登録にいたることを願うばかりです。

それぞれの活動を振り返ると、何か物事を成し遂げる上では、「熱意」や「こだわり」が重要であり、自分にはそれが足りないことを改めて痛感しました。

④今後考え方をどう改めるか

自分の殻を破っていくために、まずは何事に対しても「こだわり」を持つことを心掛けたいと思います。現状の私は何かにつけあまりこだわりがなく、無頓着・無関心です。服装、持ち物、車、お金など身の回りの物はもとより、主義、信条、信条などについても然り。こだわるのはビールの銘柄くらい……というのではいかにも情けない。まずは身の回りのものから「こだわり」を持つようにし、更には考え方にもこだわりの持つて、人の意見に流されないようにしたい。今まではこだわりが無い分、楽に生きてきましたが、これからは楽な方ばかり選択するのではなく、時にはこだわりを持つて、山中市長のように厳しい方の道も選択していかねばと考えています。幸い自分の周りにはこだわり



のある方、熱意のある方が多いので、見習うべき点は見習っていいと思います。

自分なりのこだわりがあれば、自然農法の松本さんのように自分のやり方を貫き通そうという熱意が生まれ、結果を求めて成功を強く望むようになる。また、期限までにやり遂げようという意識が高まり、もつとあせったりイライラしたりもする（今は腕時計すらしていませんが……）。そして、結果オーライではなく、反省すべき点は反省し、次につなげていくこうとする。こんな好循環になればと考えます。

⑤具体的にどう行動するか

今期は労働組合の専従になって2年目で、新たに青年女性部を担当しています。その青年女性部の基本方針は、「よく学び、よく遊ぶ」というもの。産政塾ではそれぞれの企画で、楽しみながら多くのことを学ぶことができ、合い通じるものを感じました。まずは、産政塾のスタイルに倣い、委員自らが活動を企画実践していくように導き、その中で論議を交わしながら、何でも話し合えるなかまをつくれる場を提供していければと思います。そのためには、自分自身も学び成長し、「分らないことがあったら何でも聞いてくれ」と言えるようにしたい。現状力不足であることは否めないのです、アンテナを高め、何事にも関心を持ち、情報量を増やしていきたいと思っています。

⑥最後に

今回、塾誌を書くことで活動を振り返ってみました。反省することがいかに大切かということがよくわかりました。これがなければ「とても楽しかったです」で終わってしまい、自分自身を省みることもなかったと思います。

最後に、このような貴重な経験をさせていただいた中部産政研の皆様、同期の塾生の皆さん、快く送り出していたいただいた職場の方々、心より感謝申し上げます。そして、産政塾がこの先も30期、40期、50期…と続いていくことを祈念いたします。



自らの殻を探して



東海理化労働組合

吉 川 孝 人

《プロフィール》

よしかわ たかと

- 1973年 愛知県西春日井郡新川町（現 清須市）生まれ
- 1992年 (株)東海理化電機製作所に入社
- 2004年 東海理化労働組合 非専従役員（執行委員）
- 2008年 東海理化労働組合 専従役員（書記次長）
現在に至る

〈家族構成〉 妻、長女（8歳）

〈趣味〉 映画鑑賞 読書 ゴルフ

一．おづめ

今回、記念すべき第20期となる産政塾に参加させていただきましてありがとうございました。開塾式の自己紹介でもお話ししましたが、この産政塾へ参加したきっかけは決して積極的なものではありませんでした。組合専従役員になったばかりの私にとって産政塾（名称からいつて取っ付き難い）に参加するよりも、まずは、早く新しい環境に慣れ、そして組合員のために一つでも多くの課題に取り組みたい！と強く思っていました。しかし、そんな私の熱い思いを他所に「楽しいから」「ためになるから」と半ば強引に参加させられたというのが正直なところですよ。

産政塾に対する私の最初の考え方は政治や経済について研修会に参加したり、セミナーを受講するものと認識していましたので入塾が決まった後、本当に気が滅入ってしまったと記憶しております。しかし、職場にいる塾生OBより、産政塾の内容は自分達でイベントを企画し、実際に運営しながら普段体験することができないことが主な活動であると教えていただきましたので若干ではあります、ワクワクしながら開塾式に臨むことができたと思います。

本来なら開塾式、閉塾式を含めすべて（全8回）の企画に参加しなければなりません、都合により5回しか参加できませんでした。しかし、その少ない体験・経験を通じ産政塾テーマである「殻の外へ踏み出そう」に対し、感じたことや思ったことを振りかえりたいと思います。

二. 産政塾塾生、グループメンバーとの出会い

2009年2月4日(水) 愛知県知立市にある「知立セントピアホテル 3F 慶雲」という会場で開塾式が開催されました。緊張の面持ちで会場入りした私達を待ちうけていたものは「塾生となった証拠」として今後、使用されることになる「顔写真の撮影」でした。企画の度に使用されることになる写真とは知らなかったので、案外簡単に撮られてしまい少々悔いの残る写真となってしまいました。

産政塾のテーマは「殻の外へ踏み出そう」であり、年齢・性別はもちろんのこと、業種も違えば労働環境も異なる人達が集まり「自分自身の殻を認識し殻の外へ踏み出す」ために活動していくことになりました。実際にはそのメンバーの中から、5〜6人単位でグループを編成し企画の検討・運営を行うことになります。参加者を見ると、製造業、サービス業、公務員などさまざま。私はBグループにとり自動車に加え、サービス・流通、全国ガスとこれまで交流したことのない方々と同じグループになりました。最初はぎこちない自己紹介からのスタートでしたが、人見知りの激しい私でも会を重ねるにつれ、立場(肩書き)や年齢を感じさせない(気にしない)ほど打ち解けることが出来、深い



交流が図れるようになりました。

この塾生を始め、グループメンバーとの出会いが私が抱える「殻」が何であるのかを教えてくれるキツカケとなりました。一つ目の「殻」は塾生・メンバーとの会話を通じて『知らないことを知る』（知らないことが多すぎる）ということでした。

三 『殻の外へ踏み出す』ための企画を考える

Bグループとして『殻の外へ踏み出す』ために企画を検討しはじめたのが、開塾式が終わってすぐのことでした。Bグループの企画開催日は2009年5月29日であり、十分検討する時間もあると思えますが、組合役員の立場からするとこのタイミングは春とり（春闘）の時期と重なっており、正直あまり時間を取ることができません。そこでなるべく早めに会合を開催し、企画を進めて行くことにしました。幾度となく、金山駅周辺の居酒屋やファミレスに集まり話し合いを行った結果『夢と希望と元気を与える場に学ぶ』と題して関西独立リーグを運営する企業を訪問し、尼崎にて神戸9クルーズVS明石Rソルジャーズとの試合を観戦する企画を考えました。しかし、残念なことにこの企画は目的地周辺で発生した新型インフルエンザのため、Bグループの企画として正式に展開する直前にあえ無く中止となってしまいました。間際での中止であつたため急遽、事務局にて別企画を用意して頂き、Bグループの企画としては日を改めることとなりました。その後も会合を重ね（案を出しては何

らかの理由でボツになる。) 最終的には閉塾式と同日である2009年9月15日(火)に『清掃活動を通じて、社会貢献を考える くあなたが考える社会貢献とは難ですか?』と題し、名古屋市堀川の清掃活動を行うこととなりました。

実際に開催できた企画の内容もさることながら、この開塾式以降に数々のテーマを考え、実践に向けて話し合ったプロセスは大変有意義な時間であり、同じ目的のためにチームで一丸となって進めていくことの楽しさ、チームプレイならではの達成感を味わうことができました。二つ目の『殻』は、何かと他人の意見に流され安易な方へと妥協しがちな私としては、時間が無い中でも、『どんな企画が必要なのか? 殻を破るためには何が必要なのか?』と議論を通じて真剣に話し合う姿勢を学びました。

四. 企画への参加を通じて

残念ながら泊まり企画や日帰りとはいえ遠出をするような企画には参加できませんでしたが、他グループの皆さんが考えた、普段の生活はもちろん、仕事でも体験・経験することのできない企画に参加でき、大きな刺激となりました。私が参加できた企画の中で三重県松阪市の山中市長との懇談の折、山中市長から『永遠の偽善者』ということで、「善」であろうと「偽善」であろうとやり続けることに意義がある。というお話をお聞かせ頂きましたが、



なるほどと感動し、今でもそのフレーズが印象に残っています。この他ではどの企画にも必ず用意されていますが、やはり最後に実施される『夕食懇親会』が一番楽しく、それぞれの企画を最高に盛り上げてくれるスパイスになっていました。正直この『夕食懇親会』で多くの皆さんと交じあうことができました。（本当に美味しく、楽しかったです）

五. 最後に

経緯はともかく、今はこの産政塾に参加でき、第20期塾生のみんなに出会えたことに『感謝』しております。産政塾を卒業するにあたり、何を得たのか？と自問自答してみるとやはり一番の収穫は『皆さんに出会えたこと』でした。この場限りではなく、生涯にわたり掛け替えのないものを得たように思います。また、皆さんのおかげで素の自分を存分に出し切れ、楽しく愉快的時間を過ごすことができました。

さて、『自分自身の殻を探し、それを克服する』ことが目的でしたが、今回の体験・経験を通じ、私自身の殻を改めて振りがええると、その時々直面したこと（苦手なこと。やりたくない。出来ないと思ったこと。）が『殻』であると思います。殻の外に踏み出しても、また新しい殻にぶち当たること



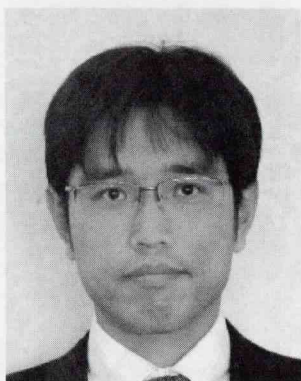
になりますのでいつまで経っても『殻』の外に踏み出せていないと感じてしまいましたが、ひとつずつ（一歩ずつ）克服して行きたいと思います。

塾長の加藤さんを始め、事務局の高橋さん、そしてBグループの愉快的仲間たちをはじめとする記念すべき第20期塾生の皆さんには本当にお世話になりました。この場を借りてお礼申し上げます。

最後に、各グループリーダーの皆様へOB会の開催（定期的に）をよろしくお願い致します。



今までの人生で貴重な体験



アイシン労働組合

六 城 雅 隆

《プロフィール》

ろくじょう つねたか

- 1994年 アイシンAW（株）入社
- 1994年 技術部 配属
- 2005年 技術管理部 配属
- 2006年 アイシンAW労働組合専従執行委員
現在に至る

〈趣味〉サーフィン

「産政塾」の名を知ったのは3年前に組合に移って間もなくであった。執行部の一人が産政塾のメンバーに選ばれたのだ。周りの声は「大変だぞ」「研修は一日つぶれるぞ」などささやかれ、行つたメンバーに聞くと、「大変だ」「つらい」「自分たちがやらなきゃ」とつぶやき、聞いている私は「ああ、自分でなくてよかった。タダでさえ仕事がたくさんあるのに……」と胸をなでおろしていた。

ところが、今年の初めにいきなり委員長から「産政塾」への参加の打診を受けたのだ。組合も3年目で業務も分かり始めた矢先、毎月丸一日業務を離れるのはいかがなものかと思つてしまった。「今更何を学ぶんだ……」と感じたのが正直なところだった。

2月の開塾式でも何が始まるのか分からないドキドキ感でいっぱいだった。(多分周りのメンバーも同じだったと思う。)自由にテーマを決めてもいいと言われても何にもアイデアが浮かばず、自分の企画力の無さを痛感した。そんな中、私を除くEグループのメンバーは自由な発想(と言うよりも○○へ行きたいという欲望か?)に驚くばかり。とくに自動車業界以外の人は見方、考え方が違つて大変勉強になり、新たな発見の連続であつた。

他のグループから出てきたテーマも「これが研修テーマか?」と思うものが多彩に出てきたのは驚いた。絶対自分では農業や世界遺産などは考えられないテーマであつた。それでも事務局の方々は驚くことなく、各グループ



のテーマを褒めてくださり、非常に懐の広い研修であることが分かってきた。

メンバーの発想力にも驚かされたが、そこからの企画への落とし込みにも感心しきりであった。「このテーマからどんな研修にまとめるんだ？」とレジュメをもらうまでは検討がつかなかったが、立派なレジュメをもらうと「あのテーマでここまで深く考えているとは……（ここまでうまく理由をつけるとは……）」と改めて感心してしまうのと、おかげで楽しい研修になることへの感謝の気持ちでいっぱいであった。

テーマは政策・制度から個人のスキルアップなど多種多様であったが、今振り返ってみるとこれらのテーマで活躍している方々は誇りを持ち、かつ楽しんで仕事をされているところである。自分の考えをしつかり持ち、信念を貫く姿勢は見習わなければならないと感じた。そして、国を思い、地域を思い、人を思い、自分が何かをしなければとの熱い思いを持った方々とのふれあいであった。研修が始まるまでは「今更何を……」と思っていたが、研修を通じ、講師の方々からのエネルギーをもらい、自己の見識を深め、かつ自分を考える非常に為になる研修であったと思う。

簡単に研修の感想を述べると

第2回 松阪市長



とにかくエネルギーギッシュで行動的であった。自分より若いが見習うところは多々あった。

第3回 農業体験

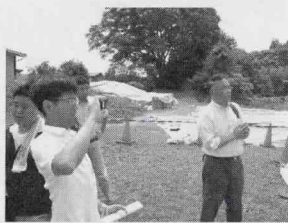
松本さんのユニークな人柄に惹かれたが、自分のスキルをうまく農業に結び付けて新たな農業にチャレンジする姿にワクワクした。

第5回 平泉

世界遺産への登録の難しさとその地域の郷土愛の深さを感じた。これからはまず自分の住んでいる地域を知り、好きにならなければいけないと感じた。

第6回 ロイヤルパークホテル

我々Eグループのテーマであるが、唯一研修らしい研修であったと自負する（笑）。今までの流れから少しテーマが硬かったかと思われたが、J. D. パワー顧客満足度No.1企業の話が聞けて学ぶところはいっぱいあった。



第7回 堀川の清掃活動

初めてのボランティア体験であったが、地域を清掃することで今まで気がつかなかったことが分か

り、ボランティアをすることでその地域の問題点や課題が見えてきたことは面白く、新たな発見であった。

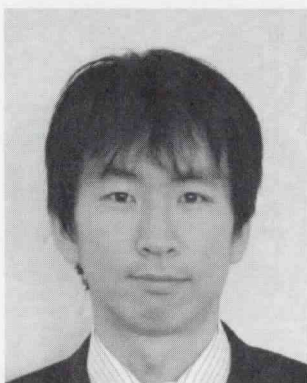
この研修を通して感じたことはとにかく考えてばかりではダメでやはり実行力を発揮しなければいけないと感じた。思い立ったら即実行。松阪市長の山中さんをはじめ、農家の松本さんなどは「なる」と決めたらどんなに困難があっても意思を貫く姿勢は自分にはないものである。ロイヤルパークの研修でも部下を指導するにはやはり上司が口先だけではなく、自ら実行することを言われていた。果たして今の自分にはそんな熱いものがあるのか分からないが、思い立ったら即実行を心がけていきたいと思う次第である。

最後にこんなにすばらしい研修を企画していただいた加藤塾長をはじめ、事務局の方々には感謝いたします。今までは壇上の人と思っていた加藤塾長は今でも大学院で学んでおられるという姿を見て気が引き締まる想いです。

また、今回同じグループであった沖本リーダー、石川サブリーダー、伊藤フォーラム係、柿本総括係には大変お世話になりました。沖本リーダーの調整力、実行力のおかげですばらしい企画ができたと思います。産政塾は閉講しましたが、今後ともよろしく願います。



産政塾に参加して



トヨタ自動車労働組合

脇坂 一行

《プロフィール》

わきざか かずゆき

- 1999年 トヨタ自動車株式会社 入社 第1調達部 配属
- 2003年 海外実務研修派遣（米国）
- 2004年 調達部 帰任
- 2008年 トヨタ自動車労働組合専従執行委員
現在に至る

〈趣味〉ゴルフ、テニス、陶芸、韓流鑑賞

1. はじめに

産政塾の存在を知ったのは、組合執行部への専従となつてからのことでした。その時の感想は、正直言つて「楽しそう!」機会があれば参加してみたいというものでした。なぜ楽しそうと思つたかと言えば、一つは多くの団体や異なるフィールドで活躍される方々と知り合いになり、行動を共にできること。二つ目に現場体験型である。三つ目に個人では興味があつても実現し難いことを体験できそうだと思うからです。

振り返つてみれば、この考えは間違つていなかったと感じている。



2. 企画を通じて

【政治】

「若手政治家に聞く」では松阪市長との懇談会を開催いただき、大志を抱くことの魅力・楽しさを感じることができた。4月の懇談会以後、多くの30代の首長や国会議員が誕生し、政治の変化が現実に起きており、政権交代に象徴される旧来の政治手法からの変化だけではなく、政治的基盤を特に持たない新しい世代の台頭は、政治に興味が無いと言われた世代でもさすがにバブル崩壊以後、約20年

近くにもわたつての低成長に市民が幻滅し、新たな希望を求めている現われであると感じた。このような時期に広い視点で物事を考える同年代の首長に実際話を伺うことができ、大所高所から物事を捉える視点と市民との対話を欠かさない現場・市民視点の両面のバランスを高い次元で実践しようとする姿勢に大いに刺激を受けるとともに、自らの周辺に顧みて組合員の政治への関心をもっと高められるよう取り組んでいく好機であると励みにもなった。

【文化】

世界遺産登録を目指す平泉訪問では、東北に住んでいた時に何度も訪問していた時とは異なる感想を持った。このことは訪問地の歴史を知ることが、好奇心を掻き立て、訪問を何倍にも楽しくしてくれることを実感するいい機会となった。この平泉訪問がきっかけで、平泉に模範とされた京都の寺社仏閣にもあらためて興味を持ち、後になって、無量光院のモデルとなった京都宇治の平等院を訪ねてみた。既に世界遺産に登録されている平等院はその威風堂々とした佇まいで歴史を感じさせる鳳凰堂を中心にその圧倒的な存在感は、残念ながら今の平泉では遠く及ばないと感じざるをえなかった。わずかに浄土式庭園と寄木造の阿弥陀如来坐像が2つの遠く離れた土地の繋がりを偲ばせてくれたが、ほとんどの有形文化財が「跡」でしかない平泉にとっては、いかにその文化的価値が日本人にとって高いものであると言っても、世界に認められることは難しい



のではないだろうかと思わずにはいられない。それよりも町全体で美観地区を増やしていくことや奥州藤原氏の文化をコンセプトとした町づくりをすすめた活性化の道など、まずは国内での平泉に対する認知度向上を図ることが先決ではないかと感じた。

昨今の国内の世界遺産登録をみると、世界遺産に登録されたことで文化財を保護するという観点よりもその名声を使つて観光客を呼びこむことを目的にしているものが多数散見されるように思う。文化的価値を世界に認めてもらうためにはまず、国内での認知度を高めて、みんなが世界遺産であるべきと思うことの方が重要で先ではないだろうか。今回の企画を通じてあらためて思うことは、残念ながら日本の景観は全く統一性がなく、独自の歴史を感じさせるものでないことが観光資源を埋没させ、魅力の乏しいものになっているということであつた。観光を内需の柱に育てようとする政治にこのあたりの改善を期待したい。

【サービス】

プロのサービスを学ぶために訪問した顧客満足度の高いロイヤルパークホテルでは、本当に多くのことを学ばせていただいた。

この企画で初めて Customer Demand や Employee Satisfaction という言葉を知ることができた。その言葉の意味することは非常に深い。今までの自分の人との接し方、コミュニケーションのとり方を根本から見直す必要があると感じさせられた。

まず大きな気づきを与えられたのは、食事の説明であった。同じ食事をするという行為であつてもその都度期待するものは異なるもので、味・雰囲気・サービス・コストなど常に相手が何を求めているかを考える必要があると講話された時には、無意識のうちに自らの行動・心情にもあてはまることを言葉で説明され「はっ」とさせられた。こういった身近なことをきちんと考えながらこなすことが殻を破る前に己を知る上でも重要なことだと考えさせられた。

そして、コミュニケーションに必要なことは「ちよつとした気づき」だという考えにも勉強させられた。少ない時間で相手のことをより多く知るために「言葉を引き出すような言葉」で会話をし、そして会話相手がなぜこの質問をしているのかを読みとるように心掛けているとのことであつた。この接し方こそが相手の期待を少し上回る満足を提供する土台であるといふに刻み込み、自らの生活にも活かしていかなければいけない重要な観点であると感銘を受けた。特に、今の自分の立場では、より多くの声なき声を拾わなければいけないと思いつつも、この基本が抜けていたようで恥ずかしくもあつた。

【社会貢献・環境】

最後となつた「堀川の清掃活動を通じて社会貢献を考える」企画は、地味ではあつたが一番身近な



ところからの発信ができ、私の属するBチームの企画ではあったが、最後を飾るには適した企画だったと思う。

知らず知らずのうちに車で、徒歩でよく橋を渡っていた堀川だが、その歴史などは全く知らず、ただのドブ川だと思っていた。しかし、歴史を紐解くと名古屋と実に深い結びつきがあり、屋形船から見る風景の中には今でもその歴史の一旦が残されていたりしたことには嬉しい驚きを感じた。そんな堀川の川べりをゴミを拾いながら歩いたわけだが、小雨の降る中であつたにも関わらず、参加者全員が夢中になってゴミを拾っている姿が実に不思議であつた。はじめは、名古屋まで出てきてゴミ拾い？と言われるのではないかと心配もしていたからである。こうした姿に米国で体験したボランティア活動が思い出された。米国では公共事業が日本に比べると少なく、地域社会も行政だけに頼らないからなのか会社や学校をあげて清掃や公園整備のボランティアに参加する風土があつた。または半強制であつたり、進学のための点数稼ぎであつたりもするが、参加する動機がどうであれ、こういった社会貢献活動は結果として行政が担っている清掃や公園整備といった負担を減らすことになるので、税金の使い道を変えることにも繋がるのではないかと思う。また、地域での活動に参加することで会社以外の場所で自分の居場所を確認できるようになり、会社定年後の生き方にも影響を与えることになるように思う。自分達でできることは自分達でやるという発想で、地域・職域を引っ張っていくことができるれば「殻を破る」ことにもなっていくのではないかと思つた。

【農業体験】

唯一の心残りとしては、地産地消など農業への関心が高まっている中で企画された農業体験に参加できなかったことだろう。食の安全、国内自給率の低下など農業に関係する現代の課題は多岐にわたっており、是非とも産政塾メンバーと意見交換してみたかった題材であった。

また、多くの企画を開催いただき、参加させていただいた以外に何度も企画をさせていただいたことが好奇心を掻き立て、興味の幅を広げてくれたと感謝している。私の属したBチームは当初の月に関西独立リーグを訪問する企画をたてていた。女性初のプロ野球選手である吉田えり投手が登板するかもしれない日に企画でき、楽しみにしていたが、新型インフルエンザが関西で発生したことで企画延期となった。時を同じくして、リーグ運営会社が関西独立リーグから手を引いたことで企画は練り直しになり、次の企画は広島原爆体験を語り部から直に聞くというものであった。これもオバマ大統領のプラハ演説もあり、時代にあつたテーマとなるはずであったが、9月に閉塾式と同時開催するために名古屋周辺での半日開催が可能な企画ということで企画やり直しを余儀なくされた。最終的に堀川での清掃活動に落ち着いたが、ここに至るまでに本当に多くの企画が提案され、いくつか企画されていく中でBチームメンバーの企画提案力の高さと粘り強さ、前向きな思考回路に尊敬の念を抱くことを禁じえなかった。この経験は、他チームの魅力あふれる企画に参加することにも劣らない勉強の機会となった。

この第20期産政塾は、会社人事部や組合で仕事をされている参加者が多かったが、同じ労務の仕事をしていても業種によって考え方も異なり、物事の捉える観点の多様性を肌で感じる本当に勉強になる場であった。半年という短い時間ではあったが、今回集まった仲間と多方面な分野で意見交換することができたことはこれからの宝となるだろう。特に同じチームとなったBチームのメンバーとは何回も企画を作り直すために集まることができ、親交を深められたことに感謝したい。

最後に「殻を破れたか？」と自問してみるとまだできていない気がする。しかし、殻があることにも気づいていなかったことに産政塾が気づかせてくれ、殻は何なのか？を考えるようになっただけでも少し成長できたように思う。

多くの気づきと刺激を与えてくれた産政塾に感謝し、集った仲間感激し、企画に協力してくれた多くの方々に感謝し、第20回産政塾を成功裏に終えられた事務局に感嘆して私の産政塾を終えたいと思う。事務局をはじめ、携わられた多くの方々、どうもありがとうございました。



第 20 期産政塾を振り返る

産政塾事務局

高 橋 若 葉

第20期産政塾は、あつという間に終了した。第19期の閉塾式後の懇親会に参加したものの、過去塾生としての参加経験も無く、全く「産政塾」のイメージがわかないまま開塾式を迎えた。それぞれの企画内容については、塾生のみなさんが書いていただけるので私は事務局の立場で感じたことを書きたいと思う。

■開塾式まで

10月末にこれまで参加していただいた企業、労組に「産政塾塾生募集」のご案内を送った。誰も気づいていないかもしれないが、パンフレットを産政研内の印刷に変えた。100枚程度のパンフレットを印刷屋に出してはもつたいたい。その分の費用を塾の運営で使いたいと思った。

このときは「100年に1度」と言われた経済危機の最中で企業が様々な見直し等を行っており、「今期は産政塾参加の見直しもあるかもしれない」と産政研内でも話が出ていた。実際2人ほど申し込み後に「こういうご時勢なので」とキャンセルがあつたものの26人の参加をいただき、本当にうれしかった。

■開塾式

当日一番緊張していたのは私だと思う。もともと人前に立つことが苦手で、人前で話をするのは大の苦手。

「それでは…」で、第20期産政塾が始まった。緊張で呼吸できず苦しかった。始まって10分、塾長の講話のときにようやく呼吸ができたように思えた。

塾生が事前に考えてきた企画は、どれもお金と時間さえあれば実行したい企画ばかりだった。みんなすごいな。自分では考えもつかない観点であったり、訪問先だったり。これぞ異業種の集まる産政塾の良さの1つだなあとと思った。実際は予算と開催時期に合った企画に決まったが、その内容も「ありきたり」では無く、この先が楽しみな企画だった。

事務局として常に「絶対に反対しない」「私は先生じゃない」ということを意識した。個別の打ち合わせでも反対はしなかったつもりだが、「ダメだと言われた」とか思っていた人がいたらごめんなさい。

開塾式では多少きこちなかったグループも、懇親会の席ではかなり打ち解けることができたのではないかと思う。その証拠にガンダム好きが集まって話をしていた。初めて会うのに初めてじゃないよな産政塾ってすごいなあと思った。

開塾式後からメールの数が増えた。春の取り組み中ということもあり、なかなか集まって話をするのができず、次の企画担当グループに限らずメールでのやりとりが主となった。私自身も全てのグループの事前打ち合わせ（定時後に集まって企画の打ち合わせをする）に参加ができなかった

ため、打合せの日程調整や予算、担当割などメールが来ると進捗状況がわかり、安心できた。

■第2回

開塾式から次の企画まで2カ月。正直何から始めたらいいのかわからなかったし、どこまで事務局が手を出していいのかその加減がわからなかった。

しかし、「2カ月しか無かったからこのぐらいで勘弁」という企画では、塾生はもちろん、送り出してくださる職場の皆さんにも申し訳ない。とりあえずまずは私が松阪市役所に電話を試してみた。秘書室の今田さんが「市長に聞いてみる」と言ってくださり、検討していただいた結果、市長からも「ぜひお会いしたい」と言っていたことができた。最初の企画でこんなにトントントンと話しが進んで少し安心した。

その後は、Aグループリーダーの鈴木さん（丸栄労組）にお任せした。1度だけ事前打ち合わせに参加したが、それはすでに最終打ち合わせで、リーダー自身は春取り真っ最中（4月上旬）にもかかわらず、すばらしい企画書、進行を作成してくれていた。リーダー1人に負担がかかるのは避けたかったが、実際にはそうなつてしまい申し訳なかった。

当日は、松阪市役所のみなさんの多大なるご協力もあり、無事スケジュール通り運営できた。最初の企画でもあり、懇談中に松阪市長への質問が出なかったらと思っていたが、その心配は無駄だった。

事前の宿題で松阪市長に聞きたいことを提出してもらっていたが、その内容についてはおおかた松阪市長の講話に織り込んでいただくことができ、その他にも質問が出て、さすがは選ばれただけある産政塾生だと思った。

当日、懇親会で松阪牛を食べたにもかかわらず、帰りのバスの中で牛丼を食べていた横井さんの姿が今でも目に焼きついている。

■第3回

第2回の松阪市長との懇談開催後、大野田リーダーから「訪問先を変更したい」と連絡があった。理由は「わざわざ次も三重県まで行ってやることではないよな、かなり内容が薄くなってしまう」という思いや不安からだった。先回の産政塾に参加して、決めていた内容をすぐに見直しをする、しかも次の行先についてはすでに調査済みなのに。このすばやい行動力にとっても感心した。松本自然農園さんからの返信が待てずに松本さんを直接訪ねて行くという行動力にも感心。おとなしそうに見えたが実はものすごい行動力の人なんだと思った。前日にも天気によつてスケジュールが変わるなど細かく連絡をくださつて、レジュメにも織り込むことができた。

情熱弁当は松本さん、奥さんも初めて食べるらしく（少量では名古屋から豊田まで配達してくれる）喜んでくださった。

当日、松本自然農園さんに到着したときは小雨が降っていた。雨天だと畑が荒れるため農作業はできないと事前に聞いていた。が、昼から上がった。これはCグループの信念が通じたものではないか？と思ったりした。

午前中の講話のときは松本さんは大人しい方かな？と思っていたが、午後から畑に出たら人が変わったようだった。草の話、草取り、変わった鋤での土起こしなど、教えてくださるとき笑顔でほんとうれしそうだった。好きなことをやるときは不思議と笑顔になるんだと思った。笑顔で作る野菜はきつとおもしろいだろう。

土起こしは全員が体験した。中にはまだまだこちらが声をかけないとやろうとしない消極的な人もいたが、回を重ねる度にそういう消極的な人はいなくなつたと思う。

■第4回

関西独立リーグからも訪問の了承をいただいていた。企画は実行する気いっぱいで、キャッチボールとか野球の練習をしなくていいかという話までしていた。しかし、塾生から「会社から関西方面の出張の自粛なんですけど、産政塾はやるんですか？」との問い合わせが来たりして、もし、産政塾で関西に行つて何かあつたら大変なことになるかもしれないと考え、やむを得ず中止とした。

ただ、限られた期間の産政塾であり、顔を合わせて話しをすることは非常に貴重なため、塾長と相

談した結果「この日はせっかくみんなも予定しているから、集まろう」ということになった。ということで懇親会だけでは職場の理解も得られないため急遽事務局企画を作ることになった。労組で定年近い人を対象とした「セカンドライフセミナー」を担当していたとき、大変お世話になり、また参加者から大好評の健康の先生である「健康宅配便ハーモニーの深見先生」に急遽お願いした。先生がダメだったら次は誰にしようかなど全く考えていなかった。

当初は関西に行く予定が事務局企画となったために、業務都合で欠席する人が増えたのは残念だった。企画よりも塾生同士で会う時間の大切さをもっと伝えたら良かったのかもしれない。

この日、初めて全ユニー労組の中村さんが参加できた。Bグループ以外の人と会うのは初めてだが、ここが産政塾のすごいところで、とても初めて会う感じではなく、すぐに打ち解けていて安心した。

深見先生は、結構ズバツとものを言う関西人で、エゴグラムの結果を見て各人の性格について解説をしてくださったが、意外にも誰も怒ることなく素直に聞いていた。ここで中村さんが禁煙できたのがすごい。

この日は初の有志の2次会もあり、まだ会って数カ月、実際は4回ぐらいしか会っていないのによくこんなに仲良く話しができるなあと思った。これって産政塾ならではの难道うか。でも「いいことはいい！」ので理由は考えないことにした。

■第5回

誰もが楽しみにしていた泊まり企画。当初事務局が提示した日程では担当グループメンバーが参加できないため、日程変更をした。が、1カ月前ぐらいになつて2人参加できないことになった。当日は3人で取り回すことは難しいが、事前の細かい準備もあり、無事終了することができた。(最初のバスガイドさんの長い話を除けば)

平泉には2度ほど訪問したことがあるが、今回のように千葉様より非常にわかりやすく説明をしていただいたり、座禅前に住職より説法をいただくことでさらに平泉の歴史に興味を持つことができた。泊まりのため、いつもよりゆつくりじっくり話しをすることができた。塾生全員が輪になつて飲みながら話しをするのは学生みたいでいいなあと思つて見ていた。プロ野球を見て盛り上がったり、塾や仕事と関係の無い話しをするのはいい。もつと早くに泊まり企画をしたらもつと早く打ち解けることができ、多くの人と色んな話しができたのではないかと思つた。(第21期は泊まり企画を1カ月前出した)

■第6回

第6回ともなるとほとんど相談もなく、沖本リーダーからは予算と日程の相談があつた程度で、1度だけ事前の打ち合わせをしたときには、ほとんど企画はできていた。(でもなぜか、塾生からのメールが一番多いのは沖本リーダー)

当初予定をしていた日では、費用が高くなるとの先方からのご提案をいただき、木曜日の開催となりました。さらには前泊したほうがよりホテルがわかるとのことで、ほんとに格安でご提案いただいた。

部屋のカーテンを開けると目の前に東京タワーが見えた。すごく素敵なお部屋を用意していただいて、単純なのでそれだけでロイヤルパーク汐留タワーとスタッフの方々の心遣いが好きになった。

立派なホテルにちよつと似合わないカジュアルな服装の塾生たちだったが、快く迎えてくださり、さらには素敵なお皿でおいしいスペシャルな食事をいただいた。

当日は、聞いているだけでなく、実際に自分たちも課題をいただき、グループで考え、発表した。ホテルの見学も普段はできないことで、細かいところまでの気配りなど労働組合の活動にも繋がるものが多いと感じた。

最後に石賀さんが感極まってみえたのは、この産政塾開催までに変えて尽力いただいたからだと思った。その後もお礼のメールだけでなく手紙まで頂戴した。残念ながらすでに石賀さんはロイヤルパークにはおみえにならないが、同じ気持ちの方が何人もいらっしやるのではないかと思う。

■ 第7回

やつと、Bグループの企画が実行できる日がきた。サントリー、関西独立リーグ企画も目の目を見ることなく、次の広島企画も衆議院議員選挙のため労働組合役員の塾生の大半が参加できないこと

から見送ることにした。せっかくの企画も塾生の多くが参加しないことには、時間を割いていただく訪問先にも失礼である。Bグループがどのグループよりも多く集まって論議していたこと、どのグループよりも多く企画を作っていたことを知っているだけに、「中止」とはとても言えなかった。なんとかしてBグループの企画を実行したいと思い、異例ではあるが、9月に開催を決定した。短期間に見まで終え、当日は短い時間に内容がぎっしりの充実した内容となった。

■閉塾式

結局、第20期は事務局の展開のまずさもあり、塾生全員が一同に会すときは一度も無かった。本当にこれが残念でならない。第7回の閉塾式では懇親会、2次会も含めると入れ替わりではあるが全員が顔を出してくれた。

6月の泊まり企画後に「端数会」というものができた。

第20期はリーダー同士がとても仲が良いと思った。その証拠にOB会はリーダー持ち回りで幹事を務めることになっている。それぞれに個性のあるリーダーで、企画の進め方でも全く異なる。色んなリーダーの形があるんだと学ばせていただいた。

前任者の松井さんから「僕は塾生と年齢が近かったからねえ。」と何度も言われたが、産政塾生であれば「年齢は関係ない」と強く思い、各グループの事前打合せ（飲み会）や端数会にも参加させて

いただいた。各グループの企画当日までは、仕事が終わった後19時とかから集まり、論議を重ねていた。22時を過ぎることがあっても、なぜかみんな1つの企画を作ることが楽しそうだった。なんだろう？この産政塾の力って。仕事が終わって疲れているはずなのに、なんだろう？っていつも塾生が論議している中で思っていた。

この第20期に塾生を送り出していただきました企業、組合の皆様、業務の調整をいただいた職場の皆様はこの場を借りてお礼申し上げます。間違いなく塾生は参加する前とでは変わっていると思います。

そして第20期の塾生のみなさん。リーダーの鈴木さん、外山さん、大野田さん、内藤さん、沖本さん。本当に楽しい時間をありがとうございました。私にとっても最初の産政塾で、右往左往の事務局でご迷惑をおかけしました。これからもどうぞよろしくお願いします。

産政塾活動記録

《第1回 開塾式》

●と き：2009年2月4日（水）

●場 所：知立セントピアホテル

●内 容：・第20期産政塾開塾式

- ・塾長講話
- ・グループディスカッション
- ・懇親会（自己紹介）



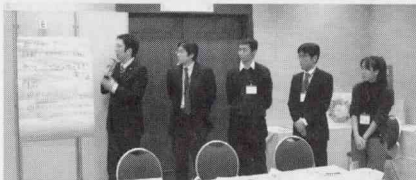
第20期産政塾 塾生のみなさん



【塾長講話】加藤裕治 塾長より塾生へ 「鍛えるということ」

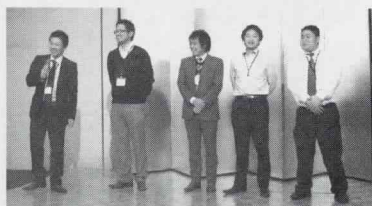
- ・discipline（鍛える）
- ・人生 生きていくにあたり、何のために生きるのか。
- ・幸せ感を味わうために社会に役立つ目標を。
- ・自分がいかほどのものか、それを知ることは大事。
- ・サラリーマンの知識だけでなく、知恵をつける。知恵は毎日積み重ねていくことによってわかる。
- ・ピンチのときこそチャンス。じっくり考えるとき。力をつけていく。

【グループディスカッション】



- ・ 1人ひとりの企画案をグループ内で発表をし、その中からグループで論議をし、企画案を1つ決定。最初は緊張して(?) 静かでしたが、しだいに打ち解けたのか、話しが盛り上がり、なかなかまとまらないグループもありました。

【懇親会】



1人ひとり自己紹介。グループでの役割や、申し込んだ動機、職場での仕事の内容やPR、趣味の話などあり、グループ討議とは違って和やかな雰囲気になりました。

《第2回 テーマ：「若手政治家に聞く！」》

●と き：2009年4月10日（金）

●場 所：三重県松坂市 ベルファーム、松阪牛肥育農家、
松阪市役所



山中市長から、市政への取り組み、市民への想いなど率直にお話いただき、強い信念と情熱、柔軟性を感じることができました。



松阪市長（前列右から 4 人目）と一緒に。



松阪駅前の開発状況について建設部の方から説明を受けました。



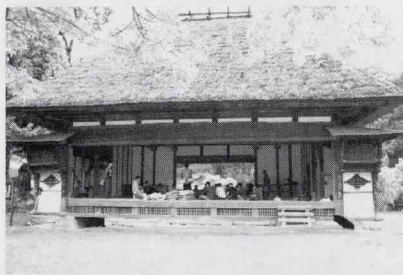
説明を受けた駅前を実際に見てまわりました。



《第3回 テーマ： これからの「農業」について考える》

●と き：2009年5月8日（金）

●場 所：愛知県豊田市「松本自然農園」



小雨の降る静かな山の中で講話を開きました。



昼食後、松本さんのお子さんを抱っこする大野田リーダー。



松本さんは、畑では本当に楽しそうに説明くださいました。笑いあいの楽しい体験でした。





↑久しぶりに土に触れ、ミミズを見て感動！

あまり見慣れない鍬。慣れない鍬さばき(?)とにかく何でも体験。→

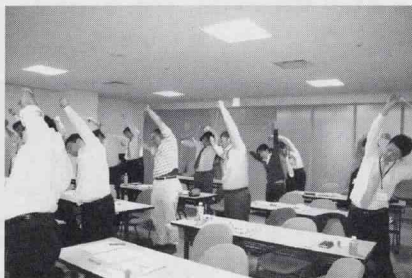


《第4回 テーマ：自分を知る、仲間を知る》

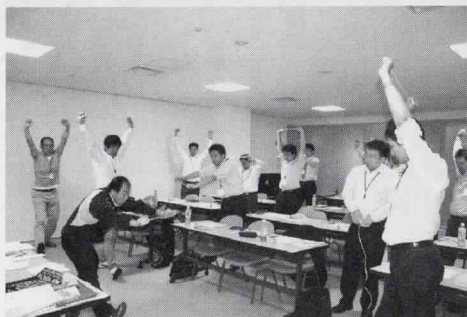
●と き：2009年5月29日（金）

●場 所：刈谷市産業振興センター

Bグループの企画で関西に行く予定でしたが、新型インフルエンザの影響から急遽延期とし、事務局企画で実施をしました。



健康宅配便ハーモニー 深見トレーナー

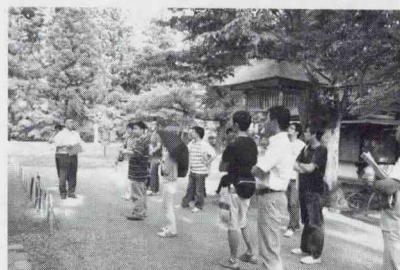


体が柔らかい人と硬い人。運動不足なのか、硬い人が多いように感じました。簡単そうで意外とできないもの。

《第5回 テーマ： 奥州平泉の世界遺産登録活動から学ぶ》

●と き：2009年6月26日（金）・27日（土）

●場 所：岩手県西磐井郡平泉町



平泉町教育委員会世界遺産推進室 千葉様より世界遺産登録に向けた取り組みについて細かく説明をいただきました。

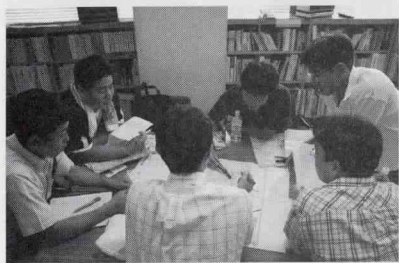
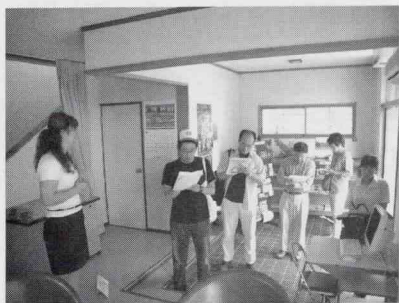


ゆっくり色んな話しができるのも泊まり企画ならではの。



千葉さんおすすめの朝の風景を見に、早朝散歩。

3グループに分かれ、実際に町の人々の生の声を聞いたり、コアゾーン、バッファゾーンを実際に自分の足で歩いたり、山の上から平泉の町を目で見たりしました。



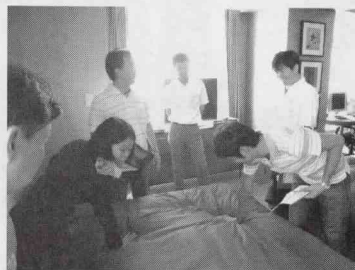
《第6回 テーマ：プロのサービスを学ぶ ～見えない「お客さま」を意識するために～》

●と き：2009年7月16日（木）

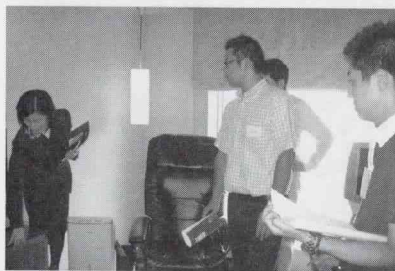
●場 所：ロイヤルパーク汐留タワー



昼食は、料理長が事前に参加者全員の好き嫌いを確認され、産政塾オリジナルメニューを作ってくださいました。



従業員の方から客室内の細かい配慮などについてご説明いただきました。その後、お客様に接する姿勢を直接おうかがいすることができました。

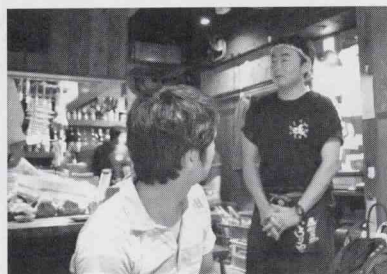




例題をいただき、お客様の「真の期待」は何か？グループで話し合い、発表しました。ただ単に質問に答えるのではなく「なぜその質問・相談をしているのか？」を考える。



企画から運営まで、朝倉社長はじめ、大島次長、石賀様には大変お世話になりました。



懇親会は、「居酒屋甲子園」決勝進出の「いろり屋」さんで。こちらでも店長のこだわり、従業員の方の働き方について直接おうかがいすることができました。

《第7回 テーマ：

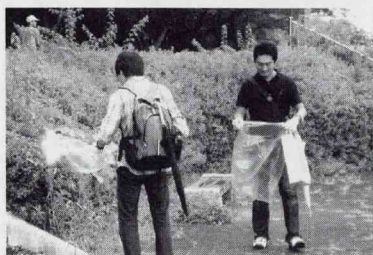
清掃活動を通じて、社会貢献を考える ～あなたが考える社会貢献とは何ですか～》

●と き：2009年9月15日（火）

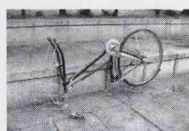
●場 所：名古屋市 堀川周辺



名古屋市緑政土木局の小島様より堀川の現状と課題、またこれからの整備計画についてご説明いただきました。



3グループに分かれ堀川の遊歩道やその周辺のゴミ拾いをしました。





3時間のゴミ拾いでゴミ袋14袋のゴミを回収することができました。初めて清掃活動をする塾生からは、「楽しい」という声がありました。



屋形船に乗って堀川の文化や歴史についてうかがいました。清掃したエリア以外の堀川周辺について話を聞きながら見ることができました。



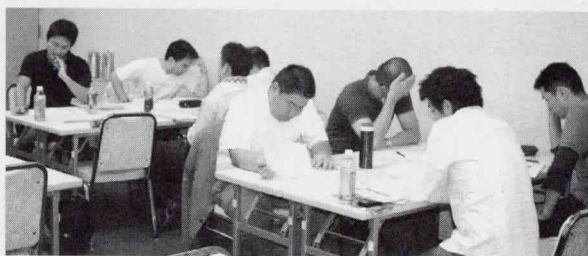
《第7回 閉塾式》

●と き：2009年9月15日（火）

●場 所：名古屋市内



加藤塾長より、閉塾にあたり塾生へ激励の言葉。



毎回実施したグループディスカッションもこれが最後。



各グループリーダーのみなさん、おつかれさまでした。今後もよろしくお願いします。



産政塾歴代卒業生

※組織名は参加当時の名称

第2期生		(14名)
朝位	克	トヨタ自動車(株)
伊藤	哲	全トヨタ労働組合連合会
太田	雅也	名古屋鉄道(株)
大町	重人	アイシン精機(株)
桑山	幸次	(株)東海銀行
小西	正晃	日本電装労働組合
高橋	恭弘	トヨタ自動車労働組合
種市	章	豊田合成(株)
丹羽	漸	中部電力(株)
松下	恭規	日本電装(株)
水野	和明	全松坂屋労働組合
水野	真二	アイシン労働組合
山内	潔	トヨタ車体(株)
萬谷	孝之	(株)松坂屋

第1期生		(14名)
江口	光市	全トヨタ労働組合連合会
尾関	勝隆	(株)松坂屋
加藤	宏幸	日本電装(株)
甲村	正男	トヨタ車体労働組合
清水	和博	松坂屋労働組合
鈴木	智博	中部電力(株)
高木	英樹	名古屋鉄道(株)
土屋	昇大	(株)東海銀行
中山	直人	トヨタ自動車労働組合
平野	富広	日本電装労働組合
本田	文利	豊田合成労働組合
前沼	聡	アイシン労働組合
宮崎	直樹	トヨタ自動車(株)
安井	雅章	アイシン精機(株)

第4期生 (16名)

北村 直久 日本電装労働組合
 竹内 順治 豊田合成労働組合
 朝日 和寛 日本電装(株)
 田中 義和 トヨタ自動車労働組合
 村田 滋 (株)東海銀行
 沢田大八郎 豊田自動織機労働組合
 原 年幸 トヨタ自動車(株)
 中村 武司 アイシン精機(株)
 宮坂 和行 松坂屋労働組合
 山田 法夫 名古屋鉄道(株)
 秋葉 覚 中部電力(株)
 駒沢 修 アイシン労働組合
 岡 啓視 中部電力労働組合本部
 加藤 秀夫 トヨタ車体労働組合
 松野景之介 トヨタ車体(株)
 相原 康伸 全トヨタ労働組合連合会

第3期生 (14名)

石鍋 寿久 トヨタ自動車労働組合
 大島 一峰 アイシン精機(株)
 大西 勝彦 豊田自動織機労働組合
 神谷 直 アイシン労働組合
 岸田 竜茂 中部電力(株)
 雲井 浩 丸栄労働組合
 近藤 郁也 トヨタ車体(株)
 島川誠一郎 トヨタ自動車(株)
 関谷 俊司 日本電装(株)
 竹下 裕之 トヨタ車体労働組合
 塚本 和宏 全松坂屋労働組合
 遠山 泰弘 日本電装労働組合
 深谷 修 豊田合成(株)
 宮川 学 名古屋鉄道(株)

第6期生 (15名)

林 恭吾 丸栄労働組合
 竹内 秀明 中部電力(株)
 近藤 均 トヨタ車体(株)
 光岡 博 アイシン労働組合
 向井 克行 日本電装(株)
 説田 公人 トヨタ自動車(株)
 中村 文彦 松坂屋労働組合
 高橋 誠 トヨタ自動車労働組合
 本田 武志 アイシン精機(株)
 伊藤 裕章 豊田合成(株)
 大島 秀一 名古屋鉄道(株)
 森 晴哉 日本電装労働組合
 横田 晴充 (株)東海銀行
 桑山 完治 中部電力労働組合本部
 石川 勝幸 全トヨタ労働組合連合会

第5期生 (17名)

斉藤 正彦 丸栄労働組合
 橋本 亨 トヨタ車体(株)
 田島 健一 松坂屋労働組合
 稲川 敦之 名古屋鉄道(株)
 荒谷 育三 日本電装(株)
 高井 信弘 豊田合成(株)
 長尾 基晴 アイシン精機(株)
 洲崎 典之 日本電装労働組合
 渡辺 潔 アイシン労働組合
 上田 信也 全トヨタ労働組合連合会
 杉浦 一成 トヨタ車体労働組合
 内田 厚 中部電力労働組合
 加藤 泰孝 中部電力(株)
 荻野 勝彦 トヨタ自動車(株)
 加藤 昭夫 トヨタ自動車労働組合
 磯部 謙二 日本特殊陶業(株)
 二木 芳樹 (株)東海銀行

第 8 期生 (22 名)

有賀 文昭 中部電力労働組合
 伊藤 賢一 トヨタ車体(株)
 伊藤 友博 松坂屋労働組合
 岩城 史憲 名古屋鉄道(株)
 植松 良太 全トヨタ労働組合連合会
 粕谷 浩二 豊田市役所
 川村 淳一 豊田工機労働組合
 栗栖 秀人 (株)東海理化
 佐野 弘忠 中部電力(株)
 杉浦 公紀 アイシン労働組合
 中條 喜之 (株)デンソー
 所 秀樹 関東自動車工業(株)
 丹羽 広志 豊田合成労働組合
 根本 恵司 トヨタ自動車(株)
 服部 健司 デンソー労働組合
 早川 範一 (株)松坂屋
 廣瀬 登 (株)東海銀行
 船戸 正巳 アラコ(株)
 前田 孝広 丸栄労働組合
 前田 直人 トヨタ車体労働組合
 百瀬 和典 トヨタ自動車労働組合
 森本 浩二 アイシン精機(株)

第 7 期生 (17 名)

川村 博隆 アイシン労働組合
 阿久津正典 豊田市役所
 村瀬 俊 日本電装(株)
 河路 直人 豊田合成労働組合
 小林 雅昭 全トヨタ労働組合連合会
 臼井 満 松坂屋労働組合
 星野 悟 中部電力(株)
 柴田 伸彦 中部電力労働組合
 小倉 克幸 トヨタ自動車(株)
 勝美寿美子 アイシン精機(株)
 西田 明生 トヨタ自動車労働組合
 高橋 剛 日本特殊陶業(株)
 吉田 茂 トヨタ車体(株)
 三川 高市 丸栄労働組合
 高井 康之 (株)東海銀行
 吉川 篤史 名古屋鉄道(株)
 田中 英司 日本電装労働組合

第10期生 (21名)

石川 輝彦 アイシン労働組合
 奥田竜太郎 トヨタ車体(株)
 糟谷 道広 (株)デンソー
 門 孝裕 松坂屋労働組合
 川上 茂浩 中部電力(株)
 小坂 好伸 アイシン精機(株)
 近藤 理史 豊田市役所
 杉本 道男 日本特殊陶業(株)
 鈴木 亨 トヨタ車体労働組合
 鈴木 康紀 アラコ(株)
 高橋 勝将 デンソー労働組合
 丹下 隆吉 トヨタ自動車(株)
 徳増 達生 アスモ(株)
 戸田 覚 (株)東海銀行
 西井 俊哉 丸栄労働組合
 船間 淳也 名古屋鉄道(株)
 松田 斉 全トヨタ労働組合連合会
 武藤 成洋 豊田合成(株)
 安田 幸治 トヨタ自動車労働組合
 矢田 勝弘 フタバ産業(株)
 常 兆 名古屋大学

第9期生 (21名)

足立 貴彦 松坂屋労働組合
 石井 直生 トヨタ自動車(株)
 伊藤 裕介 豊田工機労働組合
 宇野 庄一 全トヨタ労働組合連合会
 江口 淳 豊田合成(株)
 見城 篤 中部電力(株)
 榊原 悦人 丸栄労働組合
 坂口 登 (株)東海銀行
 柴田 徹哉 豊田市役所
 須崎 辰彦 トヨタ車体労働組合
 玉木 健二 中部電力労働組合本部
 恒川 智行 アイシン労働組合
 中出 裕之 関東自動車工業(株)
 浜口 誠 トヨタ自動車労働組合
 林 克憲 (株)デンソー
 平岡 典明 アイシン精機(株)
 古川 豊 日本特殊陶業(株)
 本多 篤 トヨタ車体(株)
 前川 武治 デンソー労働組合
 山田 泰準 名古屋鉄道(株)
 山本 雅章 アラコ(株)

第 12 期生 (22 名)

内田 幸代 豊田市役所
 江尾 国博 名古屋鉄道(株)
 梶川 拓也 中部電力(株)
 柏谷 幸彦 豊田合成(株)
 加藤 秀人 トヨタ車体労働組合
 後藤 泰司 丸栄労働組合
 近藤 雅人 (株)豊田自動織機
 高橋 正典 デンソー労働組合
 武田 純康 トヨタ自動車労働組合
 竹中 隆志 松坂屋労働組合
 鶴見 実男 アイシン労働組合
 寺西 知雄 東邦ガス労働組合
 中里 浩一 (株)U F J 銀行
 中村 明史 中部電力労働組合本部
 芳賀 章弘 トヨタ車体(株)
 長谷部知英 フタバ産業(株)
 羽根 章人 アラコ(株)
 本田 隆英 アイシン精機(株)
 松尾 正樹 (株)デンソー
 水野 勝博 全トヨタ労働組合連合会
 村瀬 政彦 トヨタ自動車(株)
 若松 真理 全ユニー労働組合

第 11 期生 (25 名)

池浦 芳一 トヨタ車体(株)
 石本 誉 デンソー労働組合
 板倉 智宏 全ユニー労働組合
 上別府伸一 アイシン労働組合
 大畠 隆之 (株)豊田自動織機
 岡本 雅典 アスモ労働組合
 小野田和広 丸栄労働組合
 柴田 博 フタバ産業(株)
 締次 顕治 松坂屋労働組合
 常 兆 名古屋大学 大学院 国際開発研究科
 杉下 昌明 東邦ガス労働組合
 大東 輝彦 (株)東海銀行
 高木 敏光 名古屋鉄道(株)
 高田 学 アイシン精機(株)
 滝野 仁 日本特殊陶業(株)
 武田 和則 中部電力労働組合本部
 鶴岡 光行 トヨタ自動車労働組合
 中村 英行 アラコ(株)
 林 賢士 豊田合成(株)
 三谷 建介 中部電力(株)
 武藤 俊和 トヨタ車体労働組合
 森 崇博 全トヨタ労働組合連合会
 山崎 一生 トヨタ自動車(株)
 横井 雅弘 (株)デンソー
 渡辺 明子 豊田市役所

第 14 期生 (22 名)

浅野 清輝 東海理化労働組合
 大川 博 デンソー労働組合
 奥 丈治 株式会社松坂屋
 梶田 進 トヨタ車体株式会社
 梶原 昭二 豊田自動織機労働組合
 川崎 貴之 株式会社デンソー
 栗原 尚子 アイシン精機株式会社
 小嶋 直樹 松坂屋労働組合
 佐藤 源信 アラコ株式会社
 白井 崇夫 刈谷市役所
 鈴木 輝行 全トヨタ労働組合連合会
 鈴木 利幸 中部電力労働組合
 苑田 隆之 中部電力株式会社
 千種 徳充 トヨタ車体労働組合
 柘植 孝悦 豊田市役所
 長岡 享史 トヨタ自動車株式会社
 藤原 誠二 アラコ労働組合
 堀田 大祐 名古屋鉄道株式会社
 山口 健 トヨタ自動車労働組合
 山下 邦彦 アイシン労働組合
 吉田 研太 株式会社豊田自動織機
 渡辺 憲司 丸栄労働組合

第 13 期生 (21 名)

井上 正勝 トヨタ自動車労働組合
 内田 恭介 中部電力労働組合本部
 梅田 清孝 フタバ産業(株)
 太田 正樹 松坂屋労働組合
 門井 徳孝 デンソー労働組合
 熊崎 俊哉 トヨタ車体(株)
 佐野 智弘 アイシン精機(株)
 鈴木 定晴 トヨタ車体労働組合
 鈴木 武 名古屋鉄道(株)
 田中 亘人 (株)豊田自動織機
 埴和田光紀 豊田市役所
 出口 隆浩 全トヨタ労働組合連合会
 中川 年史 アイシン労働組合
 野坂 利次 トヨタ自動車(株)
 服部 淳二 豊田工機労働組合
 水野 雅通 アスモ労働組合
 宮城 英樹 (株)デンソー技研センター
 村口 文希 刈谷市役所
 森 章浩 (株)U F J 銀行
 森 勝 東邦ガス労働組合
 山本 徹真 アラコ(株)

第 16 期生 (24 名)

青山 泰孝 全ユニー労働組合
 赤川 直也 トヨタ紡織労働組合
 安東 英二 松坂屋労働組合
 大橋 弘章 中部電力株式会社
 小川 恵孝 トヨタ紡織株式会社
 加藤 基成 株式会社豊田自動織機
 小西 圭造 トヨタ自動車労働組合
 小林竜太郎 デンソー労働組合
 酒井 推幾 豊田工機労働組合
 佐宗 晋治 アイシン精機株式会社
 佐々 慎治 トヨタ車体株式会社
 高橋 鉦二 トヨタ自動車株式会社
 竹下太一郎 全トヨタ労働組合連合会
 田中丸 庸 株式会社デンソー
 富田 晃弘 名古屋鉄道労働組合
 中根 陽造 東邦ガス労働組合
 中野 将 豊田市役所
 服部 敦哉 豊田自動織機労働組合
 番条 喜芳 中部電力労働組合
 平野 元章 刈谷市役所
 宮川修一郎 フタバ産業株式会社
 山口 覚 アイシン労働組合
 吉續 武俊 トヨタ車体労働組合
 吉原 昭浩 株式会社松坂屋

第 15 期生 (25 名)

池田 真生 刈谷市役所
 石原 英児 名古屋鉄道労働組合
 海野 孝宏 アイシン精機株式会社
 越田 弘幸 松坂屋労働組合
 大河原宏樹 アラコ株式会社
 大橋 一之 全トヨタ労連組合連合会
 片山 伸子 豊田市役所
 倉沢 範行 中部電力労働組合
 洲崎 浩一 アイシン労働組合
 洲崎 晃嘉 豊田合成労働組合
 千田 路征 トヨタ車体労働組合
 立松 学 トヨタ自動車労働組合
 棚橋 克成 株式会社松坂屋
 奈須 克昭 トヨタ車体株式会社
 野々垣 一 株式会社豊田自動織機
 早矢仕 環 豊田工機労働組合
 原 誠治 アスモ株式会社
 藤牧 知広 中部電力株式会社
 別宮健一郎 丸栄労働組合
 水越 宏明 デンソー労働組合
 山浦 宏行 トヨタホーム株式会社
 山添 勇人 株式会社デンソー
 山本 浩晃 全ユニー労働組合
 吉川 浩二 豊田自動織機労働組合
 吉本 雅教 トヨタ自動車株式会社

第 18 期生 (25 名)

山口 久雄 東海理化労働組合
 吉清 一博 トヨタ自動車株式会社
 稲垣 隆宏 東邦ガス労働組合
 大倉 吉貴 トヨタ紡織株式会社
 太田 洋純 名鉄労連
 河野 成康 アイシン労働組合
 北原 航太 株式会社東海理化
 金原 昭仁 豊田市役所
 作山 淳 トヨタ自動車株式会社
 佐藤 正樹 松坂屋労働組合
 島田 裕毅 株式会社デンソー
 白井 雅子 アイシン精機株式会社
 鈴木 雅司 トヨタ車体株式会社
 高橋 弘行 中部電力労働組合
 田中栄太郎 デンソー労働組合
 中川 利文 中部電力株式会社
 早川 啓太 刈谷市役所
 平賀 隆 全トヨタ労働組合連合会
 広田 真朗 株式会社豊田自動織機
 藤田 茂徳 丸栄労働組合
 舟橋 史洋 トヨタ車体労働組合
 古川 憲 豊田自動織機労働組合
 水野 栄 豊田合成株式会社
 森谷 東也 トヨタ自動車労働組合
 矢野 悟 フタバ産業株式会社

第 17 期生 (27 名)

荒居 昭治 全ユニー労働組合
 石田 保志 名古屋鉄道労働組合
 井戸田章弘 トヨタ車体労働組合
 岩田 将弘 アイシン精機株式会社
 大澤 秀樹 東邦ガス労働組合
 大橋 俊介 トヨタ自動車株式会社
 加藤 章子 刈谷市役所
 加藤 明人 全トヨタ労働組合連合会
 木村 匡伸 デンソー労働組合
 古賀 博義 アイシン労働組合
 近藤 邦博 豊田市役所
 佐々木澄和 東海理化労働組合
 塩谷 武司 トヨタ紡織株式会社
 志岐 宣浩 豊田工機労働組合
 品川誠二郎 株式会社松坂屋
 田中 光明 アスモ労働組合
 野田 雅子 株式会社豊田自動織機
 長谷川真次 豊田自動織機労働組合
 樋山 卓造 東邦ガス株式会社
 前川 紘子 丸栄労働組合
 益田 寛 トヨタ車体株式会社
 増田 裕介 中部電力株式会社
 松井 正和 松坂屋労働組合
 松本雄一郎 株式会社デンソー
 水谷雄一郎 豊田合成株式会社
 三谷 勝行 トヨタ自動車労働組合
 村井 真一 中部電力労働組合

第 20 期生 (26 名)

池田 篤人 トヨタ自動車株式会社
 石川 公威 デンソー労働組合
 伊藤 正人 トヨタ車体株式会社
 井前研太郎 トヨタ紡織株式会社
 遠藤 登 東邦ガス労働組合
 太田 敏 東邦ガス株式会社
 大野田有良 ジェイテクト労働組合連合会
 沖本 匡司 中部電力株式会社
 柿本 理恵 豊田市役所
 蔵田 英登 アイシン精機株式会社
 鈴木 貴裕 丸栄労働組合
 鈴木 祐生 全トヨタ労働組合連合会
 田中やよい 株式会社松坂屋
 田村 元 株式会社デンソー
 外山遥一朗 株式会社豊田自動織機
 内藤 隆史 刈谷市役所
 長倉 健司 豊田自動織機労働組合
 中村 隆誠 全ユニー労働組合
 永谷 啓介 トヨタ紡織株式会社
 三宅 洋右 豊田合成労働組合
 山口 智史 トヨタ車体労働組合
 與後 誠 中部電力労働組合
 横井 功 名古屋鉄道労働組合
 吉川 孝人 東海理化労働組合
 六城 雅隆 アイシン労働組合
 脇坂 一行 トヨタ自動車労働組合

第 19 期生 (28 名)

新金 恵介 アイシン精機株式会社
 泉 祐輔 東邦ガス株式会社
 上田 治 トヨタ紡織株式会社
 大田 秀幸 ジェイテクト労働組合連合会
 荻野 聡子 松坂屋労働組合
 小澤 真純 関東自動車工業株式会社
 小野 彰之 株式会社東海理化
 北村 美帆 デンソー労働組合
 日下喜与美 アイシン労働組合
 熊谷 靖公 株式会社デンソー
 近藤 智也 全ユニー労働組合
 坂西 記明 名古屋鉄道労働組合
 佐々木麻子 刈谷市役所
 高橋 慎二 豊田合成株式会社
 高橋 哲也 全トヨタ労働組合連合会
 筑尾 康範 丸栄労働組合
 中條 圭祐 豊田市役所
 塗師尾 充 トヨタ車体労働組合
 中和田教仁 中部電力株式会社
 堀内 清明 豊田自動織機労働組合
 松浦秀登志 東邦ガス労働組合
 松尾康史郎 愛知製鋼株式会社
 三田地勇也 中部電力労働組合
 皆川 和孝 トヨタ車体株式会社
 森下 宏浩 トヨタ自動車労働組合
 柳瀬 翼 株式会社豊田自動織機
 山口 久雄 東海理化労働組合
 吉清 一博 トヨタ自動車株式会社

産 政 塾

2010 年 9 月 第 11 刷発行

編 者 財団法人 中部産業・労働政策研究会

住 所 〒 471-0833

愛知県豊田市山之手 8 丁目 131 番地

全労済豊田会館 3 階

T E L 0565-27-2731

印刷所 (有) 第一プリント社

製本所 山 本 製 本

塾 政 産

塾 長 加藤 裕治

塾 生

トヨタ自動車株式会社	池田 篤人
デンソー労働組合	石川 公威
トヨタ車体株式会社	伊藤 正人
トヨタ紡織株式会社	井前研太郎
東邦ガス労働組合	遠藤 登
東邦ガス株式会社	太田 敏
ジェイテクト労働組合連合会	大野田有良
中部電力株式会社	沖本 匡司
豊 田 市 役 所	柿本 理恵
アイシン精機株式会社	蔵田 英登
丸 栄 労 働 組 合	鈴木 貴裕
全トヨタ労働組合連合会	鈴木 祐生
松 坂 屋 労 働 組 合	田中やよい
株式会社デンソー	田村 元
株式会社豊田自動織機	外山遥一郎
刈 谷 市 役 所	内藤 隆史
豊田自動織機労働組合	長倉 健司
全ユニー労働組合	中村 隆誠
トヨタ紡織労働組合	永谷 啓介
豊田合成労働組合	三宅 洋右
トヨタ車体労働組合	山口 智史
中部電力労働組合	與後 誠
名古屋鉄道労働組合	横井 功
東海理化労働組合	吉川 孝人
アイシン労働組合	六城 雅隆
トヨタ自動車労働組合	脇坂 一行

中 部 産 政 研 高橋 若葉